

部 報



昭和49年度

北海道大学馬術部

北大馬術部讃歌

作詩 三浦清一郎
作曲 滝沢南海雄

はるきたれば だいちひかーる
 しろがねのえんざん ゆめぼうぼうたり
 たからかにいま そいななけわれ
 らしゅんめのほまれあり
 ほまれあり ほく だい ほく だい お
 お わがほこう われらしゅんめの
 ほまれあり

北大馬術部讃歌

一、

春来たれば、大地光る
 銀の遠山、夢茫茫たり
 高らかに 今ぞ嘶け！
 われら駿馬のほまれあり

二、

時来たれば 旗をかざせ
 宵雲の旅路に 意気軒昂たり
 高らかに 今ぞ嘶け！
 われら駿馬のほまれあり

三、

雲流れて 旅路遙か
 奇春の孤杖 泥濘はばめど
 凜然と 進みて行かむ
 駿馬のほまれあるかぎり
 北大 / 北大 / おゝ我が母校
 われら駿馬のほまれあり



理想を追いかけて

乗りゆく者と

人の呼ぶ



全日学 吉野兄と北武号



全日学 柴沼兄と北勇号



全日学 本村兄と北隼号



祝勝パレード



ノーザンクロス号 離厩式



リヒト号 離厩式



四十九年卒部生と千里馬号
左より 江口兄 景山兄 相川兄 吉野兄
円内左より 佐伯姉 常田姉 阪上兄



一年目 日高合宿



ハイエイム号と水野兄



北燕号と本村兄

巻 頭 言

部長 河 田 啓 一 郎

昭和五十年の新春を迎え、皆様の御健勝を心からお慶び申し上げます。

昨年は、前部長半沢道郎先生の御退官を記念して、北大馬術部四十年の歴史をつづる写真集を企画しましたところ、皆様の絶大な御支援により、折からの狂乱物価の最中にもかかわらず、実に立派な本を刊行できましたことは、洵に御同慶にたえません。

御協力頂いた各位に心から御礼申上げると共に、編集に当られた諸兄の大変な御苦勞に深謝致します。

昨年はまた、しばらく低迷が続けていた競技成績の面においても、すでに御承知のような成果を挙げる事ができ、多少なりとも先輩諸兄の愁眉を開くことができたのではないかと思っております。このような好成績を収めることができたのは、現役部員諸君の努力は勿論であります。ここ数年勝利を味わうことができなかつた諸兄の数々の辛苦、熱心に指導して下さった方々の尊い御尽力、さらには学内外の多くの方々からの暖かい御支援のすべてが

凝集して、それらのこやしの上にはじめて今日華が咲き実を結んだのだと考えたいのです。

年頭にあたり、このことを肝に銘じ、部員一同さらに前進をめざして頭張る覚悟を新たにしておりますので、今年も尙一層の御声援と御指導をお願い申し上げます。

思いつくままに

学長 丹 羽 貴 知 蔵

このほど馬術部の部報に何か書くように言われたが、元来私は馬に乗ったこともないので馬術についても余り語るところを知らない。

しかし、そうかと言って馬術部と全く縁がないというわけではない。それは「北大馬術部創立四〇年記念写真集」の中で太秦先生が触れておられるように、私が昭和五年理学部化学科に第一期生として入学した折、その同級生の中に現在私の親友であり前馬術部部長の半沢君がいたし、またその時の教授の一人に現在函館高専の校長であり四代目馬術部部長を勤められた太秦先生がおられたのである。

このようなことから、半沢君からは馬の魅力について良く話を聞かされ、欲誘もされたものであるが、ついぞ今まで馬術というものをしないままに過ぎてしまったのである。

しかし、そうかと言って私がスポーツを何もしたかったというわけでは決してない。

以前、体育会の「北溟」にも書いたように、小学校では野球、中学では体操、高校ではボートなどの選手にもなるなど、いっばしのスポーツマンであったことを今もって自負している。今さら

言うまでもないことであるが、スポーツには「心身を鍛える」という言葉からもうかがわれるように「体力」の外に「精神力」即ち心の問題がその重要な部分を占めている。馬術とてこれは例外ではないであろう。しかし、私の素人考えかもしれないが、馬術についてはそれのみでない部分があるように思われる。

どのような種類のスポーツをする人でも、自分の使用する器具には愛着を持ち、そして大切にするのである。馬術の場合は、その器具にあたるものが感情のある「馬」という動物である。従って、そこには「人馬一体」という言葉のとおり、「馬との精神的なつながり」言いかえるならば「馬に対する愛情に基づくところの一体感」が存する必要があるということである。

ここに馬術の難しさがあると同時にまた限りない魅力があるゆえんであろう。

昨年、馬術部は七帝戦優勝、全日本学生馬術大会（障碍）個人優勝という輝かしい戦績をあげられたが、部員諸君にあっては今年は更に精神をつままれてよりよい戦績をあげられるとともに、心身の鍛練に努められるよう期待するものである。

昭和四十九年を顧みて

岡田光夫

昭和四十九年は、久し振りに朗報にめぐまれた年でありました。

戦績については、きっと、他の人が書くことと思えますので、重複を避けませんが、とにかく、北大馬術部に、一つの新しい芽が吹き出し、多くの現役部員の、大きな刺激となった事は事実でありましょう。

しかし、この年を迎えるまでに、私も幾度か部報に書きました。が、その「としどし」の主将が、この道を、と、きめて進んできた試行錯誤の連続の結果が、今日の花を開かせたものであると信じて居ります。又、別の言い方をしますと、永い間あたためられていた卵が、見事にふ化したと思つて居ります。

しかし、卵がふ化するにしても、自然の世界の事を考えますと、全く自力で卵から出てくるもの、又、親鳥が、からを破るのを助けてやって生まれて出てくるものもあります。

ただ、この二つの差は、自力で出てくるものは、生まれ出てく

るために全力を使い果し、しばらくは虚脱状態になって、強いものだけが生きのびるかわりに、親の力を少しでも借りて、生まれてきたものは、猶、余力を残して生まれてきて、親の庇護の下に、生まれながらにして、強く生きて行ける環境を、与えられているような気が致します。このたびの馬術部の成績は、私としては、自力ではい出したひなであると考えて居ります。このひなは、きっと丈夫な誰にも負けない鳥に、大きく成長することを硬く信じて居ります。

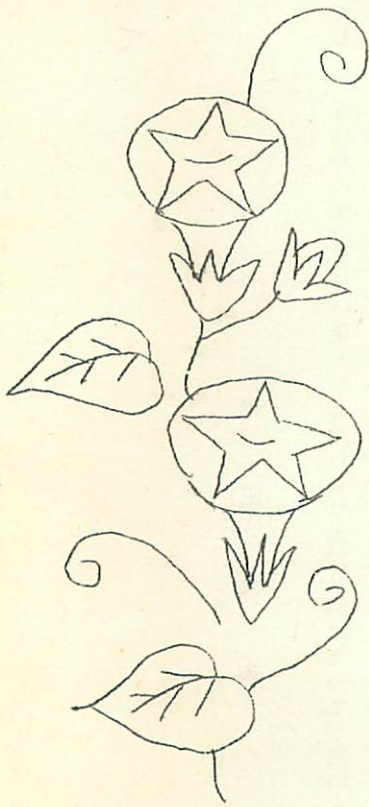
ただ、先程も申し上げました様に、全力をつくして生まれてきただけに、ひ弱さが心配であります。

したがって、諸先輩に御願ひしたい事は、このひなに、えさを充分与え、少しでも早く成長させ、そして永が跳きする体力（技術）を備える様何かと、お心遣いを御願ひ申し上げたいのであります。

私も、春から、昔貸与馬で鍛えられた知識から「この馬がひっ

かけるのは、馬が頭頸を下げて、前にのめる様な姿勢でひっかけているのだらう。少し頭頸を上げさせなさい。それには、騎手が身体を起して、強く推進し、後驅の踏込みをよくすれば、自然頭が上ってくる様になるよ。」と、云ったわづかばかりの「しさ」を部員諸君が、素直に受け入れてくれた事も、わづかばかり力になっているのかなあと考えます。

どうぞ、皆様にも体験なり、或は、馬術の基本なりの中から、アドバイス下さる様、重ねて御願ひ申し上げ、今後の馬術部の行方方を見守っていただきたいと思います。



目 次

○ 巻頭言	部長	河 田 啓一郎
○ 思いつくままに	学長	丹 羽 貴知蔵
○ 昭和49年を顧りみて	監督	岡 田 光 夫
○ 役員報告		
主将	三年目	添 田 昌 一 1
主務	三年目	阿 部 一 哉 2
副務	二年目	荒 井 隆 3
会計	三年目	柴 沼 俊 4
飼育・馬匹	三年目	水 野 豊 香 7
馬具備品	二年目	横 沢 敏 夫 8
作業	二年目	桑 田 壮 平 8
文化	二年目	佐 野 淳 之 9
薬品	二年目	石 川 淳 子 10
記録	三年目	若 松 光 子 10
茨城国民体育大会	三年目	添 田 昌 一 13
七帝戦	三年目	水 野 豊 香 20
全日本学生三大馬術競技	三年目	本 村 洋 文 21
○ 調教報告		
北隼号	三年目	本 村 洋 文 22
北武号	四年目	吉 野 勝 之 26
北勇号	三年目	柴 沼 俊 33
北秀号	三年目	常 田 和 子 38
千里馬号	四年目	景 山 博 文 40
スターライト号	三年目	添 田 昌 一 43
羊蹄号	四年目	相 川 宗 蔵 45
天龍山号	三年目	水 野 豊 香 50
疾風号	二年目	荒 井 隆 52

○ 離厩報告			
リヒト号	四年目	江口州志	54
ノーザンクロス号	四年目	景山博文	56
○ 離厩馬の過去			58
○ 入厩報告			
北燕号	三年目	本村洋文	60
ハイエイム号	三年目	水野豊香	62
○ 部生活報告（一年目の雑言）			
馬術部に入部してみた	一年目	長屋清隆	64
馬に乗ること	一年目	笠間淳子	64
盛岡の思い出	一年目	大東美奈子・水井とく子	69
短い雑感	一年目	半浦剛	67
馬と人と	一年目	本城敬文	68
部員生活	一年目	森 巖	69
部生活	一年目	竹林圭介	69
馬から落ちて落馬した	一年目	山川 恵	70
○ 同好会より		市川瑞彦	71
○ 高松先生の思い出	第6代部長	半沢道郎	72
○ 高松正信先生を悼る	昭和7年卒	永松四郎	74
○ 高松正信先生のこと	昭和8年卒	武田朝男	75
○ 年奇りの冷水	第6代部長	半沢道郎	77
○ 部員諸兄への手紙	昭和42年卒	近藤喜十郎	78
○ 部員紹介			82
○ 名簿			101

役員報告

主将

馬か人か

添田昌一

今、幸運の女神は北大馬術部に降臨しえみかけたのである。

我々のとるべき道は一つである。北大馬術部の黄金時代を雲の上から引きずり下ろしてやることである。こんな夢のようなことも、不可能ではないと、我が部員は感じていることだろう。現実の厳しさも知らねばならぬ。今年、全日学で優勝できたのも、団体の四位になれたのも、国立七大学戦で優勝できたのも、幸運のなせる技であった。だが全国に「北大はここに健在なり」と旗を上げる効果は充分に果たしたと思う。全日学に四頭も出場できたこと、これも今考えればうそのようであり、現実のことであった。自分の努力、先輩諸兄の努力が実を結んだのである。

数々の戦果は、小栗さん、岡田監督、松井さんなど特に近い。Bの方々のお蔭と申しています。でも我が部員達は、そんなことに心をうばわれはならぬ、我らの前には厳しい道が続くのであるから、一心に直進せねばならぬ。訳もわからぬ雲をつかむ様なことであるが、解決せねばならぬ問題である。

僕は信じる。これを解決するのは毎日懸命に乗る、考える、大きな不安を小さな努力、毎日の努力で乗り切ることであると。

相手が馬であることのために、人間が先走ったり、馬に乗せられていられるという様な消極的なことは許されぬ。下手なら下手なりに毎日自分のできる範囲で、馬を思いのままに動かしていかなければならぬ。これが考えるところだと思ふ。方法をこうしなければ、考えて作り出さねばできぬ。だから一人で考え込んでいてはならぬ、どんどん打ち出して行かねば、そこに北大方式が生き上るのだと思ふ。

馬に対する、いつくしみと同時に人馬の技術の向上に全勢力を費やしていかなくてはならない。これが個人で終ることがあつてはならぬ。一学生、四年間で終つてはならぬ、北大の続く限り、北大馬術部の続く限り、向上を目指した学生のかたまりでなければ。

馬術部の活動は、こういつた試合の形でしか表われぬものばかりではない。どんな形のものも許されるはずである。だがその個人は意味はどうであっても良い北大馬術部発展のためのものであれば、足をひっぱつてはならぬ。我々は人間である。弱い人間である。皆で力を合わせずに何ができようか？

我々は金銭的にも、地域的にも、めぐまれているとは言えぬ。だが進まねばならぬ。自分の環境の中でできるだけのことをすれば充分に通用するのであるから。

我が北大にあって、馬術方式に関する問答がくり返され、僕らもその一画で聞いて育った。その中で吉野さんは「現場主義」現場監督的な見方による人馬の養成ということを言われた。

妙な言葉のひびきであるが、我々のもつとも欠けていた所ではないかと思う。夢ばかり追うのではない現実を見据え、作り出すというにはあるまいか、だがそればかりではない。同時に我々は見果てぬ夢を追い続けるのである。毎日乗ることを大事にせねばならぬ。

馬は毎日何かにふれ、毎日呼吸しているのであるから。

主務

走りながら考える

阿 部 一 哉

去年の十月主務になって以来三ヶ月が過ぎた。今最高に痛感するのは、田中前首相ではないが、『走りながら考える』ということである。「バケツがない、なんとかしなくては」「——の手配だ！」——の書類出さねば」等、雑多なこまごましたことが毎日のようにあり、それをこなしながら、大きな目でクラブのことを考えなければならぬのが主務の役目だ。代々の主務の人をみて感心するのは、こともなげに、ひょうひょうとやっていたことだ。主務の仕事一つとっても「任重く道遠し」という気がする。なんか、迷入ってきたのでこの辺で本題に入ります。

現在、主務の目から見ると、問題の課題が大きくみて二つあります。ひとつは、財政もうひとつは施設についてであります。まず、財政問題について考えてみます。これはいつの代でも頭を

痛くしたことだろうと思います。かんたんに言えば、金が足りないということなんです。このことが部内における最も重要なことの一つになるわけです。インフレの世の例にもれず、前年のことを参考にするのが非常にむずかしくなっているのです。ぼくが入学した七二年当時の比較においてすら二倍になっているわけで、親の資送りが増えず、支出だけが増え、その狭間に立ちすくんでるだれかの姿に似てるような気がします。学馬連、学生部、etc. からの補助の伸び率と必要最低経費（馬を乗れる状態に保つこと）の伸び率の差がなんと、一〇〇%にならんとしている今の状態が、まさに離厩馬を生み空の馬房の存在を許すということになります。現在の部員数二八名さらに新入部員のことを考えると、九、十頭では若干さびしいのですが、そこに追い込まざるを得ないということは、残念ながら現実です。さて、いかにして活路を見い出すか。まず、上げられるのが学生部からの補助を大巾に増してもらうことです。七〇万では、四頭を飼っておくことすらできないわけで、来年度は、春闘なみのペアを獲得したいと考えております。しかしながら、体育系の予算の四分の一弱を当部が占めている現状であり、情勢は易しくはありません。でも、部の性格さらに、他のクラブ員と比較してみても、バイトはかたり多いなど、要求する理由はなんぼでもあり、お先きまっ暗ではありません。

つきに上げられるものとして、アルバイトです。今年度も一〇〇万円ほどしております。その他に現物支給のバイトもあり、かなりきついものでした。しかし、バイトは宿命であり運営に影響しないかぎり、したければなりません。

さらには、やはり、援助です。「やるからには自らで……」と

いう見方があり、そして、それは正しいと思います。支出をできるだけ節約して、ていねいにやりくりしていかなければならぬのは当然で、それもせずに他力本願になるといふのは、好況期の企業みたいなもので、馬術部のことではありません。しかし、それをした上でさらにどうしようもないとき、どうすればよいのか。やはり、援助を期待することになるわけです。とくに、その面では、OBの方々に試合の折、後援会、そして来訪の折にお世話になっております。これからも口うるさくお願いすることになると思います。批判ともどもよろしく願ひします。

次に施設の問題ですが、これは財政に負うところが多く、やりにくいことの一つです。その一つ、砂——去年も、東京OB会、学生部からの補助と、部の負担によって、入れたのですが、なにしる地盤が悪く、一説によると暗きよがその役目を果さなくなつたそうで、まさに雨降って地固るといふ具合です。馬の肢への影響が今年も心配されます。部のほうも、砂を入れるだけの余裕がなく、痛い頭で暮しております。さらに障害も新しく作らなければならぬなど、その実行が易くないだけに、手付かず状態です。春先までには、実現の方向で持っていきたいと思ひます。

ところで、在札の後援会員であられる、佐合氏氏より鏡（合わせると六畳ほどもある大きなもの）という願つてもない寄贈を受け、今学生部とも話しをしております。佐合氏にあらためて感謝いたします。これにより、体育会本部から貸りるビデオテープなども、部の客観的な目の一つとなつて大いに役立つことであるうし、役立せなくてはなりません。

以上のように、これから先の課題のみが、目につく状態です。

『走りながら考える』いい意味で、このことばのもつてる意味を、主務という仕事に生かせるようにしたいと思います。

副務（OB係として）

荒井 隆

去年は四十四年卒の加藤先輩、水産学部へ移行された阪上先輩、現マネージャーの阿部先輩といっしよに、四十年記念アルバムの編集を行いました。その為かOB係という事で今年一年からさせていただく事になりました。

これから一年私がやる事の大きな目標は、いかに多くのOBのみなさんを我が部へ引き止められるかという事であると思ひます。活動の活発な東京OB会との連絡はもとより、全国にいらっしゃる諸兄との密接な関係の維持に努めたいと思ひます。

現在、馬術部後援会の幹事がいらっしゃらないので、後援会の事務もあわせて行なっているのが、私にとってはかなりの重責であります。在札の岡田光夫先輩、市川先輩等の御協力をして、一年無事だと思ひます。

先輩諸兄には、これからも暖かい御援助をお願いします。

会計

現在の財政状態と

今後の予想される危機について

柴 沼 俊

全日学に於いて輝しい優勝も全く野暮な事ながら、クラブあつての事であり、その基盤となる大切なもののひとつである会計状態について御報告致します。

本年度の方針として私が決めたことは、赤字を繰り越さないようにしようということだ。借金のある状態で次の代にクラブを渡して行くということは健全なクラブ運営ができず、必ず何処かに破綻が来るものだということは、明らかに予想されることだからです。もちろん今年一年で、昨年度の借金を返し、本年度も赤字を出さないということはそう簡単には、出来ないことかもしれないが、とにかく少しでも目標を達成するようにと考えて居ます。その策の一端として、各役職に予算書を提出して貰い、大体の予算を立てたこと、内部での怠慢を排除しなければと、部員の滞納金を解消する為六ヶ月の分割払いを行なっていることが上げられます。又、馬も出し今後もさらに出す必要に迫られています。では、十二月までのものを考えつつ、財政状態について説明致します。

	収入	A	B	C	支出	差
19739~12	173万	46%	49.6%	4.4%	146万	27万
19749~12	実質200万	43.1%	49.6%	7.3%	実質184万	16万

A: 部員による収入(部費、入部金、バイト等)
 B: 補助金(学馬連、体育会、OB等)
 C: その他

収入について
 上の表を参照して頂ければおわかりの通り、A Bも同じような割合で収入があつたのに、その全額の伸び悩みは支出の順調な? それに較べあまりに今後の財政状態に対し象徴的になつています。また、九、十二月は、学馬連からの援助やバイトの季節で一番収入のある時期であるということも考え合わせるとさらに見通しは暗くありません。

では、今後八月までの収入を予想すると、A 1六十六万、B 1二十万、C 1三十万、合計百十六万円ということになります。

支出について
 支出はなんといつても飼料代が非常なる値上がりを見せ、最たるネックとなっております。
 飼料を除いた予算を述べます。

	去 年 度 (729~748)	本 年 度 (749~12)	今 後 (751~8)	備 考
馬 具	110,000	49,000	60,000	
菓 品	113,000	116,000	70,000	値上りひどし
鉄 代	396,000	425,000 (内30万は去年の分)	500,000	"
作 業	38,000	11,000	30,000	
記 録	600	12,000	26,000	
主 務	95,000	38,000	60,000	
文 化	213,000	12,000	200,000	
速 征	395,000	431,000	330,000	全日学に行つたため と国鉄運賃値上り
その他	424,000	108,000	200,000	
			計 147,600	

ここで問題の飼料ですが、担当者による予算によりますと、濃厚飼料代は、現在の赤字(学生部の援助金が廻ったが足りない分)三十五万さらに月二十万円で八月まで百九十五万円になります。乾草はできるだけ維持するつもりですが、六月以降購入の必要性が出てきて、寝わらについても同様なことが言え、これが少なく見積っても十五万円かかる予定で、飼料代の合計は二百二十万円が支出されることになりました。

支出合計は三百五十七万六千円が今後予想され、二百十六万円の収入を引きますと、百四十一万六千円の赤字となります。これに学生部からの援助金が昨年までの額ですと八十二万円でありましたが、少なくとも百万円になるように交渉しておりますが、それでもまだ約四十万円の赤字が残ってしまいます。

この四十万円の解消には、馬をさらに離厩させる(これは限界があります)、さらにバイトをする(これにも限界があります)等が考えられますが、なかなかそれに対する制限も大きく、高度な政治問題となっております。

このような苦しい財政状態を顧りみて頂き、広く皆様の御理解と暖い心配りを願いますとともに、我々も、健全なクラブ運営を目指し頑張りたいと思っております。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
部員による収入	13260	9,000	7,885	10,500	23,856	9,000	271,849	150,900	641,565	186,813	16,890	42,840	1,384,363
補助金	11,600	5,000	0	145,000	0	0	0	39,260	2,500	914,000	96,100	9,000	1,224,460
その他	11,500	0	12,000	0	56,500	300	274,971	13,360	26,455	152,542	228,520	71,940	848,028
計	36365	14,000	19,885	155,500	80,356	9,300	546,820	203,460	670,520	1,253,355	340,342	123,780	3,321,851
飼料	201,100	0	80,000	0	0	0	2,800	0	194,350	221,240	302,232	3,000	1,004,722
馬具	0	6,700	0	4,900	19,410	21,740	29,060	0	7,250	18,415	5,600	21,396	134,465
蹄鉄	0	0	0	0	100,000	0	150,000	0	150,000	100,000	0	175,300	675,300
遠征	1,660	0	0	0	95,800	0	89,250	192,370	0	48,000	383,220	0	810,305
薬品	0	0	15,790	13,495	1,356	790	2,000	0	15,620	54,290	2,334	42,660	148,335
作業	0	0	0	0	1,940	730	13,135	6,420	1,000	960	7,580	4,230	32,095
記録	0	0	200	458	0	0	0	0	8,425	0	0	2,660	11,743
主務	2,770	0	3,645	12,900	36,398	0	6,880	5,794	11,900	620	14,848	10,420	111,175
文化	615	0	0	990	10,405	159,016	5,640	0	7,270	660	1,500	2,484	188,580
会計									630	376	920	0	1,926
その他	3,150	6,880	1,110	159,988	40,900	30,700	48,500	78,270	69,150	16,720	83,790	24,060	563,218
計	209,295	15,580	105,745	192,731	306,209	212,976	347,265	282,854	465,595	461,281	792,024	286,204	3,370,737

飼育・馬匹報告

水野豊香

飼育は吉野先輩から、馬匹は相川先輩から引き次ぐことになりました。馬体管理という面から両方を担当することになりました。

まず飼料関係からですが、昨年六、七月と毎年やっていた乾草づくりにかえて佐合氏の紹介で恵庭の水本牧場で乾草づくりのバイトをやりました。それで六〇〇梱包はいりたいへん助かりました。冬場の不足分は河田部長の紹介で日高の荒木牧場より購入し乾草に関しては、例年よりも楽に年を越すことができました。

燕麦、フスマが悩みの種で現在部馬十一頭ですが、学生部からの援助をすべてつきこんでも赤字になっています。寝ワラは小野氏の紹介によってなんとかギリギリの状態です。今年から農学部とポロと交換する契約をしましたから少しは楽になるのではないかと思います。たくさんのお世話になりながら、やっと今を維持していますが、これから増々この傾向は強くなるでしょう。しかし飼料代がなくなつて部馬を手離すという悲劇は絶対に避けたいものです。

次に馬匹関係なのですが、九月からのことを要約しますと、十月羊蹄の副鼻腔炎手術、十二月で完治、十一月リヒト号離厩、下旬に日高西山牧場より北燕号、東京春田先輩のところより北虎号入厩、十二月ノーザンクロス号マンホールに落下、一月末に完治してフロンティア乗馬クラブへ、同一月北虎号腰に帰因する跋行

離厩、服部乗馬センター（大阪）よりハイエイム号入厩、現在、牝馬五頭、牝馬二頭、馬四頭計十一頭で他に小野さん所有一頭がいます。馬体管理上小さなことはいろいろありますが、天竜山だけが今のところ問題があり、他は練習には問題ないと思われます。九月から、毎月一回の馬体重の測定を励行しています。

丁度我々が一年目の冬頃から夕方の手入れを各々一頭担当してやるのが習慣となり当時我々はなん度かストを起したものです。が今ではごく日常的なものになりました。技術的なことを云々するよりもまず馬と友達になることが一番だと思います。またそれが学生の特権でもあるようです。冬場になるとギム感覚感のみでやっているというのも事実です。それがないことには実際やって行けそうもありませんが、やはり本質的には馬はどうしているかを顔みてるかなというところから始まってほしいものです。管理管理と言いますが、それを踏まえた上で、おおらかにいっしょに遊んでいたっていいのじゃないでしょうか？

今年はいへん期待のもてる年となりそうです。馬あつてのクラブです。馬体の完調は必要条件です。後悔の残らぬようがんばりたいと思います。最後に今年もたくさんの人々に頼らねばならぬことがどんどん出てきそうです。その節はよろしくお願ひします。

馬具備品

横 沢 敏 夫

一年目の末から馬具備品の補佐をほぼ一年間務め、この十月から正式にこの任を仰せ付かいました。張り切っているところ、新たな心構えで立ち上がったところで、仕事はクラブ活動の基となる馬具、他の備品の整備、更に厩舎及び部室の設備（水道、ガス照明他）の整備と広汎に渡っています。

欲しいと思うものも今のクラブの財政状態からはとても満たされません。結局は整理整頓、今使えるものを無くさず壊さず、大切に扱い、壊れたものも修理して必要最少限の出費に抑えることが要求されています。現在は不足しているものとして特にありません。しかし何と困っているのは馬具、特に鞍の老朽化です。一月現で部馬は十一頭、これに対し鞍は十三騎あります。が、そのうち八騎は老朽化がひどく以前から立て洗いに修理に出している状態で、廃棄しなければならなくなるのも目に見えています。それでも今年のクラブは恵まれていました。前年には、岡田監督と大阪の服部緑地乗馬クラブから鞍を一騎づつ贈っていたとき、年が明けてからは、斎藤勝男兄から新品の鞍と鞞一式を贈っていただけそうです。本当にありがとうございます。

又、今一つの問題は手入れ道具、大工道具等備品の紛失です。不足しているものといえば工具くらいのもですが、今ある他の備品もカッカツで、どうにか間に合っているという状態です。

男ばかり（女性も若干はいます）ということが影響するの、或は物を大切に扱うことを忘れた時代の風潮なのか、次々と無くなって、ドロの中からサビついたベンチが出てくることなどしばしばでした。

部員諸君、先にも言った様に又常日頃から口をスッパクして言っているが、物を大切に扱って下さい。僕に出来る事といえば、必要を備品をいつでも使える様に整理し備えておくことだけです。今は整理もできていませんが頑張ってやっていきたいと思えます。

作業

馬術部における作業の重要性に対する

分析的かつ総合的かつ自己満足的考察

桑 田 壮 平

他の運動部には「作業」という役職はまずないと言っても過言ではない。従って我が馬術部ほど作業の多い運動部はないということになる。

では何故我が部には作業が多いのであろうか。その第一の要因は馬術部という運動部の性格によるものであろう。馬なしの馬術部はあり得ない。ところが馬は生き物であり、かつ一応人間よりも劣るとされている生き物であるため、そこに人間が面倒をみる

べき種々の世話というものが生じてくるわけである。では誰がその面倒をみるのか。当然私達馬術部に他ならぬ。(馬にとつてみればそう人間に偉そぶられては却つてありがた迷惑なところもあるかもしれないが。)そしてその世話がすべて結局は作業ということになるのだが、作業という役職から言えばそのすべてに関知するわけではなく、特に人間を何人か集めてする必要のあるものについてのみ「作業」と称して行なうのであるがやはりそれでもいろいろとあつて「全員作業」と称する大きなものは年になくとも十回、小さいのも含めれば二十回以上ある。

では次に、第二の要因と考えられるものは、「作業」はすべて協同するものであり、そこに一種の部員間の團結心が生まれるということであろう。これは要因ではなく結果であるとも言えるが、部員間の團結を固めるといことが部の存続の第一条件である以上、それに「作業」も一役買つてゐるといふ点で、やはり作業が多くなるのはその当然の結果と言へる。

しかしここで考えなければならぬのは「作業」がいくら部員の義務であると言つてもあくまでそれは部員の奉仕活動である以上、それが部員の負担になりすぎではならないということである。これは作業という役職の運営上非常に重要な問題であるが、それは作業日の調節、或いは作業の個人分担当の平均化によつてある程度解決することはできる。しかし究極的にはやはり部員の意志に頼らざるを得ないのである。

以上「作業」の重要性について自分勝手な独断的な意見を恥ずかし気もなく述べてきましたがこれで少しでも「作業」に対する理解を深めて頂ければ幸いです。自分としてもその責任を果たすべく精一杯努力する所存であります。

文化

文化とは何ぞや。

——保留現実直視是認不可解肯定。——

佐野 淳之

文化的でない人間が文化活動に携わつてゐる事は明らかに矛盾ではないか。否。その答は、マスコミ諸機関、出版社に露見する。すなわち、各人の隠れたる個性を秘かに、いとも不自然でないが如く露見し、己を棚に上げておいて白日の前に引き出す事を何の婚も無く出来るのが文化従事者の特権である。従つて当事者が文化的である必然性はどこにもない。

さてこれで私に対する弁護人の役目は終わった。では我々は何をすればよいのか。それは、馬術部に於ける個人の総体が馬術以外に向ける、なるべく共通の興味への勧誘である。しかし悲しいかな、文化と馬術との共存状態は如何に。全般にクラブ活動のありかたにも拘つてくる問題であるが、行動としての馬術はプラス零から無限大まで、また行為としての文化は負の無限大から正の無限大までの領域を持っており、かつ馬術大なり文化であるが故にその接点(限界)を把握することは容易な事ではない。私自身、

馬術、寮生活、学問、その他諸諸の駆け合った大海の混沌の中で
腕にしているのだから。

なにはともあれ、文化担当者に課された任務は、馬術部の個性
から出づる意向を吸収し、それを、全体との関連をとりながら回
転させていく事であろう。

文章は頭で書くのであって、体ではないから好加減な事を並べ
てしまった。

現在まで行なつて来た事と言えば、ビデオテープ、写真等に關
する事、その他いくつかの行事の企画ぐらいなものである。

情熱と怠慢の勝負に於いて、もう少し前者の方に軍配を上げて
やりたいと思つている。

乞御支援、乞御期待。

文化担当 主任 佐野 淳之

助手 半浦 剛

本 城 敬 文

研究生 その他大勢

薬 品

石 川 淳 子

薬品という役職には、薬品の管理ともう一つには、馬体管理に

通ずる薬品の知識の普及という仕事があると思います。前者はさ
ておき、後者については、私個人では、知識のなさから容易にで
きることはなく、獣医学部の水野兄、及び諸先輩の御努力に頼
るところがほとんどです。

昨年の十月は、馬房虫駆除のため、かなり高価ではありましたが、
シュパールという内服薬を、全馬に与えました。また、新し
い試みとして、ケイタン治療に、プリストサイクリンに加えても
う一つ、サルファ剤を溶かし込んだオリブ油を使用しています。
これは、突起物のようなケイタンに効果的をよりです。

これから、いろいろを新しい薬品がでてくるだろうし、また、
それらを、どしどし取り入れていくべきだと思います。と同時に、
日常多く使われている薬品についても、基本的な知識をまとめて
何らかの形で、部員に公表してゆきたいと思つています。

記 録

昭和49年度行事報告

若 松 光 子

4月 2〜7 合宿——新2年目対象

26 新歓コンパ

5月	3	第2回半沢杯馬術大会——於北大	12月	8	忘年会兼祝勝会
	11・12	東日本馬術大会——於馬事公苑			
	18・19	千葉氏講習会——於札幌	1月	2	初乗・初詣——北海道神宮
	25	お返しコンバ——於恵迪寮裏		6・9	強化練習
6月	2	第11回対酪農大定期戦——於北大	3月	1	追込レコンバ
	8・9	北大祭			
	22・23	第9回道自馬馬術大会——於北大		9	四大学定期戦——於北大
7月	14	3・4年目青草合宿、1年目日高合宿		21	対東北大学定期戦——於東北大
	14	盛岡遠征			
	24				
8月	1	北日本学生馬術大会——於岩大			
	1	旭川遠征			
	5				
	21				
	22・25	道大兼国体予選——於旭競			
9月	3	合宿——2・3年目			
	3	役員交代コンバ			
	8				
10月	1	合宿——1・3年目			
	1	道内親善馬術大会——於岩見沢競			
	6	国体・馬術——於茨城、美浦村			
	13				
	20				
	24				
11月	7	7大学定期戦——於馬事公苑			
	7	全日本学生3大馬術競技——於馬事公苑			
	8				
	17				
	25				

昭和49年度 戦績報告

対帯広畜産大学、酪農学園大学定期戦 3.10 畜大

- シニア戦 2位 畜・北・酪
- ジュニア戦 3位 酪・畜・北

第2回半沢杯馬術大会 5.3 北大

○ 小障碍

- | | | | | | |
|----|--------|------|---------|-------|-------|
| 1位 | ドンホッパー | 水野 3 | 満点 | バラージュ | 1'40 |
| 2位 | スターライト | 添田 3 | | | 1'45 |
| 3位 | 北勇 | 西田 2 | | | 1'46 |
| 4位 | 北勇 | 荒井 2 | | | 1落-4。 |
| 5位 | 羊蹄 | 相川 4 | (1反-3。) | | |
| 9位 | 千里馬 | 若松 3 | (2反-9。) | | |
| 失権 | 北秀 | 桑田 2 | | | |

○ 中障碍

- | | | | |
|----|--------|-----------|-----------------|
| 5位 | 北隼 | 本村 3 | (2落1反、t.o.1875) |
| 失権 | 千里馬 | 景山 4 | (ドラム倒し二段横木3反) |
| 失権 | 北武 | 吉野 4 | (山形三段3反) |
| 失権 | リヒト | 江口 4 | (竹柵、ドラム、山三) |
| 1位 | ドンホッパー | 小野 忠(北同好) | (満点) |
| 失権 | スターライト | 松井 亮(#) | (第7にて経違、2落) |

○ パルクール・ド・ジャス

- | | | | |
|----|--------|-----------|----------------|
| 3位 | 千里馬 | 景山 4 | (t.o. -4) |
| 4位 | 北勇 | 柴沼 3 | (2落、t.o. -275) |
| 9位 | 疾風 | 阪上 3 | (1落、t.o. -640) |
| 失権 | 北秀 | 常田 3 | (第3、ハンゴ3反) |
| 1位 | ドンホッパー | 小野 忠(北同好) | (1落、-10) |

札幌競馬場馬場開き試合 -56 札幌競馬場

○ 小障碍

- 1位 スターライト 添田3
2位 疾風 阪上3

東日本馬術大会 5.11, 12 東京馬事公苑

○中障碍

- 33位 北隼 本村3 (-17,
失権 北武 吉野4

○バルクール・ド・シャス

- 失権 北武 吉野4

対詔農学園大学定期戦 6.2

○小障碍

- | | | | |
|--------|-----|------------------------------|--------------------|
| 1位 北勇 | 桑田2 | } 満点バラージュ (51 ⁰) | |
| 2位 天竜山 | 水野3 | | (58 ⁰) |
| 3位 北秀 | 荒井2 | | (1反 -3) |
| 4位 北秀 | 常田3 | | (3反) |

○中障碍

- 1位 北武 吉野4 (満点)
2位 北隼 本村3 (-4)
4位 千里馬 景山4 (1落2反、t.o. -18)
棄権 リヒト 江口4 (ダブルにて人馬転)

○複合

- 2位 北武 吉野4 (満点) 馬場の点数不明
3位 スターライト 添田3 (##) "
4位 北隼 本村3 (") "
6位 北勇 柴沼3 (-10) "
9位 リヒト 江口4 (-675) "

第9回道自馬馬術大会 6.22, 23 北大

○小障碍

- 2位 天竜山 水野3 (満点バラージュ、1落、-4)

11位 北秀 常田 3 (1反、t.o. -85)
12位 羊蹄 相川 4 (2反、t.o. -140)

○中障碍

13位 千里馬 景山 4 (4落、1反、t.o. -2175)
14位 北武 吉野 4 (1落、2反、t.o. -2275)
15位 北隼 本村 3 (6落、t.o. -3025)
8位 ドンホッパー 小野 忠(北同好) (1反、t.o. -95)
失権 北秀 岡田光夫(#) (乾濠M字にて3反)

○複合

9位 スターライト 添田 3 (障:1落-10)
10位 北勇 柴沼 3 (障:3落1反、t.o. -4275。)
千里馬 景山 4 (障:3落1反t.o. -4825。)
北隼 本村 3 (障:4落t.o. -405。)
北武 吉野 4 (障:3落、-30。)

○六段

北武 110 落下 吉野 4
ドンホッパー 120 落下 小野 忠(北同好)

○選抜中障碍

失権 ドンホッパー 小野 忠(北同好) (最終斜三段にて3反)

北日本学生馬術大会 -8.1~5 岩大

○B障碍

1位 疾風 阪上 3
3位 天竜山 水野 3
3位 北武 桑田 2
3位 北勇 荒井 2
失権 羊蹄 相川 4
失権 北秀 常田 3
棄権 ノーザンクロス 景山 4 (フレグモーネ)

○中障碍

2位	スターライト	添田3	(全日学権利)
7位	北隼	本村3	(#)
9位	北勇	柴沼3	(#)
失権	千里馬	景山4	
失権	北武	吉野4	
失権	リヒト	江口4	

○総合

5浜	北隼	本村3	(全日学権利)
6位	北武	吉野4	(#)
失権	千里馬	景山4	(往路、ガードレールにて)
失権	北秀	水野3	(第1、机にて)

第21回北海道馬術大会兼国体予選 - 8.24, 25 旭川競馬場

○小障碍

5位	北武	佐藤2	(-11)
8位	北勇	横沢2	(-14)
失権	千里馬	桑田2	
失権	北秀	荒井2	

○婦人障碍

失権	北武	若松3	(ドラムバーにて)
失権	北勇	石川2	(場外)

○中障碍

12位	スターライト	添田3	(-16) (選抜中障権利)
16位	北勇	柴沼3	(-1975)
18位	北隼	本村3	(-36)
失権	千里馬	景山4	
失権	北武	吉野4	(ドラムバーにて)
失権	リヒト	江口4	
失権	羊蹄	相川4	
1位	ジョリー	鎌田正人(北同好)	(満点) (選抜中障権利)

○複合

13位	北武	吉野4	(-130, 0.)
17位	リヒト	江口4	(-1445, 0)
23位	北隼	本村3	(-1527, -15)
24位	スターライト	添田3	(-1487, -20)
25位	北勇	柴沼	(-1382, -37)
28位	千里馬	景山4	(-147, -59)
29位	天竜山	水野3	(-1341, -72)
30位	羊蹄	相川4	(-1592, -120)
31位	北秀	堂田3	(-1268, -158)
棄権	疾風	阪上3	(フレグモーネ)
9位	ジョリー	鎌田正人(北同好)	(-116, -7)

○六段

3位	北武	吉野4	2度目2~6落下
2位	ジョリー	鎌田正人(北同好)	2度目4~6落下

○選抜中障碍

1位	スターライト	添田3	(3回め、150完飛)
3位	ジョリー	鎌田正人(北同好)	(3回め、キケン)

道内親善馬術大会 - 10.13 岩見沢競馬場

○関門飛越

1位	ドンホッパー	竹林1	(満点 47")
8位	疾風	山川1	(" 60")
失権	北秀	左海1	(場外)
"	"	本城1	(")
"	天竜山	森 1	(ベル前スタート)
"	ノーザンクロス	半浦1	(")

○小障碍

1位	疾風	阿部3	満点バラージュ (t.o.-2)
5位	ノーザンクロス	平野2	(t.o.-45)
6位	ドンホッパー	佐野2	(t.o.-525)

棄権 千里馬

桑田 2 (足負傷)

○中障碍

3位 天竜山

水野 3 (1反、-3)

5位 ドンホッパー

水野 忠(北同好)

棄権 北秀

岡田 光夫(#)

茨城国民体育大会 10月21日〜24日

中障碍 14位 スターライト 添田(3)

大障碍 失権 スターライト 添田(3)

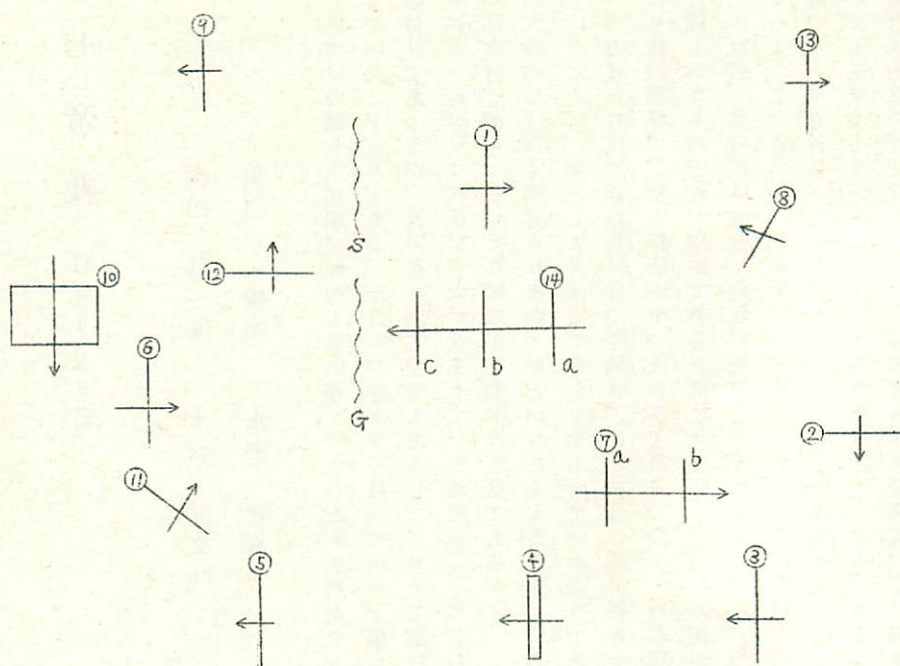
道大会に優勝し、国体に出場権をとった、スターライト号の紹介から、四七年一〇月に、主将の則近兄が斉藤勝雄氏と共に、門別のある牧場から買い入れた馬である。繁殖牝馬であった。小栗コーチの指導のもとに松井兄が調教して下さった後、現役の添田に約半年間、指導して下さり、ここに至った訳である。北大が長い間待ち望んでいた飛越馬の出現であった。

さて国体であるが、一〇月一〇日貨車積み茨城県美浦(みほ)村会場では、名前しか聞いたことのない名馬が集まっていた。人馬共に気後れもとれ、体調も上ってきたのは、中障の二日前位であった。当日はドジャブリの悪いコンディションであったが、人馬共に元気で、やる気ムンムンであった。国体の常であろうが、観客も多く、馬場も広く障碍は皆ハデでさすがに国体らしく、この人馬にとってもこの条件がそろった訳である。逸る気持ちを押えての出番であったが、2落して一四位であった。さすがに国体ともなると強敵ぞろい、添田選手はなれないせいか本調子ではなかった様だ。その後スターライトを貸与馬に貸し大障碍であった。貸与馬に貸すことは不本意であったのだが、国体に出場する時の条件なのでしかたがなかった。スターライトはそんな悪

条件にもめげず頭張り調子を上げてきた。いよいよ大障碍である。

入場、前の人のがこわした障碍を直している。なかなか直らない。……直った。スタート、一、通過、二、通過、三、つまった、前肢で大きくヒッカケバランスをくずす。人間はそのまま前へ……落馬。気をとり直して飛び乗る四へ、いきおいがたらず拒止、すぐに向け直し通過、五、通過、まるで羽根がはえた様にとび越してくる。六に向う。馬が見えない。添田の顔だけが見える。まるで喰いつきそな形相だ。急に馬があらわれる。通過だ。国体に参加した馬の中で、最も小格な馬なのである。全身バネの様に飛んでいる。六、七、八、九、十、十一、通過、疲れが見える。頭張っている。もうここまでできたら気力の勝負だ。負けるな。十二、通過、十三、……つまった、レンガを落す、バランスをくずした、そのまま最終トリブルへ……拒止、いけない、ここが男ぞ、ガッツ、a、一三〇オクサー通過、b、一四〇三段通過、c、一五〇垂直、拒止、悲情のベル………三拒止失権、ガツタリ、だが背後からは満場の拍手、いちばん拍手が多い。ゴール直前での失権、残念、スターライトもわかっている様だ。やるだけやったという満足感、ニンジンをつンダンに喰う。彼女も満足げである。だがこれからが問題である。全日学までの一ヶ月、やり直そうと決意。

国体では我が北海道勢で札幌の布浦さんが、総合で優勝されま



茨城国体大障碍

- | | | |
|-------------------------|-----------------------|--------------------------------------|
| 1. 生垣二段横木
H120 W130 | 7 a オクサー
H120 W140 | 12 帆船
H130 |
| 2. 六角横木
H130 W130 | b オクサー
H130 W150 | 13 レンガ
H150 |
| 3. ドラムオクサー
H130 W150 | 8 ビラビラ
H150 | 14. a オクサー
H130 W140 |
| 4. 水濠垂直横木
H130 W150 | 9 花だん
H140 | b スパー(三段)
H100, 120, 140,
W150 |
| 5. 門扉横木
H140 | 10. 水濠
W350 | C 垂直横木
H150 |
| 6. 石垣
H140 | 11. カマボコ横木
H150 | |

七 帝 戦 11月7・8日

添田 昌一(3) 本村 洋文(3)

柴沼 俊(3) 水野 豊香(3)

札幌では凍結した馬場で練習も思い通りにならない季節がやってきていた。十一月である。全日本学生がすぐ目前で何かと騒がしい毎日であったが、近年久しい大会でもあるし、ベストで臨むことになった。すでに国体のため上京している添田主将を含む三年目本村、柴沼、私、それに二年目桑田の五名である。

この大会がしばらく開催されなかったということもあるが、貸与馬ということに、部として非常なこだわりをもっていったようである。事実我々の代で貸与馬試合の経験は、この試合の練習にと十月に札幌競馬場で、私と柴沼がやったのみである。我々の貸与馬試合観というものが馬術であるとは思わないが、現在の我が身への反省、さらには向上への材料を与えてくれるものなら、やってみようじゃないか。我々なりの理論があるにせよ、やはり北海道のスッポコ谷じゃないか、もっと広く大きく事態を見つめるために是非やろう、とこの試合への意気は上がったのである。

舞台は騎乗中汗がたじむような天国東京馬事公苑に移る。国体を終えたスターライトが入厩していたので、宿舎は既舎のつづきなんともすばらしい、我らに似つかわしい所であった。一日目終

了後加藤先輩がいっしょに迫りたいとおっしゃったのはさすがに驚ろいた。さて、試合に入るわけだが、チームワークよろしくみんなで体操なんぞを始めて、田舎者の劣等感を吹き飛ばし、いまいや劣等感などというものはなかった。ただこれをやらぬとさあ乗ろうといった具合にどうも気分が乗ってこないのである。実際、私を除く三人は東京人で公苑での騎乗経験もあったし、私も春の講習会で来ているし、異和感というものは全く感じなかった。一日目は、九州大学、東北大学戦であったが、何の欲もなく（ほんとは冷汗を何度も流したのだが）いつものペースで乗っていたら勝っていたという感が強い。この日、おかしかったのは落馬最多賞の本村だけで、彼のかわいそうをほど落胆した姿は記憶に新しい。

無事に一日目を終えてその夜は千田先輩宅で夕食ということになった。偶然にも加藤先輩もこられて、なんやかんや正直いつて耳の痛い所をつかれたが、きょうの勝利、千田先輩の奥さんの手料理、美酒でなんとか切り抜けたようだった。今でも耳に残っているのは『観念のオバケになりなさんな。まず乗ってみなさい。それから言いなさい』という言葉でした。

ここまできたら優勝をということで明日の東京大学戦、迷馬ハツリアル戦の策を練ってこの日はあのすばらしい宿舎で終わった。二日目、最終日である。東大戦が実事上優勝戦となるのでこのときはさすがに緊張した。どういうわけか満点馬がそろい差はでなかったが、ここでごんばったのが本村、きのうのことがうそのように実力発揮である。これで勝負が決定した。本村ばかり出てきて面白くないのだが、添田はミハラをすんなりおさえたところ

ろさすがで安心して見ていられた。やはり最優秀選手である。柴沼悩みに悩み、反抗をおさえようとしたのだが失敗、しかし相手選手とくらべると冷や冷やさせながらもいつのまにか馬をまるめ込んでいたようだ。小生はこの日一日迷馬ハツリアルルのことで頭はガンガン本村と同様になってはあわれだと思ひ、落馬しない方法を天をおおいで考えた。

ここで忘れてはならぬのが我々が知恵袋、桑田、札幌北星大学の小野両兄である。彼等はともに高校時代、貸与馬畑で育ちながらと助言してくれた。大いに助かった。

名古屋大学戦も無事終了。全勝での優勝だったが、それほど感無量というものでもなかった。レセブションでの千葉先輩の話で、レベルが低いということであったが、それももうなすけた。しかし、我々の心はやはり札幌に残してきた愛馬にあり、また全日本大学生での活躍にあった。

貸与馬試合で勿論勝つに越したことはないが、勝敗云々というよりむしろ、自分自身にどのような影響をもたらすか、これからそれをいかに生かせるかにあると思う。それから何より増して一年間最高学年でやって行くという我々の団結という点で大きな意味を持った試合であったようだ。最後に主管校である東京大学の部員諸兄にはいろいろお世話になり、お礼の言ひようもない。

文責(Y・M)

全日本学生三大馬術競技 11月16〜25日

学生障碍

北武 吉野勝之(4) 北隼 本村洋之(3)
北勇 柴沼 俊(3) スターライト 添田昌一(3)

総合

北武 吉野勝之(4) 北隼 本村洋文(9)

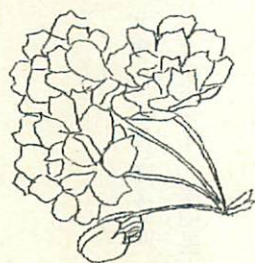
七帝戦から一週間後、北隼・北武・北勇を馬事公苑に送り込み、団体から既に入既していたスターライトと共に、我々が最大の目標とする全日本学生馬術大会に臨んだ。いよいよ十一月十九日、二十日、学生障碍。ざっと見渡しても、第四障碍レンガパーH一三〇・第五垂直H一三〇・第六バンクット・第七トリブル・第十レンガH一四〇・第十二水濠W三五〇・最終山形H一四〇、とボリュームある障碍が並ぶ。第一日目出場馬六〇数頭中なんと四〇頭以上が失権する中、出場番号二〇番、スターライト号添田選手が登場。流暢な走行とカミノリのような飛越で第十二障碍まで無過失で通過したが、惜くも最終で落下。しかし減点四で第一日目単独トップに立つ。北隼号本村選手もこの馬にしては落ちついた走行を見せたが、後肢での落下が目だち減点二九で十八位につける。北勇号柴沼選手、北武号吉野選手は共に魔の第六障碍バンクットを越えるがトリブルにて力つき失権。結局個人第一位、団体

も畜大に続き第二位で第二走行に臨んだ。北勇号、北武号は遂に第七障碍トリブルを越える事はできなかったが、北隼号本村選手は若干走行に難はあったもののよく完走し、合計で十五位となった。さて最後に登場した添田選手スターライト号、前日の成績から楽々優勝と思われたがいささか緊張気味。第四障碍で一拒止、見ている一同をヒヤッとさせたが、その後よくたて直し減点十一でゴール。二位に〇・二五の差をつけ見事個人優勝を手中にしたのであった。しかし残念な事に団体成績では僅かの差で中央大学専修大学に抜かれ四位に甘んじたのである。

さて二十三日からの総合競技。北武号は脚部に不安が出て出場を断念。北隼号一頭で試合に臨んだ。第一日目調教審査、北隼の悪い所がきれいさっぱり表れた感はしたが、それにしても最下位と発表され一同ア然。第二日目北隼号の十八番ステイブル、スピードに乗りすぎた感もあつたが七分七秒、無過失でゴール……と誰もが疑わなかったが、数時間後第七気門の外側を通つた事が判明し失権。本村選手の一大チャンスボで全員興奮醒め、兄の恐縮することしきり。

以上の経過で全日学が終了したわけであるが、もちろん反省するところも多く優勝・優勝と手ばなして喜ぶわけにはいかない。しかし馬術部員全員の協力があつてこそ初めて添田兄の快挙が生まれたのであり、その意味でこれは馬術部の新たな第一歩であると信ずる。最後に、お忙しい中応援にかけつけてくださったOB諸兄に厚く御礼申し上げます。

(文責 H・M)



調教報告

北隼号

牡 サラ 鹿毛

昭和36年4月20日生

有珠郡伊達町産

父 サラ カルガドール

母 サラ ライジングマンナ

体重 480 Kg

本村洋文

これが果してボウズの調教報告になるかどうか甚だ疑問であるが、一応一年間彼に乗った。いや一年間彼に乗せてもらった自分自身のまよめのつもりで書いていこうと思う。

昨年二月、正式に北隼のチーフとなった翌日、一時裂蹄になるとまで言われたかなりひどい追突をやってしまい、私と北隼のコンビは多難なスタートを切った。以後雪の溶ける四月まで、これと言った経路廻りもなく、ミューゼラーの「乗馬教体」と帯畜大の「馬乗りの為に」を片手に、無我夢中で乗り続けた。その頃は

手綱から逃げたり、引っかけたりする事をなくす為、とにかく輪乗りにおいて頭頸の伸展低下を行い、そこに至って銜に支点をとって手綱による事を教えようとした。しかし今から考えると、頭の形のみを気を取られていた事と、そして最も大切な「脚」を忘れていたように思われる。障碍調教については、畜大の「馬乗りの為に」の中で、障碍に急速度で向う馬、肩の扛起不足の馬……etc.には常足飛越が有効であるというのを拠所とし、また雪の馬場であまり思い切った事もできない事情もあり、常足飛越を中心とした。昨シーズンの北隼の落下癖を知っている方は、これが原因で踏み切りが近くなり、落下が多くなったと思われるかもしれない。しかし事実はむしろ逆で、五、六月頃の試合では一時落下をほとんどしなくなったのである。騎手の方も、常足飛越は同伴が無難しい事もあり、一回一回バカ丁寧な随伴を心がけた。同じ前傾と言っても、踏み切りの時、シーズン前半は無意識のうちにやっていったアブミの上に立ち上ると言うか、尻から前に出す随伴はこの頃培われたものである。特に六月の対酪農定期戦での障碍写真は、どれをとっても現在までの多くの写真の中で最もすばらしいものだと思っている。

五月に入り、いよいよ実戦となり、半沢杯、東日本大会を経験するに至って、北隼の狂奔癖と口の堅さ、特に右回転での堅さが私の想像をはるかに越えるものであった事を痛感した。ここに至って本気になってマルタンの使用を考え、東日本大会の折それを購入し、六月の対酪農戦から試合の時だけ使い始めるのである。しかし、この時まだ狂奔と右回転の異常な堅さの原因の一端は、脚の推進不足にあるという事には気づかなかった。

またこの頃から故障や怪我との戦いが始まった。まず東日本大会への輸送の途中、貨車内で暴れ狂い、東京に到着した時は右後肢が丸太棒のように腫れ上り、ともに歩くことさえできない状態となっていました。もうだめだ……といささか自暴自棄になったが、試合まで六日間の猶予があった為、馬事公苑の獣医師松坂氏にもお願いし、サルファ剤、マイシリン、そしてシンプと、ありとあらゆる手を尽した。同僚の北武と小野野のノースクインの練習を見るのも辛かったし、また千葉先輩から冗談半分に言われた「一足にだけエン麦を喰わせただのか」という言葉も私の胸にグサリと突き刺した。しかし治療の甲斐あってか、試合前日になると腫れもほとんど引き、跛行も目立たなくなり、主将に電話で相談したところ、「やるだけやってみろ。」と言われ、ぶっつけ本番で中障碍に出場した。結果は右回転で反抗されたり、狂奔されたりブルを飛びきれず障碍につっ突んだりして減点十七・七五をくったが、落下は唯の一つにとどめた。ここであとは前後、左右の柔軟さだけだと思ったが、これは大きな間違いであった。これは後に書く事にする。

東日本大会でのもう一つの強烈な印象は、試合後OBとの懇談会の席上で、八木沢さんが千葉さんに「この大会は今後北大馬術部がどんどん挑戦してよい大会ですか。」と聞かれた時、千葉さんが顔を少しひきつらせ、明らかに背のびです。学生はもつと前にやるべき事がいくつらでもある筈です。無理をして高いものを望む事、それは間違いです。」と言われた事である。頭をバットで殴られたような気持ちになった。確かにそうである。しかし、その時の私は、学生は四年間しかたないのだから、その中でどんどん挑

戦すべきだと考えていたのである。

話が少しずれたので東日本以後の調教報告は後述にして、故障と怪我の話しにもどす。六月に入り、対酪農定期戦・道自馬と少し使い過ぎたのか、左前肢膝のすぐ下内側に骨瘤を作り、それがどんどん大きくなっていった。必死に冷しが熱感と痛感が増々ひどくなり、結局七月はほとんど馬休同様の状態であった。そして八月初めの北日本学生馬術大会。東日本の時貨車内で暴れ狂った苦い経験があるだけに、北軍を隔離して置きたかったが、貨車輸送を知らない初遠征の馬が多く、どうしてもそれができなかった。そしてまた同じ失敗を繰り返してしまったのである。今度は全身傷だらけになり、特に前肢は共にボロボロになってしまった。今度こそもうだめだ。奇跡は二度と起こらない、と観念したが、万が一にもと気をとり直し、また必死になってあらゆる治療の手を尽した。北軍という馬は全く不思議な馬である。試合直前になると必ず腫れもひき、跛行もなくなるのである。私はこの試合で北軍にはすまんが、乗りつぶす覚悟を決め、前日ちよろっと運動して、中障・総合と過酷な五日間の試合に出場した。結果は中障七位、総合五位、となり全日本学生馬術大会への切符を手にしたのであるが、この時程、北軍の偉大さを感じた事はない。特にステイブルでは、七月は骨瘤の為ほとんど馬休、試合前も全くの馬休、体力も弱まり持久力もなくなっている筈なのに、スタートを切るや否や弾丸のように突っ走り、私は鞭も使わず、ただ乗っていただけなのに、もちろん無過失で三十数頭中、一番時計を出してしまっただけだった。ゴールした後の北軍は今にも死ぬかと思われ程疲れ切っていた。力を抜く事を全く知らない馬、それも翌日

の馬体検査で獣医をびっくり仰天させた体で……。馬術的に見たら、北軍よりすぐれた馬なんかはいて捨てる程いるでしょう。でもあんな根性を持った馬は日本中捜したって他にはいない……。私はそう信じています。

話がすぐ脱線するが、もう少しだけ故障について……。北日本学生から帰ってから道大会までの間はゆっくり休ませ、ちょうど札幌にいらっシャっていた競馬会の横山さんに骨瘤を焼いて頂いた。しかし道大会を使わざるを得なかった為また悪化し、十月の半ばまで、使ったり休んだりの状態が続いたのである。北軍に故障はつきものみたいに皆から思われているが、私がつと注意すればある程度防げたものもあり、悔まれる。私は見ていないのでは。きりとは知らないが、全日本学生障碍のテレビ中継で解説者が北軍のことを「老令でもうだめだ」とか「老馬は馬体管理が難しい」とか、かなりひどい事を言ったらしいが、何にも知らずにそんな事を平気で言うやつには全く腹が立つ。

とにかく昨シーズンの半ばから、故障、試合、故障、試合の連続でじっくり乗り込む機会を失ってしまったし、自分自身、馬体管理の方に全神経が集中してしまい、馬の欠点をどう克服してゆかかという事について考えなくなってしまった。またそのような余裕も私になくなってしまったのである。

さてこれからは、後回しにしていた東日本大会以後の調教報告です。東日本大会の次の試合、六月初めの対酪農戦、これが昨シーズン私が満足できる唯一の試合であった。この時初めてマルチンを使用した。絶対手綱を引っ張るまいと心に誓い出場した。北軍は流暢に回転し、飛越も完璧に近いものであった。もちろん

障碍の程度も低かったが、複合の障碍では無過失、中障では一落のみ、騎手の方も冬から春にかけて常足飛越によって培った随伴を無意識の内に行い、彼の飛越を阻害する事はなかった。しかし、その後の試合、つまり六月末の道自馬、八月の北日本学生、道大会で北軍は調子を崩すのである。特に道大会の中障ではなんと九落下という目も当てられない成績を残してしまったのである。もちろんこれは故障統発の為、乗り込めなかった事が大きな原因である事には違いない。しかしもう一つ、騎手が北軍の飛越を阻害し始めたという事も今考えて見ればそれ以上に大きな原因ではなかったかと思われる。一般に障碍飛越で馬の動きを阻害するというのは、第一に手綱を引っ張る。第二に障碍上で拍車があたる。第三に障碍前でおおいかぶさり結果的に前軀を押しつける、という三点であると思われる。私の場合、雪の溶けた後、常足飛越をあまりやらなくなり、かわりに四重、あるいは五重の連続障碍を主に行うようになった。連続障碍それ自体、適切な踏み切りを馬に教えるなど非常によい運動課題であるが、踏み切りのタイミングがつかみやすい為、私の場合には随伴が雑になってしまったような気がする。少しオーバーな言い方をすれば、上体だけを前にたおすような前傾になってしまった。酪農戦以後の私の飛越写真を見ると、何となく尻が後ろに残り気味で上体だけを前にたおしている。その為、手綱を引っ張った事もあろうし、おおいかぶさった事もあったのであろう。障碍飛越の基本を知らず知らずのうちに忘れ、踏み切りを安定させる為、だとか、沈静して障碍に向かわせる為だとかを考え、その上で北軍に課した連続障碍。今になって考えると、これが私と北軍の調和を乱した最大の原因だったの

ではなかるうか?……馬術なんて、特に学生さんの馬術なんて基本、基本……また基本、その繰り返しなのである。一年間北隼とコンビを組んで、彼が学んだものは皆無であつたかもしれない。しかし私の学んだものは、大きい。しかも単純明瞭な事であつた。「基本、基本、ただそれだけだよ。背のびしてはいけないよ……」

ここでまた東日本大会の折、千葉さんのおっしゃった言葉が思い出される。「明らかに背のびです。学生はもっと前にやるべき事がいくらかもある筈です……」畜生、若干にくいけどいい事言うなあ。だいたい千葉さんは、絶対我々をほめてくれない。十一月の全日本学生馬術大会のステイブルで、七分そこそこでゴールした直後(もっとも教時間後、ある旗門の外側を通つた為、失権と判明するのであるが)、今度こそほめられるだろうと思つたら、また顔をしかめて「馬をいじめ過ぎです。そんなに早く帰つて来て、どんなプラスがあるのですか!」……シヨック、もう頭に来た。我々がこんな一生懸命やっているのに。しかし、失権と判明した後会つた時、今度もまた叱られるだろうと覚悟していたら、やさしい顔で「まあこういう事もあるさ。」とたつたひとことだけ言つて下さつた。胸に熱いものを感じてしまつた。もっとも書きたい事はいくらかもあります。秋から全日学までの事、そして全日学……。でも何となくもう結論が出てしまつたような気がして筆を置きたくなりました。今昭和五〇年一月。今年一年間、北隼とつき合ひ続けるかどうか、まだはつきりわかりません。でも、もしそうなつたら来年の調教報告はどんなものになるのでしょ。今度は真正正銘の北隼の調教報告を

書きたいものです。

北 武 号

騾 トロッター 鹿毛

昭和40年4月17日生

北海道河東郡音更町産

父 トロ ビージー

母 中半 コテンブル

体重 503 Kg

北大馬術部を去るにあたって

吉 野 勝 之

〔その一〕

ほんの少し前に入部したと思つたら、もう卒業です。四年間なんてあつという間に過ぎてしまいました。前年度に引き続き今年度も北武号には僕が騎乗しました。北武号の馬らしからぬ態度、おどけた様な人を喰つた様な態度に魅せられてしまい、他の馬には乗れと言われても乗れなかつたでせう。以下順を追つて僕と北武号の活動を報告します。

前年度の反省から次の様な課題を割り出しシーズン前練習に励みました。(1)口が固くハミに突つかかるため、頭頸伸展並びに下

がくの柔軟性の養成。(2) 障碍前でバタバタとつまる事が多く、不整な飛越の因となるので、飛越に際して障害物への適切な歩度での落ち着いたアブローチを図る。(3) 苦手と思われる水濠、乾濠、巾障碍の馴致。(4) 持久力、節力訓練として低温研ウラ山の登り降り。

また前年度原因不明の跛行がよく出たため、練習後の四肢のマッサージは欠かさず、特に故障の出やすい冬期積雪期とそれに続く融雪期には練習に際して次の事を念頭に置きました。(1) 寒いため馬の動きがとかく固く小さくなりやすいので常歩でも後肢をぐいぐい踏み込んで全身運動をする様にする。(2) 障碍飛越訓練前には充分準備運動をし短時間でサッと切りあげる。(3) 下級生の練習には、低障碍通過、キャバレッティ通過、うさぎ跳びなどを無理な回転を要求せず単純なパターンを繰り返して行い状況に応じて高さを増減する。特に今季は去年から春の東日本大会への遠征が計画されており北武号もその時期に合わせて調整しました。

五月三日に半沢記念馬術大会があり北武号は中障碍に出場しましたが、結果は第四障碍山形三段で失権。そしてその日のうちに貨車に積み込み東日本大会に出場すべく東京へ発ちました。道内からは北大の北準、北武、北星大学のノースクリーンの三頭が行きました。五月十一日にバルクルと中障があり両方共出場しましたがいづれも失権しました。そして五月十三日に貨車に積み込み、五月十七日朝札幌に帰着しました。春の遠征に關しては北国の馬は、いまだ気力、体力ともに完全に回復しない状態にあり、そのハンディを背負って東京方面の優秀人馬と互角に戦うのは難しがるうと思えます。部に行事的な余裕と力の予裕がない限り冒

険的に行う事は無謀でありましょう。今後春の遠征計画に關しては熟考の必要があるうかと思えます。また、今年度行事の中でこの遠征の持つ意義が少なく浮きあがってしまった事を部員諸兄に深くお詫び致します。

六月二日には恒例の対路農大定期戦がありました。東日本から帰ってしばらく休ませ再び練習を始めたのは試合の一週間前からでした。出場を断念しようかと思いましたが障碍の程度もそれ程高くないということで中障碍と複合に出場しました。経路走行に關しては障碍間で必ず一度馬を手のうちに入れる。そして誘導、障碍へのアブローチというパターンを踏まえる。調教審査に關しては、運動の区切りを大切に落ち着いたリズムで行う事だけを念頭におきました。結果は去年にひきつづきいづれも優勝しました。

八月一日から八月五日まで北日本学生馬術大会が今年は盛岡十四田厩舎馬場で開かれました。全日本学生の予選という事で闘志を燃やしました。一日目午前中に中障第一走行。なにがなんでもゴールする意気込みでスタートしました。最終障碍まで一落で来たものの、最終トリブルBに巾一六〇、高さ一三〇の苦手な山形三段がありそこで二拒止。それでもなんとかゴールはしました。午後から第二走行。最終障碍へ如何に誘導随伴するかという事だけ頭にあり途中、水濠を飛び、一三〇の垂直を飛んだ後、馬体が伸び切り沈下してしまい、次の斜め二段で飛び切れず障碍に突っ込んでしまいました。これですっかりペースを崩してしまい、最終トリブルBでまたもや拒止。三回目に向けても全然意志喪失をしてみました。ゴールを自然に無念の涙を飲んだ次第です。翌日

から総合が調教審査、耐久、余力と完全な三日競技で争われました。この競技で入賞しなければ全日学への望みは絶たれるため悲愴な覚悟で臨みました。調教審査は案外悪く十七番目でしたが最高点と最低点の差は四十点そこそこであり、一拒止一落減点マイナス二十という事を考えれば、いくらでも挽回できる計算です。

二日目耐久レースは盛岡競馬場でありました。走路全周を往復する間に、走路上の障碍と走路内敷地に設けられた濠やスラロームを通過するもので、全長約四Kmでした。四十四田厩舎からステイブルコースまで歩いて三十分余り、それで充分準備運動になる距離です。最初の障碍さえ飛ばせば後は惰性ですから、第一障碍へはぶつつける様な気持ちでスタートした。前半飛ばし過ぎたのか後半人馬共にバテてしまいゴールはしたものの大きく減点を喰った。耐久終了時点で十一番目。入賞するためには翌日の余力審査であと五頭蹴落さなければなりません。翌日余力審査のスタート前生まれてこの方これ程に緊張した事があつたらうかと思う程緊張した。準備馬場では目の前が暗くなる程極度に緊張した。準備馬場から待機馬場へ移る時深呼吸を繰り返すと急にスウッと眼前が開け、その時待機馬場で見えた鮮やかな森の緑が今も脳裏に焼きついてゐる。「とにかくゴールしてやる。」の一念が北武にも通じたのか、信じられない程の前進氣勢で拒止する気配など感じんもなく、はやる馬の気持ちを抑えるのに精一杯だった。結果は三落。しかし上位五頭が予想通り失権したので六位入賞。全日本への権利を獲得した。この時程、うれしい事はなかった。

北日学を終えいったん帰札後、八月二十四日・二十五日と旭川で北海道大会が開かれた。一日目。総合と六段に出場。総合では

野外において満点だったが、調教審査の点数が悪く十位前後であった。野外の程度は低く失権馬を除いてほぼ馬場の点数で順位が決まった様です。六段飛越では一四〇cmを信じられない様なストライドで完飛し、畜大の柏鷹・北星のドン・ホッパー、鎌田さんのジョリーと共に一五〇cmに挑戦した。スタート直後、北日学の中障で失敗した時と同様、馬の体が急に伸び切り沈下し、第一障碍のみ飛越して後は全部落としてしまった。北星のドン・ホッパーが失権したため三位に入賞したものの、取れる試合を落とした様で残念でならない。この信じられない様な前進氣勢で前へ出る時、それをいったんぐいと力をため込んでから障碍へ向かう。その呼吸に関しては次に北武に騎乗される方の課題にして欲しいと思います。翌日、中障障へ出場したがこれはいい所なく失権してしまいました。

十一月に入り東京へ全日本学生の遠征。今回は北大から四頭も馬が出場した。十九日二十日と障碍、二十三・二十四・二十五日と総合が行なわれました。北武号に関しては技術的な面で相当迷いがありました。いざスタートを切ったら迷いがどうのこうのと言っておれないので障碍へぶつけていきました。第六障碍、濠バンケット通過後、ヒザをつきりを通り切れず、次に向けるとAを通過してBで拒止失権した。翌日第二走行は団体成績の事もあり出場したが、この時左前肢を傷め、二十三日以降の総合は断念せざるを得なかった。

以上、今年度の僕と北武号の活動を頁を追ひ、かなり個人的感情を抑えて報告致しました。

〔その二〕

さて、今年度の好成績をもってようやく北大馬術部宿願の「栄光への脱出」実現の感があります。今年度のこの好成績に対し、B諸兄は様々な立場、観点から様々な評価を下されている事でしょう。

僕達の我が馬術部へ入部したのは昭和四十六年でした。その頃は非常に低迷期で、小障碍さえろくろくゴールを切れる馬がないという有様で、まさに地獄から天国までを見た感があります。以下、僕自身が現役部員として歩み体験した馬術部近年四年間の歴史を通し、今年度の部のこの様子を盛りあげてについて僕なりの評価を下したいと思います。

前述の如く僕が一年目の頃はひどい低迷期で、出る試合出る試合全部失権。馬場を踏めば大きな声で怒鳴られたり、一年目として銀戦していても実におもしろい事でした。合宿などもなく、練習も現在程活気のあるものではなく、練習終了時刻もあいまいで一講目のある者は適宜抜けていくというものでした。馬術に限らず学業の方の成績も不振で、やたらと留年していました。僕達の代と、ひとつ上の代の人達はほとんど留年していました。かく言う僕も留年したのですが、クラブの活動が学業に影響を及ぼしているのかどうか、それは個人々人について細かく分析してみなければ判明しない事ですが、ひとつのクラブからこれだけ多くの留年者を出すというのは、やはり、学内における大きな問題であると思います。この学業成績不振が原因なのか、部の低迷が原因なのか、新厩舎移転直後十二月に入って、ある事件を発端に、僕達のひとつ上の代の人達が全員やめてしまいました。一年目にと

っては実にショックであり、本当に嫌な思いをしました。ただでさえ暗く辛い冬がいっそう重苦しく、春になって新入生が大勢入ってきた時には、部の雰囲気は急に明るくなって本当にうれしく思いました。又、則近兄と南部兄も復部されており、以後今年に到りまで詳述すればキリがない程いろんな事がありました。徐々に徐々に確実に部の雰囲気は盛りあがってきた様に思います。

以上の様な過去を振り返ってみて感ずるのは、今年度の盛りあがりには決って突発的なものではなく、部の積年の努力の結晶であるという事です。様々な起伏はありましたが、底に一本太い流れが貫いていた様に思います。その中で伊式採用以後の小栗コーチ始め、それに続く先輩諸兄の研鑽は、忘れてならない大きな要素であろうと思います。自分自身の馬術部生活を振り返ってみても、小栗コーチの厳しい指導下において技術的にも、又馬術に賭ける情熱というものに關しても多くの事を学んでいた様に思います。自分にはまだ純粹に技術的なものを判断する目は養われていません。ここで、はなはだ抽象的な表現となりますが、もしも人間というものを一本の弦に例えるならば、伊式採用以後、先輩B諸兄は様々な立場において様々の波長で鳴り響いていた様に思えます。はからずも今年度、それらの波長が最大のうなり現象を生じたのではないのでしょうか。その中の最も大きな波動源はやはり、小栗コーチであったと思います。今でもその波動は北大の馬場の中で響いているでしょうし、現役部員は知らず知らずのうちにそれに共鳴し、次代次代へとその波動を受け継いでいくことでしょう。

自分が教えを受けた人を批評する事が、許される事かどうか解

りませんが、今後もし部が活動の指針を失った時の、ほんの考える材料になればと思ひ敢えて書きますが。

社会人でありながら、現役部員と同じ次元に降りてきて共にクソにまみれながら活動するには相当な精神力が必要だと思います。実際に現場において現役部員を手取り足取り指導する事は、傍観者には解らない苦労があるかと思ひます。下部の充実がなかったので、小栗コーチが浮き上がっていたということは言えますし、実際に部をなんとか高い水準に引き上げようと四苦八苦されてきました。

ここでひとつ書き添えておきたいのですが、馬術部の活動は馬場の中だけで終わるものではなく、馬体管理や当番や、近年ますます苦しい財政を支えるためのアルバイトや乾草づくりなど、それらのものが混然一体としたものであると思ひます。貸与馬時代や合宿もなかった時代と比べ、活動はすこぶる多岐に渡り、部員同志の内外にわたる関係もいっそう親密なものとなり、三浦清一郎兄が馬術部における文化活動を提唱された時代とは、はなはだしく異なる活動をしていると思ひます。もちろん、いかに活動が多岐にわたるうと、馬場の中の活動がそれらの要めである事には変わりありませんが。そういう多岐にわたる活動の中で部をリードしていくのは最上級生であり、部の中核、もっと広い意味においてOB諸兄をも含む馬術部の要めであるべきは最上級生でありましょう。まさに現役部員の長たる最上級生は馬場の中においても、その現場監督者となるべきでありましょう。部を動かしていく上でこの最上級生の現場監督者としての、現場における権威信頼度というものは守らなければならぬ大切な要素であろうと

思ひます。もちろん最上級生は部の権威たるべき実力・経験を十分に養っておくべきでしょう。

馬場というものを、人夫や資材の散在する建設現場に例えらば、まさしく最上級生は現場監督者であり、コーチは設計技師である形が望ましい姿ではないかと僕は考へます。小栗コーチは、正確な図面を引いておられたと思ひますが、現場監督者としての最上級生との調整も十分に考慮されるべきだったと思ひます。

もしもOB諸兄から、部活動に対する非難を受ける場合、矢面に立つべきは最上級生であり、コーチに任せ放しにするのは怠慢ではないでしょうか。自分はまだ未熟であるとか、よくわからないうというの理由はならず、ウソでもホラでも吐いて部をリードすべきでしょう。少くともその覇気のない事をおもしろくなく思ひました。最上級生がフラフラしては部全体がぐらつきます。

ここにおいて現役部員の、特に最上級生の部の要めとしての自覚と奮気を願う次第です。又、部に熱を与え得るOB諸兄・確実な乗馬感覚を身につけておられるOB諸兄から、いかにして多くの事を学ぶかという事を、じっくり話し合つて欲しいと思ひます。

〔その三〕

僕達が馬術を考える場合、「学生馬術としての特殊性」という事を十分に考へなければならぬと思ひます。毎年毎年新入生が入部し、最上級生は卒業していくというくり返し。近年ますます増える部員数。そしてたいの新しい新入部員は未経験で一から教へねばならず、又たいの者は卒業後も継続的に馬に騎り続ける事は難しいという現状。いかに現役時代名選手であっても不断の

努力がなかったならば数年馬術から離れているうちに、乗馬感は衰えているでしょう。同じ馬で、同じ場で、同じ限られた時間帯の中で、一年生から四年生までがいかに能率良く騎乗するか。最上級生は、いかにして調教を進めていくか。又、馬がつぶれた時いくらでも補充可能というものでなく、限られた頭数をいかに長く使用するか。その意味において学生馬術と馬体管理は分けて論じられるものではありません。近年飼料代の値上り、遠征費増大等により、ますます財政は苦しく、そのための講義をさぼってのアルバイト・乾草づくり。ここにおいて学業の不振と練習への熱意喪失の相乗効果も考慮されるべき一要素と言えてでしょう。少くとも最上級生は学生馬術を以上の事柄の総和として捉えるべきでありましょう。自然馬術・馬場馬術を論じる以上に、それを一段下げた次元の学生馬術＝基本の馬術という事を充分に論じるべきでありましょう。

今後の学生馬術を考えていくためのほんの材料をここに提供します。よく、下級生の練習に使って調教のくずれた馬を、上級生が騎って治すという事が言われますが、こういう考え方は下の下であると思います。学生馬術の様に同じ馬を同じ馬場の中で同じ時間帯に一年生から四年生までが騎乗するという特殊性の中で、組織的調教という考え方を提案します。部班運動もそういう意味において捉えてはどうでしょう。下級生の部班運動において、例えば坂の登り降りは、下級生の騎座養成と共に、馬の筋力訓練になっていると言う様な事。こういう風に下級生から上級生までが一体となって馬を調教する、各々出来る範囲内の事を分担する。そしてそれが騎手の教育にもなっているという形が望ましいので

はないでしょう。又、調教は馬に騎っている時だけ行なわれるものではなく、馬体管理・手入れ・曳馬なども広い意味において調教であろうと思います。馬に関して、新入生から出来る範囲内の事をやるという事は、その馬の調教の一端を担うという事であり、下級生の活動への主体性・自主性も養われましょう。もちろん、これらのことをリードすべきは、経験豊富であり乗馬感覚の鋭い最上級生であります。現在は概ねそういう形で行なわれていきますが、ただなんとなくそうしているのでは頼りなく、そういうものは又なんとなく消滅してしまいうものです。確固たる理念として持った時、更なる発展も望めるものだと思います。

〔その四〕

馬術に関して、例えば、騎手の上手下手の判断の基準はいったいどこにあるのでしょうか。馬を調教する事ができて、どんな馬でも騎りこなせるという訳ではない人もいれば、逆に、どんな馬でも騎りこなせるが、馬を良く調教できない人もいます。馬術と言っても馬場もあれば障碍もある。自馬競技もあれば貸与馬競技もある。まさしく馬術は複雑怪奇なものです。馬術部生活の中で、馬術の上でのコミュニケーションの難しさを痛感しました。もともと同じ土俵の上にあがって議論する事が出来ない様な異なるジャンルもある様です。加えて騎手個々人の馬歴の長短、乗馬感覚の鋭敏さの相違、馬というものに対する認識の相違等々による話しの次元の相違。又馬術は相手が生きものである限り、テクニクの羅列だけで終わるものでもないはず。自分で分かったと思っ

はよく分つていなかっただと気がついたり、相手に充分に意を
伝えたつもりでいても、後で全然通じていなかっただという事
を思い知らされたり。馬術に限らず、ひょっとして人間同士のコ
ミュニケーションなんて、お互いに分つたつもりでいる、その錯
覚の上になり立っているのではないかとまで思いました。馬術の
神秘性と馬術家の寡黙性の因は、この辺にあるのでしょうか。自
分の分っている事を、いかに相手に分る様に伝えるか。これは簡
単な様で難しい事です。と言って、黙ってしまつてはし方ないの
で、やはり言葉を大切にしながら意志を伝えていく努力はすべき
なのでしょう。

馬術は人と馬とのコンビでやるもので、その相性というのも大
きな要素と思います。僕は北武号という非常に相性のいい馬に恵
まれて好運でした。しかし相性の悪いと思われる馬とのつき合い
の中でこそ、よりいっそう新しい自分を発見できるのではないか
とも思います。偉大な馬術家は、どんな馬とでも相性の合う広く
開けた心を持っているのでしょうか。人間の心の中にはまださわ
つた事のない、さわられた事のない琴線がいっぱいあると思いま
す。馬を通じて自分で発見するも一方、馬術部員の中にその琴線
をピンピン弾いてくれる人を見つけなければなれないと思います。

馬術部生活の中で、いい成績を残せる人もそうでない人もいま
す。しかし決して華々しさだけが栄光の条件ではないはずで
小障碍さえゴール出来なかつた馬をゴールさせた時の充実感、感
動は、そういうことを経験した人にしか分らないでしょうし、そ
ういった壁をぶち破っていく努力こそ、今この時期にやるべきこ
となのではないかと考えます。部の歴史に於いても、部の低迷期

に目立たない所で、部をグイッと支えていた人達が居ます。それ
らの人達に愛惜の念を抱きます。

〔その五〕

今、馬術部生活四年間を振り返ってみて、感慨もひとしおです。
いろいろな思い出が、走馬燈の様に浮かんできます。

僕はあまり酒は飲めませんが、酒の上での失敗・恥ずかしい思
い出も結構あります。一人でチビチビやりながらビーナッツの数
でも数えていればいいのですが、どうい内外的条件が揃うのか
時々馬鹿騒ぎをしてしまい、後で思い出すたびに赤面の到りとい
う次第です。酒を飲むと理性のタガがはずれて、恥とか外聞とい
う棚を飛び越え、とめどなく自由奔放に走り回ってしまうのでし
ょう。これが酒の持つ魔力なのでしょう。僕ももう少し酒が飲
めれば、もっと違った部生活を送っていたのではないかと思いま
す。

高校時代はよく自転車旅行をしました。大学では四年間でた
だ一回しかしてません。それは二年目の終わり頃、東京の馬事公
苑で講習会があった時です。講習会では鑑挙げを、それも北大は
先頭切つてやらされると聞き、それならば自転車で行つて尻の皮
を厚くし、潮風にあたって面の皮を厚くしようと思いたつたわけ
です。一週間前に札幌を出発して、なにがなんでも東京まで着こ
うと、ひどい時には一日二百キロもこいだのですが、結局、平泉
までしか行けません。北海道の雄大さを思い知らされました。
その自転車は東京へ行く直前に月賦で買ったのですが、講習
会を終えて帰札後すぐに盗まれてしまい、これはもう自転車旅行

をやめて、その分しっかり馬に乗れという神さんの啓示だと解し、あきらめた次第です。自転車旅行は僕にとつては魂の洗濯・頭の整理の時なのですが、それ以後はもっぱら馬上で街乗の時間にそれを求めました。馬上で考える事をしてると一時間や二時間ぐらいつきに過ぎてしまいます。又朝焼けや、朝の冷気は、何か神秘的な力を持っているのでしょうか。馬上で、手稲山の方へ向って、両手をいっぱい広げて大あくびをすると、信じられない様な感動に包まれた事があります。

僕は農学部のエシキョクへ一年遅れで移行しています。馬術部生活の中で、物の考え方そのものの行動への移し方、又行動の理論化など、知らず知らずの内に考え方の基礎が養われていた様で、林学という学問の内に新たな面白味が加わっています。馬術に関する本を読んだり、その著者に合って話しをしたり、実際に現場で試してみたり、本当の生きた学問をしていた様です。本を読む面白さも馬術を通して知りました。馬術部の活動を中心として得た現場の知識・経験と言ったものは、この五体に刻み込まれています。残り一年の大学生活の中で、これらのものを、机上の学問の内に昇華させたいと考えています。

馬術部を通じて得たものは、数限りなくあります。長々と駄文を連ねてきましたが、この一文をもって、それらの一部でも部に還元できれば幸いです。

四年間、情熱を失わず、がんばって下さい。

北 勇 号

中半血（トロッター） 鹿毛

昭和36年生

460Kg前後

北勇号持ちつ持たれつ日記

柴 沼 俊

一人北勇号の日記を読んでいるとつい先日のことのように思っていたことが、もう何ヶ月も経ってしまった完全なる過去のことになってしまっている。良いことも悪いことも簡単に憶い出の一言で片付けられてしまうような感傷に浸ることは許されぬ敵しい日々の経験の積上げ、等というそんな素晴らしい馬術部生活ではないけれど、そんな中で過した北勇号との一年、何事もなかった如くに過ぎさってしまった。

人間の方の傷が一ヶ月振りに癒えた三月十六日、北勇号の責を負ってからの初めての騎乗であった。この馬に乗ってあれをしてこれをして、この試合でどうのこうのという野心、期待、願望ならびにその類のものは皆無であった。唯ひとつ、片目（左目失明）によるハンディと思われる踏切りの不安定さ（障害前でバタバタし、つまる現象）を解消しよう。そうすれば、少し大きな障害に

対しても人馬共軽やかという速い言葉に少しは近づく飛越ができて得るであろうと、そのことだけを目標としていた。そして、むしろ持たれた方の騎手の方の養生に重点を置いていた。とくに、この馬の場合、馴れないと乗りにくいし、結局はそうすることが、馬を良くするという最も根本的なことだと思つたからである。そして、練習上の問題として余りきつくりすぎないように、休みをうまく配合して乗って行くことを心掛けた。

三月十六日、初日に於て、脚に対しては騎手の平衡にも非常に敏感に反応するという印象を抱き、三月中は、馬と人がお互いに馴れることに重点を置いた。何しろ、外乗等に行つても、今考えるところのように落ち着きがなく人の存在さえ危く無視されるような状態であり、曳馬の必要性をいやという程味合わされた経緯があつたからであつた。しかし、その辺りの結論として、常に脚を使うことにより人の存在をそういう意味で明らかにしていかなければと感じとつたことであつた。四月に入つてくると、巻りでの速足では、丁寧に続けると少しづつ銜をかんでくるようになり、障害等に向かう時の脚の使い方をただやたらめつたらやるのではなく、馬の動きに合わせてなければと感じていった。四月中は、毎日外乗をするようにし（後に於て、人間が要求するところなら、要求する方が、少し無理かと感ずるような所でも行くようになり、人馬の信頼感を得た喜びを感じるとともに、その責を痛感した。）曲線運動での速足からの駆足発進とその逆、速足の歩度の制御に心掛けた。調教審査のことも考え、少しづつ馬場の径路の運動も試みたが、まだその前にやるが多すぎるような状態であつた。中旬頃より馬の頭の位置というものに対し、馬がきれいに銜をか

んでくれば、多少上つても良いのではと思ひ始め、無理して下げさせる必要はないのではという疑問が生じた。自分の方法の正しさを信じながらも迷ひ始めた。そんな中で、四月十二日、馬場に放馬中他馬に蹴られたり咬まれたり多くの痛手を負ひ、はれがひどく、結局五日程馬休にせざるを得なかつた。この時期、盛んに冬毛が抜け、北海道の春の訪れを感じさせていた。

四月二十一日、初めての経路廻りがあつた。高さは、八〇〜一〇〇cm、巾一〇cmまでの六つの障害九飛越であつたが、この経路廻りに於いて人馬とも今後の課題を全てさらけ出してしまった。それは、準備運動というものについての認識、障害前での押しなさ、馬の踏切りのバラバラさ、飛越体勢とそれに入ることが、一歩早く、逆に言えば、最後の押しがないという五点であつた。その後、再び跋行をしようとする、獣医の判断を仰いだところ、右後肢の飛節の曲りが悪いということと四月十二日のはれがまだ完全に退いていないということでオスミン注射をしばらく続けることになつた。そんな訳で四月の残りは、常歩か馬休で終つてしまつた。

馬休により馬の体力だけは充分で、体が完全でない状態で五月三日に半沢杯が来た。この試合では、馬の行き気が充分あつても、そのままにしておいたのでは生かされない、一度自分の手の中にその行く気を収め、騎手がそれを適度に出してやらなければならぬことを悟つた。バルクールで四位であつたが、不整地等での障害についていけないことを反省させられ、低い様々な障害を人馬共確実に飛べるようにする必要も感じた。ただ、誘導方法の事前の検討が十分であつたことは、試合に於て有効であつたので、

この点では良かった。五月中旬に千葉氏が来道され、北勇にも乗って戴き、軽速走の不完全さを知らされるとともに、頭の位置の問題について自分の意見が正しいということを証明することを置き土産にして離道された。この頃より、正反動や鎧上げ等の練習を少しづつ始め、バランスをよくすることに頑張りはじめた。五月下旬になっても速足飛越で衝を完全に受けて飛ぶことはできない状態であり、又跛行などしているうちにそのまま六月に突入してしまった。二日に対酪農大定期戦があったが、人馬共々精神的、肉体的に準備され得ずに参加してしまった感が多く、それは、ノートの次の言葉が代弁している、「反省することは、両手に抱えきれない程ある。」この時初めて、複合馬場を踏んだが、完全に馬に圧倒され、対策として、騎乗り上での確実な内と歩度と歩様をやり直すことにした。障害に於ては、今シーズン最大の成果を生んだキャバレッティの活用を本格的にやり始めた。それまでもやってきたが、この目的としていることは、馬に關しては、障害に落ち着いて接近する、踏切りを安定させる二点であった。キャバレッティの後に、平行や単一、ダブル障害などを置き、易しいものからそれらを順次組合せ（踏切り安定化を目的とする為大きいのをやることは意味がないが、助走で出し得るスピードで飛び得る、つまり、だからと向かわないようにするための大きさは求めた。もちろん、人間が脚を使う為に大きくした点もある。）トロッターの利点を活かし、キャバレッティ上では、勢一杯押し飛ばした。これにより、前述のことや、人間が馬について行くこと、障害前で押すこと等四月二十一日の課題を徐々にであったが、次々と解消していった。以後、全日学までこのキャバ

レッティを活用し、その効果は大であったと断言できる。六月は、跛行をしたり足に熱を持って冷したりしながらも、人間の衝に對する柔軟さが養われ、大切なことであると思う馬をどんどん前に出すことができるようになった。そして、六月十五日と十六日、二つの大きな体験をした。十五日、喧嘩をすることがどんなに悪いことか知ってはいたが喧嘩してしまった。馬の口と自分の拳が全く離れ、まるで手綱がないような状態となってしまう初めての事に愕然とするともに、人馬の信頼関係というものを身を持って知らされ悲しい思いをさせられた。十六日、これは、北勇に乗って最大の収獲であると思うが、障害前で追い過ぎてはいけないうことを知ったことである。何処悪いということに気がついたかは、そうしないと全く信じられない程良い踏切りをしたからであるのだが、悪い理由として、馬が焦ってしまった、人がやたらと追うために馬上で不安定になり、結局は拳が動揺し口に当たってしまうの二点であると思う。特に、速足飛越の時、それは著しくこの馬の場合、速足飛越を習得するということは、人馬とも飛越というものに對しほとんど完成したと自分の能力では言える点があると感じている。その具体的方法として、脚を入れる回数が増加ではなく、馬の動きにあった強さの増加であり、最後まで体を起こし拳を一定に保つことに注意の多くを向けることであった。最も大きな習得として、駆足飛越の時、踏切りの三間歩前から踏切りを教えるが如くに推進してやることであった。拳、姿勢は、速足の時と同じであり、絶対に人が焦っては成功しなく、その辺の掛引きは、もう人馬の信頼感しかなかった。このことにより、馬は、障害前でつまらなくなり、人は馬にうまくついて行

けるようになっていき、悟ってから、五日目の道白馬の時、この方法は、大成功で成績に全く関係なく、ほんとうに嬉しかった。自分で体験し得たことがうまくいった時、これ程の喜びが馬乗りにあるであろうか。ところで、人間というものはなんと現金なものであるうか。翌日のノートにこう書いてあった、「六月二十四日、馬休、夕方の勇が、何処かたくましく見えた。」。

この後、拳が固くなり銜受けが悪くなる。速足飛越は、前進氣勢がないとだめで、その為には、銜を受けなければならなかった。また、不整地通過の安定化をめざす為、弱点と思われた濠の類を盛んにやり始め、外乗も少しづつ高度なものを要求していった。濠に対しては、馬が躊躇することに、一種のあきらめを持っていったが、岡田さんに注意され自分の甘さに気づき、毎日やっていった所、つまらないでも行くようになった。北日本の真暗なゴールに一点の天を見た思いで（そんなに気負ってはいなかったが。）あらためて馴致の効果を知った。しかし、七月中旬頃より、試合のことは全く関係なく、人馬共々落ち着きがなくなり、とくに遠征前の合宿の一週間は、自分で作った経路を廻りきれなかったりし、もう馬に会うことも、乗ることも全く苦痛以外の何のもなく、貨車積みが早くきて、馬と別れたい気持ちで一杯であった。

七月二十五日に盛岡に着いた。新しい所に来るとこの馬は、非常に興奮し、二三日は落ち着かないので、銜で押えること等は、絶対にしないで、馴れるのを待った。人の方も、完全に気を取り直し、焦りはまったくなく、充実していた。が、試合四日前に、久し振りによつ踏切りで飛越した時は、正直嬉しかった。今、顧

みるとその頃は、人馬共、日々落ち着いてきて、良い意味での緊張感があり、充実していて、一年間の最盛期（精神的に）であった。三日前、準備運動で馬を手の内に入れるということは、一度手の内から出し、もう一度入れ直すことがよいということを知った。また、北勇に於て、馬を制する運動として、速足での輸乗りのつめ、開けの運動が、効果的である（もちろん、その時は、拳を柔かくし、充分推進してやる必要がある。）ことを知った。そんな中で、とにかく初めての中障であったが、二走行ともゴールが切れた。よい踏切りをすることだけを心掛け、障害前では、心中で「いち、に、さん。」と叫びながら三間歩前推進をやっていた。ゴールに対する気負いがなかったのが幸いしたのか、今まで得てきた良い所ばかりが、集中した試合であり、自分にとっての最高の憶い出の試合となった。一三〇mという障害は、一度も試みたことがなかったが、よい推進とよい拳と良い踏切りがあり、低い障害を確実に飛べれば、飛べることを証明してくれ、その時までやってきたことが実ったようで良かった。唯、人間が馬の大きな動きに不馴れで、落馬したことは戴けないが、他のことが、十分包み隠してくれる程、自分にとっては、充実した試合であった。九位。

この試合後、脱力状態が続いたが、馬場の運動に対し、如に脚が使えていなく、馬上で不安定であることが、はっきりわかってきたし、詰める運動をするためには、伸ばす運動もしてやらなければならぬということも体験して行った。そんな中で、八月下旬、直体を迎えた。その試合後のノートから、「馬場で感じたことは、騎座の安定性とそれに伴う脚の必要性。馬は、試合になる

と必らずかつかする。それを安心させてやるには、きちんと乗ってやること、これに限る。もちろん、それから生み出づる柔軟な拳と、勇気を与える脚がなかったら、何にも得るものはないが。人の充実は、馬の充実と同様に大切なことである。」

九月十二日、全日学の出場権を得たとの報あり。人生とは、何という意外性との戦いであろうか。また、ノートより抜粋。「榊井さん、江口さん、石川と皆のお陰で、もちろん自分もやったということは否定しないが、勇もよくなり、知らぬまに全日学まで行けるようになってしまった。時間が、恐しく感じるとともに、人生の無常さ意外さを感じる。」

しかし、十月初めの合宿以来、肩のやや下後方という変な位置に、両側とも靴傷をおこし、一ヶ月間、馬休が続き、塩湯でマッサージする日が続いた。そんな訳で、貨車積までの間にほんの僅かしか練習できずに、全日学に向うことになってしまい、同時に人間の気も入らなかつた。

試合の前日、障害を見て、絶対に飛べないと確信した。ここで人間が負けた。当日、馬は行く、あまり馬が飛ぶので人間が、驚いた。結局は、トリブルで失権したが、人間の程度さえもっとしつかりしたものであったならもう少し良い成績を残せたかもしれないが、自分にそれを要求するのは、我ながら無理であったと思う。唯もう、全日学まで行った北勇を誉めちぎりたい。

馬の調教をすることで、一番大切なことは、馬の上を行くことであると思われるが、具体的には、馬を上回る忍耐力を持ち得るか否かであると思う。持ち得る者には、常に緊張が、つきまとい

なければならぬであろうと思う。馬が思うようにならない時、怒ってしまったら、その時、その人は、馬に対する怒りを解消することができたであろうが、調教という道からは、一歩踏み出していくことになる。北勇の調教というより、自分の調教のような報告になってしまったが、一応の成功を納められた原因のひとつとして、予定を立てたこと、練習中、配分時間をきちんときめてやったことが上げられると思う。とにかく、北勇号は、僕を信頼してくれた。試合の結果何よりというより、名前だけでも調教者となっている者にとって、馬に信頼されたこと、これが、一番よかったことではないかと考える。



北 秀 号

牝 中半血 栗毛

昭和40年6月2日生

北大馬術部産

父 北埜 中半血

母 北涼(グレース) 中半血

体重 500 Kg

常 田 和 子

今、私はデコについて書こうとすると、非常に困ってしまいます。正直な気持ちとしては、心残りが非常に多くて、本当のところは余り考えたくなく、思い出したくないからだと思います。実際、冷静に書くべきだとは思いますが、何かしら感情が先にきて、それを拒否してしまふのです。こういう自分を一番軽蔑するのは、他ならないデコ自身でしょう。ですからいろいろ先立つ思いは胸の中で渦巻いています。デコの為にも、何か書いてみることにします。もちろん、現在でこそ、こういう気持ちではありませんが、騎乗している時は、自分勝手に気ままにしたりすることは絶対になかつたのですから。

さて、そんなに順追って書くことが出来ないで、大まかに私

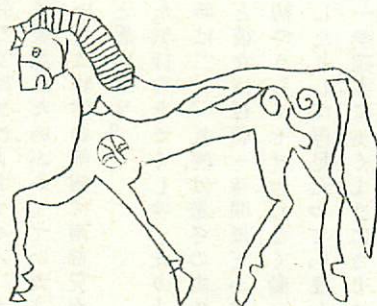
のポイントと書いたことを書かせてもらいます。二月に馬配が決まって、デコのチーフに指名されましたが、その時は、一体何をどうしたらよいか不安がいっぱいでした。でも、「習うより慣れろ」とはデコに対して申し訳けない言い方ですが、正直なところそうしてつきあっているうちに、次第にデコを知るようになりました。特に扶助などに対しては、私の方が教わるということが多くあったと思います。そうした頃、私はデコの口の硬さに注目し始めました。手綱の張り具合が脚との相互関連によって人各々に異なるとはいえ、私の場合では、初めての深刻な問題であり他の人にも聞いたりしてみましたが、一般的なことしか得られません。ですがどうも私の脚は弱いと思われれます。拍車に頼るべきではありませんが、いざという時の拍車も思うように当ることがなかったこともありました。それで、ハミのことを云々しなければならぬのは、今から思えば、自分でも愚かしいことかもしませんが、当時はそうもいってられませんでした。脚を強くすることを常に念頭に置きながらも、口向きの軽さを求めてみました。馬の顎が、常歩ではそうでもありませんが、速歩では、つっぱってしまい、馬体がのびきってしまふ状態を示していたからです。しかし、ついつい速歩の速歩や速度に気をとられて、挙が硬くなっていたようです。意識と動作を分離した運動は未だ未だでした。直線運動でためなので回転運動を特に利用し、そこでは(つまり直線にならなければ)顎のつっぱる具合はなくなつたと思えます。直線でも次第にその傾向はみえたと思われます。ところが、運歩本来、最も重要な前進氣勢に対しては、脚によるところが最大なので、口向の柔軟を求める半面、蹄跡上をゆるみ手綱

にして、脚のみで、思いきり伸した速歩運動を試みることにしました。その時は、馬には、全く口を気にさせないようにして。これは、馬には煩わしい小さを要求によるものよりは、気分転換にも、「前へ」という脚反応の敏感さへも、役立つことだったと思います。脚の前進作用に対して敏感になれば、今、致命的とも云える、試合上での障碍拒否は少なくなるだろうとの見込みもありました。

さて、一番気になったのは、何といっても試合上での障碍拒否です。その原因をはっきりつかむのが先決なのに、どうも単純にわりきれませんでした。ただ障碍への恐怖心があるように思えました。それで、いろいろな障碍馴致を試みようとするのですが、小さな連続障碍だけでは、こんなことだけで、という焦りの方が多かったと思います。しかし、最後まで、練習中と試合中との違いをつめることは困難でした。

デコは、齡、十歳、女盛りといえますが、今度 離厩すること、もっと部員の方の熱意を望むところは多くありますが、決定したのなら仕方ありません。残念です。

(離厩はとりやめになり、現在も部馬としてがんばっています。)



千里馬号

牝中半血鹿毛

昭和41年生

体重452Kg

わが愛しのチョン

景山博文

調教報告をということですが、どうせまっとうなものを書けるはずはありません。思いつくまま、ごったまぜに書いていきます。四十六年度部報の「わが愛しの君」と題する梶村兄の千里馬についての文章にならって書き始めていこうと思えます。「わが愛しのチョン」と題する所以です。

チョンにとって僕は四人目の恋人のほずです。初恋の人は梶村兄でしょう。僕が新入部員の頃梶村兄は四年でした。兄いうところのチョンとの「デート」を毎日見せつけられていました。兄はよく新入部員を二人ほど連れて彼女と外乗に行っていました。でも何故かお供の部員は看護学校の女の子のときが多かったようです。(どうでもいいことです)彼女と梶村兄とのデートの様子は「わが愛しの君」にほのほのと描かれています。あれから三年たったわけです。チョンはどのように成長し変身をとげたでしょう

か。

彼女とは二月から交際を始めました。最初彼女は不安そうに僕を眺めていました。それで僕は彼女の耳元でそっと「僕はフェミニストだから安心していいよ」とささやくや否や遠慮会釈もあらばこそ、いきなり彼女に乗っかりました。二人のなれ染めです。彼女の僕に対する気持ちなど知ろうはずはありません。たゞここ数ヶ月ほどは恋人役がいなくて彼女はだいぶふてていたようでした。それまでの調教状態については昨年の部報に南部兄が書かれていたようなことで大差ないと思えます。

僕はまず彼女のイライラした気持ちをなくしゆったりとした気分させようと思いました。時は二月、札幌は厳冬の雪の中であせることはありません。僕と彼女は毎朝一時間ほどかけて構内をくまなく散歩しました。最初のうちこそせわしなく動いたり急に止まったり、或いは走り出したりして浮足だっていました。それも間もなく落着き、一歩一歩確実に歩くようになりました。馬上の僕はとうとう何しろ寒いので彼女が驚いたり、びくびくしてても常歩で歩いているかぎりはもっぱら馬耳東風をきめこんで、ひたすら「サミイナア、サミイナア」とうめいていました。放棄手綱にして図書館横の坂道など彼女がゆったりと一歩一歩確実に歩くことだけをこころがけました。この冬の明け方の常歩は馬上の人間にとっては寒さが身にしみました。しかし乗り手が彼女に対して何ら積極的に働きかけなくとも、この散歩は彼女と僕にとって非常に有益であったようです。彼女の僕に対する目付が変わってきました。馬上に僕がいることを認め、頼りとするようになってきたことです。もうひとつ、落着いてきました。あたかも愛を

得た女の子がどっしりと安定するように。僕も彼女に答えました。やさしい愛撫でもって。

馬場内では雪を踏みかためた輪乗り蹄跡で速歩の輪乗りをやりました。このときも放棄手綱で軽速歩をとりながら彼女が伸々とした確実な速歩をするようにこころがけました。このとき気づいたのですがどうも左右の速歩の感じが違うのです。左手前はゆつたりとした速歩ですが右手前ではゴツゴツした感じがするのです。色々と原因を考えてみましたがよくわからず、結局彼女は右手前は苦手のだろうというごく当り前の結論に達したことにして気にせず左右均等に運動を進めていきました。やがて速歩が安定したころ速歩から駆歩発進の練習を加えていきました。これも放棄手綱です。右手前の駆歩が出ていくとこのことでしたが、左右両手前の輪乗りでの速歩を充分やって体をほぐした後には別に難なく出るようでした。右手前に出たら常歩に落として愛撫、しばらくして速歩にして駆歩の発進、これのくりかえしです。この頃は僕が意図したことに彼女が充分に答えてくれ、毎日確実に少しづつ進歩していることが感じられ、非常に嬉しかったことを憶えています。これまで放棄手綱でやってきたのは下が悪いこともありますが何よりも頭頸伸展と彼女の肉体的、精神的なりラックスを図ろうとしてです。雪が積っているので放棄手綱でも輪乗り蹄跡からはずれることがないので助かりました。

やがて三月に入り雪が解け始めました。馬場はガチガチです。この頃、昨年は前肢の故障で長期間休ませたことを思い運動量をおとし外乗にいったり、今までの復習を軽くやったりして過しました。

この頃のこと、彼女と外乗にいき例によって図書館の裏手あたりをノンビリと散歩していたときのことです。遊歩道の真ん中で抱擁している男女に出くわしてしまいました。このまま歩いていたら彼らの邪魔をしてしまいます。ヤボなことははしめいとアワをくってわきへ入ろうと思いましたが、でもチョンは驚いたことに（驚かなくてもよいが）まったく興味がなみたいでした。パカ、ポコ、パカ、ポコとあたりを響く自分の蹄の音に聞きほれるように静かに頭を左右に振って進んでいきます。不思議なことに恋人達も馬の蹄が近づいてくるのに全く意にかいさなみたいにあつかなく抱き合っただけです。結局オタオタしているのはオレだけじゃないか。そう思ったとたんムッときました。チョンの足を急がせて二人に近づいてやりました。すると二人はわきへよりました。そして僕らが通過するのを腕をとりあって待っているのです。曰く「まあこのおうまかわいいわあ」まったく近頃のガキは話が全然それました。この頃になるとチョンにとっても外乗は馬場での運動を終った後のかっこうの息抜きとなったようです。冬の雪の積っているところでは雪が音を吸収するその静けさや白一色の中で動くものに対して必要以上に不安が増すようです。雪が解け大地が現われ始めたこの頃になるとチョンにとって外は不安の対象としてはなく心地よい安寧と興味の対象となったようです。

そして四月、雪もあらかた消え去り、黒々とした大地が現われしました。待望の春がやってきたのです。馬場には砂も入りコンデイションは上々です。この頃から手綱をとって口との接触をもちはじめました。やはり輪乗りです。運動の主体は速歩。これと平

行してキャバレッティ、キャバレッティに続く低障碍も少しづつ飛び始めました。キャバレッティはチョンの速歩にあらうように等間隔に置いたもので、頭頸の伸展低下とストライドを長くすることを意図したものです。さらに低い単一を三つ四つ並べ二間歩の駆歩で飛ばせることもやりました。高さも少しづつ変え、障碍をよく見て、リズムを持って飛越させることを念頭におきました。が、どうも連続障碍は下手でした。踏み切りが合わなかったり、後半になるとアタフタとした飛越になってしまいます。飛越の際アクロバティックに首を下げるので、その為立ち直りが遅くダブル、トリブルだとそのままの態勢で障碍に向っていつてしまふようです。やがて半沢杯馬術大会でシーズンの幕が切れておとされました。以上端折って簡単に記します。何故って遅れに遅れたこの原稿を一刻も早く出さないと恐怖の部報委員長殿に冷たい目差してにらみつけられるからです。一年目の彼に肉体的衝突なら絶対に勝てると思うのですが、メガネの奥の冷たいまなざしと、あのいやに落ち着きはらった声を聞くのと恐れ入って自ら恥ずるのみ。本城くんお願いだからあと三十分待って下さい。三十分のうちにきつと書きあげますから。

閑話休題。半沢杯、対酪農戦、道自馬と続く試合の中で道自馬のときがチョンの絶好調時であったと思います。中障において落すもありましたが僕とチョンは持てる力を出し切れたと思います。そして盛岡での北日本へと続くわけです。当面最大の目標であった北日本ではあっけなく失権してしまいました。この敗北は僕にとって手痛いものでした。でもその手痛さは別のところから来るもので、チョンと僕の二人には関係のないことです。僕個人にだ

けやりきれぬくやしさがこみあげてきました。

こうして彼女との別れのときがきました。最後は惨めな結果に終わりました。でも僕達二人はよい恋人同士でした。彼女にまたがっているとき、手入れのとき、彼女をひいて草を喰わせにいくとき、僕らはお互いを信頼し、全てを許し合える仲でした。彼女と別れても僕の心の中にはいつまでも二人が恋人同士であったときの彼女の姿が決して消えさることはないでしょう。今後馬に乗る機会があるにせよ、他の馬とこのようにも密接なかわりあいがもてると思えません。時間的にも精神的にも無理でしょう。

彼女は非力で肉体的にも精神的にもスポイルされやすいと思います。今はこのことだけがいささか気になります。



スターライト号

牝 ア・ア 栗毛

昭和41年生

沙流郡門別町産

父 トモスベビー

母 銘乾

体重451kg

添田昌一

学生でいながら、三年位の馬歴で調教報告とはおこがましいですが、これが北大馬術部の歩まなければならぬ道と思ひ、これまでのスターライトと僕のやってきたことを書いてみます。正式に馬配を決められたのは二月四日ですが、一昨年の秋、松井さんから「おまえがスターライトに乗れ。」と言われ、いろいろと教わりました。特に注意点をあげると。

○骨瘤のあとのため常歩を多くすること。

○速歩では、歩度が伸びてチョコチョコ走らぬ様に、

歩様が悪くならぬ範囲で伸びればよし。

○頭を下げる。(ハミをあてぬ様に。)

下げてはうけ、下げてはうける。

○障碍は八〇cm以下、巾はせいぜい八〇〜九〇cmで、ゆっくり真中を飛ぶように。

○キャバレッティ↓障碍。を数多く(馴れるように)。

○障碍前に最良の体勢をとるべし

体をおこし、確実に推進し、鎧を最後までしっかりふみ下げること。

○「新馬」であることに留意し、つねに冷静に「ていねい」に乗ること、緊張と「休め」を交互にくり返し、馬があきないように。

一つ一つむずかしいことである。ただていねいと思ってきただでもていねいにやろうと思うと、思いきった運動、障碍など、できなくなってしまうが、それはまちがいである。どうしてもおくれについてゆけなかったが、キャバレッティを数多くやり、馬のリズムをつかむと速歩の飛越は、だんだんついてゆける様になった。

我々は障碍馬を作るのだから、障碍を飛ばなくてはならぬ。ただ大きな障碍は飛んではならぬ。数多くいろいろな障碍を飛ばせば良い。と言われ、これをスターライトと僕の基本にしている。

僕とスターライトの場合、速歩運動が中心になっている。最初は、あせった様なチョコチョコした速歩しかしなかったが、ゆっくりとした速歩をまずできる様にと、ことさらゆっくりと速歩で左右の回転をていねいに、まるくまわる様に注意して、急に回転することをさせた。回転をどんどんする様にすると、彼女はツツカケで走り出そうとすることがなくなり、次々と出す扶助に従うようになってきた。扶助に従った時は、拳をゆずり愛撫すること

を心掛け、つねにやった。そうしてから速歩での伸縮をやり出したが、思った様に伸びない気がしたので、キャバレッティで間隔を一定にし、どんだん脚を使い何度も通過すると、大きく伸びる様になり、間隔を広げて一歩一歩馬が注意深く、スピードに乗ってやることに心掛けた。こうやる様になると歩度の伸縮も少しずつできる様になってきた。このころから駈歩の発進をやる様にした、右手前の駈歩発進がうまくいかず、長い間これには悩まされた。今でも左手前の方が得意である。

こうやっている間も毎日障碍は続けていた。毎日の運動で、だんだん、スピードが出て勢いに乗ってきたらやることにしていたのが、馬にとっても、僕にとっても有効であった。試合の準備運動をするのにも、参考に作り方などでもできる様になった。最初障碍を飛ぶと走ろうとしてこまったものであるが、速歩での伸縮をできる様になってくると、運動をつめることが馬も人間も知り障碍をとんだらつめることができる様になり、誘導も自在にできる様になった。

こうなってくると彼女も僕の扶助を誤解することがなくなり、障碍には落ち着いて、力強く向かう様になってきた。

この間も速歩が中心で駈歩は発進しかしなかった。これからもこれで充分という気がしている。リズムカルでも一歩一歩、懸命に体を動かすこと。スピードがある。回転も一歩一歩でいねいにまがれる。馬の足さばきがうまくなる。キャバレッティをいろいろ工夫できる。障碍の踏み切りが人馬共に理解できる。伸縮がはっきり区別でき、馬が一歩一歩体を動かすための、狂奔しにくい。停止も無理がかからぬ等、良い点が多いと思う。

これには小さな経路回り、試合での経験が大きく作用した。その都度、彼女をほめちぎり、次の時にいやがらない様、細心の注意を払った。経路を回ってくると思持ちの良いものである。ほめられるものであると思わせ様と努力した。他のことでも、何かをやらせようと思ひ、やったらエサをやり馬が進んで扶助に従ってくれる様に心掛けた。馬が進んで扶助に従いだと、動きがなめらかでリズムカルで、次の扶助を待つ様になる。歩様が大きく伸び伸びする。でもここで、馬なりの動きになりはしないかと思ひたが、どんだんちがった運動を課すことで、それが扶助に従がったものであるか、そうでないかは、すぐにわかった。

この様な経過で、去年一年は暮れました。

僕が思っていたことが、だいたいうまくいったわけですが、近頃の僕が、扶助が荒くなったことに、ものすごく反省しています。写真を見ると、何とかついていっているのですが、騎座が弱いことを痛感しています。脚がふらふらすること、ヒジが上がること、最後の一押しが不足すること等、まだまだやり残しています。これからも彼女には「北大の星」「北海道の星」である様に大事にしていこうと思ひます。彼女のすばらしいバネを生かすため、さらに磨きをかけるため、スピードに乗った運動、リズムカルな運動を心掛け、生き生きと、はつらつとはねる様に、筋肉をふるわせる様な、やわらかいゴムに包まれたバネの様に、乗っていきたく思ひます。同時に後輩も彼女に圧倒されぬ様、育てていきたいと思っています。

羊 蹄 号

牝 ア・ア 鹿毛

昭和44年3月4日生

音更町十勝種畜牧場産

父 サラ ハマテッソ

母 ア・ア 久享

体重450Kg

相 川 宗 敏

羊蹄号の調教報告などという立派なものを書けず、この馬のチーフとして一年近く騎乗した期間の反省と、四年間の部生活におけるまとめとしての感想という内容に留まってしまうことに、部報委員の方々に一言お詫びを言わねばなりません。

馬配が決定し新たに動き出したのは、二月初旬であった。この時期の騎乗中の注意は輪績連歩（遅い歩度での）によりハミを噛ませることに重点を置いていた。そしてこのハミを噛ませることを持続し、直線に結びつけることを毎日のようにやっていた。羊蹄はどちらかという、ハミに重ってくる馬である。だからいつも馬口の間を新鮮に保たねばならぬことを念頭に置いていたつもりであるが、乗り手の技術の稚拙なことにより、馬をハミに

に重らせ、減速或いは停止をしないからといってハミを引っぱり余計に重らせてしまうことが多いことが多かったようである。兎に角この頃は輪績連歩でハミを噛ませることが満足に出来なかったの、そのことに毎日必死になっていた。また時々直線連歩を行ない歩度を伸ばそうとすると、歩幅が大きくならずせつちかな速歩になってしまいうのが常であった。速歩での障碍通過（高さ八〇センチ位までの低いもの）では、騎手の拳が硬く突っかかり気味であった。又、常歩では停止・前肢旋回を多く繰り返した。

春休みの間は馬場の氷が融けたり固まったりで十分な運動はできなかつた。春休み中前任者の舁井兄より受けた注意には教えられないものが多かった。春の下の悪い間はきつい運動はせず、常歩による基本的な練習をみっちりやること。回転を良くするためには、前肢旋回とか左右の脚を教えるだけでは駄目であり、輪績連動による柔軟性をつけなければならぬこと。体重の転移によって回転できるようにすること。又、前後の柔軟性が大切であり、拳をにぎる或いはひかえると顎を譲るよう調教したのはそのためであること。羊蹄は不従順で叱った場合、それが馬をビリリとさせればよいが、させられなかつた場合には次の機会に又同じ不従順を示す。そして同じ叱り方をしても全く同様に効き目が無い。この様なことがあるから気を付けなければならぬこと。春休みの間は常歩の基礎運動、前進、停止、後退、前肢旋回、左右回転運動を繰り返したが、脚によって前進していない時は（馬が勝手に前に出て行っている様な時）、何を行なおうとしてもハミに重ってくることが多い。つまりハミに重ってくる馬であるから、その様な時は脚が効いていないのである。

また低障碍通過は、部班においては騎手の技術不足で前の馬にくっついて行くことばかりで、障碍接近は突進することが多かった。各個乗りにおいては、速歩低障碍では余り突っかかってくることはなかった。

春休み明けの合宿（新二、四年目対象）では、合宿途中から下級生の部班に加わったが、障碍への突進癖といおうか、前の馬にくっついてゆく傾向が強かった。合宿最後のミーティングにおいてまとめた今後の方針というものはおおよそ次の様である。

○柵井兄の残していったものを馬から吸収し、体で覚え維持し、より良い所を目指すこと。

○前進、停止、後退これは馬がよく知っている。回転を良くすることに努める。

○口との関係は輪線でハミを噛んだ状態を直線に結びつけ、大きな歩様の速歩、駆歩ができる様努める。

○障碍飛越は速歩、駆歩による低障碍通過を行なってゆくが、駆歩における飛越には突進癖が出る恐れがあり、これを解消せねばならない。この恐れを克服できなかったのが後の大きな失敗につながってゆくのであるが、この時点では羊蹄での試合経験のないことにより解らなかつたのである。

○馬場の外に出て馴致を必ず行なう。又総合馬を目指すことにより、馬場外でも走り回れることが必要である。同時に筋力をつけるために低温研裏山の登降を常歩で繰り返し返す。

などである。

五月、六月と北大馬場で半沢杯、道自馬の試合が行なわれ、いずれも小障に出場した。しかし結果はひどいもので、馬を制御す

ることができず突走られ、障碍が小さい故羊蹄の能力をもってすれば、またぐ程度のものであったので、ゴールはしたものの全く恥ずかしいものであった。また練習中の経路回りも突走られることばかりで、騎手の技量不足をひしひしと感じた時期で、心の中には不安しかをかった。要するに騎手の技量が上達せねばどうしようもない程悍威の強いのが羊蹄という馬であった。おまけに夏休みに入っすぐの合宿（盛岡へ遠征する直前の合宿）では、高さ一〇、巾一〇〇位の斜三段で拒止及び左へ逃避され、馬と喧嘩したあげく岡田監督の力を借りようやく通過させたが、決して良い状態ではなかった。この頃、今までの自分の乗り方の拙さ、技術の不足を再認識させられて、盛岡遠征を目前にひかえ焦りと不安の日々を送っていた。それに加えて津軽海峡を渡る盛岡までの貨車積は、初体験の羊蹄にはきつかった様で、盛岡で体温が四〇度を越す悪い容態となり、当地で獣医に診てもらはうはめになつてしまった。出場したのは小障に相当する B 障碍であり、日程の最後であったので容態は回復したが、以然騎手の技量不足と今までの乗り方の悪さがあとを引いて、ついに失権の憂き目を見てしまった。結局冷静になって考えたところ、遠征したのが失敗であつた。

盛岡遠征より帰礼し、体力が回復してから騎乗を再開した。この時期には朝、昼の二回騎乗が認められていた。心配して練習を見て来て下さった柵井兄より、「羊蹄の悍と喧嘩したら駄目であり、軟かい拳で馬口に追隨しその悍威を利用しなくてはいけない」と注意を受け、羊蹄の悍威の強さと自分の拳の硬さを再認識させられた。又旭川遠征の直前やはり柵井兄にみてもらい、軽い径路

回りを行なったが、この時はじめて従順な突進するようなことのない走行ができた。つまり羊蹄は、騎手の拳が軟かく、脚が使えらる状態にありさえすれば、少なくとも練習における径路走行程度はこなせる位の調教は、既に榊井兄が降りた時点においてできていたのである。それがこの時点においてやっと体で解かったのであるが、それが旭川遠征の直前のことであつたというのは余りにも遅過ぎた。つまりもうこの時シーズンの大半は過ぎてしまつていて、今まで自分が何をやってきたのかがやつと解かつた様な気がした。即ち自分は今まで何もやっていなかったのだ。自分は今まで何も解かつていなかったのだと。僕が羊蹄を引き継いだ意義は、それが解かつたところから意味を持つてくるもので、それが解からない時点においては次なる飛躍を望める方針を何ら立てられないはずであることが、明白なのである。要をすれば、それまでの自分というものは、一応方針などを持つてやっていたつもりであるが、その方針などというものは何を礎に立てたものか甚だ疑問になつてくるのである。つまりそういう事が解かつてはじめて次なる段階への飛躍が望めるわけである。それでは羊蹄には何が必要なのか？騎乗する上でどのような事を考へ行なつて行かねばならないのか？それは僕の知覚し得たものでは可成り軽い状態を衝を受け、しっかり脚を使えば少なくともうちの馬場で行なう経路回り程度では鎮静して運動するということをやつた上で、さらにそのことを安定した状態で常に行なえるという方向に持つて行く必要があつた。この鎮静した走行が基本となつて、それに付随して馬の飛越技術を高める上での踏切りの安定など様々なことが行なわれなければならぬのである。絶対に突走られ、障碍

に突進する様な状態で飛越を行なうべきではなく、常に鎮静した状態にもつていつてからこれを行うべきである。突進した状態というのは、騎手の意に反する動きで、言い換えれば馬の勝手な動きである。多くの場合突進は馬の恐怖心からの興奮に由来すると思えるので、馬が恐怖心かられ障碍を通過してゐるうちはまだ良いが、一度拒止逃避という一般に言われる反抗の方向に向いてしまつた場合には、破局がおとずれるのは目に見えてゐるし、又そうなるのは時間の問題である。特に悍の強い馬においては技量不足の騎手が乗るとこの様なことが起こりがちである。シーズン中の羊蹄と自分はまさにこれらの事の典型といへべきものであつた。

また羊蹄は特に連続障碍が嫌いな馬である。連続障碍はどの馬でも嫌手なものであるようだが、これは悍威のある馬なら能力的には問題はなと思えるが、羊蹄の様に牝馬で気の小さい馬は、びっくりするの尻ごみをしてしまふ傾向があるようである。だからこの様な馬には、ただひたすら何も恐ろしいことはないのだという事を根気よく教える必要がある。このただひたすら根気よく続けるというのは、人間にとつて非常につらく思われるが、これをやらねばならぬのは馬に乗る以上当然である。いわゆる馴致ということがここでも大きな意味を持つてくる。故今村大佐が障碍馬の調教というものはすべて馴致であると言われた言葉が今更ながら浮かんでくる。

その様をわけて旭川の試合は当然の結果といへべきか、失敗に終わったわけである。榊井兄にも言われたことであるが、羊蹄はやはり来年の馬であるということ痛切に感じたのが旭川の試合

であった。このことをもっと早い時期に再認識しておれば、無理のない騎乗が続けられたかも知れない。このことは深く反省している次第である。即ち学生馬術というものは、馬の引き継ぎといふことが大きな問題であり、いかに早く、いかに適確に引き継いだ馬の調教状態、程度を把握できるかということが勝負の分かれ目になると思える。しかしこの場合技術が問題となり、例え言葉で教えられても体で感覚できない限り、それが解かったとは言えず、方針もぼやけ新らたな飛躍が望めぬ停滞した状態に陥ってしまう。

旭川での試合以降は以上書いてきた様なことを踏まえた上で、最初からやり直すつもりで騎乗した。このころは特に回転の悪さは前後の柔軟性の欠除の結果起こってくるのであることを再認識し、輪線速歩、駆歩における巻乗り、半巻き、輪乗りの開閉を多く行ない、歩度の伸縮を最大の目標とした。大速度下での経路走行を強いられる障碍飛越競技においては、軟らかな口向きによる前後の柔軟性が絶対条件であり、これがないと致命的である。結局北大の馬は多くの場合、前後への柔軟性に欠けることにより回転が悪くなり、経路走行に支障をきたしているであろう。ただ歩度の伸縮といっても、余り長い間伸ばしたままでいるとか、伸ばしきることはよくない様で、つめた歩度で回転運動を行い、その合間に時折グッと伸ばし又つめた運動をするという様に重なる馬は、馬口をいつも新鮮な感覚に保つために、種々様々な歩法、歩度の変換を常に心がけるべきであるとは六月に来部された春田兄の御言葉である。また連続障碍の飛越においては、リッター氏言うところのイン・アンド・アウトの重要性を思い出し、

ごく低い三連のイン・アンド・アウトを作り、これを速歩で通過し鎮静する様になつたら、駆歩で通過するという方法を行なつた。慣れるに従つて馬も鎮静の度合が増してきたことは確かであった。しかし飛越後はまだ突っかかることが多く、飛越後でできるだけ早い時期に停止をさせ、又再び駆歩発進をして同じことを繰り返した。まだまだほんの基本的な段階であつたが、これを繰り返す種々の障碍を組み合わせ、程度を段階的に上げてゆけば必ず良い状態に持つて行けることは確信できた。要するに羊蹄の様な悍威が強くて口が敏感で憶病な馬は、一年二年の短かい期間で試合に良い状態で臨める様にするのは、学生の技術を以つてしては難しいかもしれないが、長い期間をかけてじっくりと徐々に調教を進めて行けば、必ずいつかは成果が上ると思われる。それだけのことをする価値を羊蹄という馬は持っている様である。

想えば僕が羊蹄号と付き合ひ始めてからもう二年近くなろうとしている。そもその始まりは、三年目の四月からチーフ榊井兄のサブとして馬体管理の手伝いをする様になつたことである。當時入厩後半年位しか経ってはいなかつた羊蹄は、小さな痩せた馬で毛色が千里馬と似ているのでよく間違えられたものだった。この時期はまだ曳馬及び手入れ位しかしなかつたけれども、付き合っているうちに段々と馬の性質が解かつてきた。この頃大きな失敗があつた。それは大学祭の時馬繋ぎに食ひ込み、二針縫う怪俄をした。そつぱし索綱の金具が左前肢繋ぎに食ひ込み、二針縫う怪俄をしたというより、むしろさせてしまつた事である。この時の原因は索綱が長過ぎた、張り綱として二本しかしていなかつた等々あるが、何と言つても馬という様を動物を目の届かぬ所に危険な状態で放

ってかいたという人間の心の油断であろう。幸い土曜日のことで獣医の小池先生が駆けつけて下さって、すぐ治療を下さったので大事に至らなかった。怪俄の場所だけに心配が大きかった。二、三日の間は三肢で立っている状態で熱があり、可成り腫れもひどかった。マイシリンでは効かぬとの判断から静注のダイメトロンに代え、傷口の消毒を続けた。治療の甲斐あってか一週間後には腫れも殆ど引き、大部回復してきた。フーキョロ、アクリノールでの消毒、湿布を続け、二週間後に抜糸をした。同時に併発した右後肢飛節の腫れが引くのを待って練習に使い出したのはそれから二週間以上後の事で、この間一ヶ月のブランクがあった。ここで感じた事は、というより学び取ったものは、学生の馬術などというものは限られた馬で練習し試合に出るのであるから、丈夫な馬を入厩させると同時に、その馬体管理を徹底させ怪俄などで練習に支障を来たことが無い様心掛ることが何にも増して重要であるという事である。羊蹄との付き合いでこの他にも数々の想い出が残っているが、ここでその様なことを述べるのはふさわしくないので省略する。

考えてみれば僕の馬術部生活四年間というものは、あらゆる面で「馬とはこういうものである」という事を何かある度毎に教えられ、積み重ねて来た様なものである。この事は誰でも馬術部生活をやってきた者なら考えるであろうが、この何かある度毎にという事が多ければ多い程、善きにつけ悪しきにつけ、馬をよく知り技術的にも上達するチャンスが多いことであろうと思う。このチャンスとなる事というのは様々であるが、前述の様に馬が怪俄をするという悪い類の事でも、人間にとっては馬を知ることの一

つのチャンスである。しかしこの様な事は望ましくないことなので、出来る限り無くして行かねばならない。またこの類の事がもし仮に全くなくなったら馬を知るチャンスというものが減ってしまうであろうか。否否、馬を知るなどということには到底四年間を通じてはごく僅かしか出来ないものであって、知らねばならぬ事は山程あると思う。前述の様な悪い類の事は実際上起こり得るのである。だから馬に接し平々凡々と馬術部生活を送っているもいづらかは馬というものがわかり、取扱いも出来る様にはなるであろう。けれども馬術部という運動部の最終的な目標は試合に勝つことであり、そのためには技術的、精神的に向上せねばならないのである。それには馬によって与えられるチャンスを待ち馬を知ることだけでは、不足なのであり、馬に働らさかけ、その結果として何かが馬から返ってくれば馬を知るチャンスとなるわけであるから、積極的に馬に働かせる気持が絶対必要なのである。以上、くだくだと書いて来ましたが、要するに部員諸兄の自覚と積極的な気持に期待する次第であります。健闘を祈る。

最後に、岡田監督には練習、合宿、試合を通じて非常に熱心に御指導をして頂き、真に感謝の意に耐えませぬ。その割には自分の技術の進歩のなさを恥じ入っておりませぬ。本当にありがとう御座いました。



天竜山号

騎 サラ 黒鹿毛

昭和43年3月6日生

浦河郡浦河町産

父 サラ ネグアービート

母 サラ カンキヒメ

体重 516 Kg

拜啓天ちゃん様

水野 豊 香

みんなが今年こそはと期待していますよ。あんたのことを。でもほんまにやっかいな足やで、去年の三月からやっただかないっしよに心中するつもりでつき合いを始めたのは。その前にたくさんの先輩とつき合ったそうやけど僕とが一番長いものになってしまった。足が痛い痛いって言いどうしやったらもんで先輩もあいそつかしてしもうたんやろな。五月くらいまではようまともに練習せんかったな。びっこそせんかったけど爆弾かかえてるようなもんやった。毎日明けても暮れてもキャバレッティと外乗してた。あせらんとじっくり君のことを知ることができたのもあのころやうた。獣医には筋膜炎という難しい病気で見離されてたのによ

耐えてくれたもんや、ノロノロ走ってるもんやで僕は汗まみれで君の腹たいたった。それでサラブレットか、ネグアービートの息子かって言いながら。

五月にはじめての試合をやったな。見直したで、ほんまに、やっぱりサラブレットやった。もう腹たたかんでもよかった。このころは、キャバレッティをだんだん難かしくしていった。文句も言わんと巾、高さこなしていった。やっとな波に乗った練習ができたな。君は少々おこってやけのやんばちぐらいにしたほうが、よう体を動かした。口を乱暴にギリギリやっただかもしれん、せつかく前に行こうと思ってたのに、悪かった。ちよつとあせってたのかもしれん。

六月になって二度目の試合やった。試合はともかくとして、その前にはじめてつまづいた純白の紙にきれいに、ていねいに地図をかいていたのがもうちよいというところでポトッとインクをおとしてしもうた。君はやっぱり憶病やった。やけのやんばちになりきれへんかった。それから非常にガンコやったあときは二日眠れんかったで、ほんまに。

八月はなにもかも新しいづくめで盛岡に行った。あの失敗が頭をはなれんかった試合ごととこれに終わりやこれでもうパンクやさよならやと思いつき合ってきたが、もう離せない。勝負するつもりで中障やっつたとはりきってたけど、君と相談せんかった。ただ一人でそう思ってた。やっぱり君にとっては去年はあれでよかったんやろ。秋になってみんな東京やっただけど二人でなんやらゴソゴソやっつた。二人で今にみてくされなんてほやいて寒いのもなんのそのキャバレッティは御卒業。もっぱらエンジンふか

してブーンと前に出てブレーキをかけりゃ全天候性ディスクの如く、止まるようにやっていた。もう君はあまり手のかからぬうりになっていた。でもやっぱり足にきた。今になって言えるけど、要求を半分殺して妥協してやっていたはずだったのに、おまえは裏切った。ひざが腫れてきた。雪が積ってクラボンをつけ馬場がでこぼこで固まったのがあかんかったのか、僕の方がやけのやんばちになっていた。慢性化に移行すればたんともないって獣医の先生が言ったけど君はどう思ってるのか、なんとか言え！

今年になって運動量は半分に減った、が、この手紙を書いている間にこんどは別の足が痛いってぬかしやがった。今までようがまんしてきたのが一っぺんに爆発したように君はあわれな姿になっちゃった。三月以来はじめてのびっこであを。

ほんまはこれからシーズンに向かってどうしようかって相談したかった。もう肢の話をするのはいやになってしまった。もうちょとで春になる、なんとかまじめに歩いてくれ！頼む。それではないと去年あんなにがんばったのが、なんのこっちゃわからんようになっちゃった。言いたいほうだと言いましたが、気にさわったら許されたい。それじゃまたあした。

敬具

現症

左前肢腕関節炎

右前肢急性総括伸筋腱炎

天竜山号 昭和43年生まれ

4才で中央競馬上がる

体高161cm 体重515Kg 黒鹿毛

既往症 両前肢浅屈腱炎、左前肢管骨瘤

左前肢筋囊炎



疾風号

騙 ア・ア 栗毛

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父 ア オーバーマイン

母 ア・ア ミストビハヤ

体重 466 Kg

荒井 隆

昨年疾風号を担当されていた阪上兄が、函館から原稿をよこされたという事で、急拠私が書く事になりました。一日で書いてほしいという事で十分准考の余地がなくまとまりがなくなってしまうと思いますが、悪しからず。

疾風号は、せんくり毛、明けて六才のぼけっとした馬です。部班で下級生が乗って一番たいへんなのがこの馬かも知れません。

一昨年は現在も毎日馬に乗って活躍しておられる西村兄が調教を行っていました。疾風が現在でも部馬として十分活動できるのは大半兄に負っているといつて過言ではないと思います。この馬のハミに対するすなおさ、口のやわらかさ、すなおな障碍飛越、兄の大きな力を感じます。そして昨年は、現在函館の水産学部で一人気をはき、名馬X号を調教されている阪上兄が担当されました。北日本学生日障でのまさに部員全員の願いのこもったドラマチック

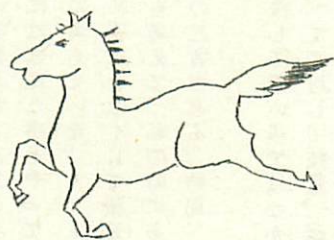
クを優勝をはじめ、各試合で活躍されまた、日々常に疾風と一身体の生活をおくられ、部員の愛馬精神の鏡となり、その風貌からは想像も出来ない、愛情の細やかさを部員に見せてくれました。阪上兄が九月無事（一年おくれで）水産学部へ去られた後は、私が十二月に乗るようになるまで、一人いや一頭さみしそうにすごしていました。

私が乗りはじめた時は、どうしても馬と動きがちぐはぐで思ったように動かず、たいへん苦労しました。にぶい馬といつては、千葉先輩におこられてしまひそうなので、いみじくも加藤元先輩がいわれた「のんびりした」馬なので、きびきびとした運動を出るとよいのですが、乗りはじめて感じた問題点は、ハミを受けようとす様だが、まだ十分ハミを信頼していません。体がかたい。特にあばらがかたく左右のバランスが悪い。その為右手前の駆足が出ない。一定以上のスピードが出ない。これは速歩においても駆足においても、良いと思った点は口が非常にやわらかいという事。障碍は飛ぶものだというすなおさがある。歩様がゆったりとして大きい。最大の長所は、馬がちょっとのんびりしているが、すなおであること。これは西村、阪上、両兄の力の大きさとたいへん感謝しております。

私がいままで（三月中旬）乗って、ある程度この馬を理解し、動きにもなれてきた現在の目標、というより方針は、右記の欠点をなくす事です。具体的には体のかたさをとり、敏感さをやしなう為、各種歩様において歩度をつめた時は書を高起せしめ、左右に対する敏感さを求め、歩度をのばした時には十分首を伸展せしめ大きなスピードに乗った動きをする。これは出来たらよいとい

う目標であって現状ではありません。しかし、理念としてまちは
っているとは思いませんし、方法論としてもまちはがっているとは思
いません。この点西村兄とはかなりちがった面があり、すばら
しい技術をもった兄に対し、若輩の私という事にもなるのです
が、私は私なりに、自分の考えた様にしたいと思っています。今
年一年乗ってシーズンを終わった時点で、私にのらしてよかった
と部員に納得されるようになったらと思っています。原稿を書い
ている時間がみじかいかいし、十分考える事が出来ないのではつきり
とはわかりませんが、いままでの様に座骨をつける事が、ただち
に馬のじゃまをしているとするのは安直にすぎるのではないかと
思います。十分訓練された騎手においては言えるかもしれませ
んが、不十分なものが単にしりを上げても拳等にかたさがきて、か
えて悪影響があるのではないかと思えます。それより初期にお
いて体を十分やわらかくする事を学ぶ必要があるのではないでし
ょうか。この事は、昨年千葉先輩の所へ、おうかがいして、馬が
速歩をしたり駆足をしたりする事はなんら苦浦でないのだから、
馬の動きが悪いとか、にぶいというのは騎手がじゃまをしている
からだという事、また十分訓練されていないで、体のやわらかさ
つまり馬上でのやわらかさのない者が腰を上げても同じだとい
う事を強く感じました。そして、岡田監督や小野さんの毎日の騎乗
ぶりを見せていただき、歩度をつめた事の左右への動きのだいた
さという事も最近になってわかる様になりました。話が横道へそ
れてしまいましたが、疾風のすなおさを十分たいせつにしていき
たいと思います。そして騎手も人前に出てもはずかしくない様に
なりたいたいと思っています。えらそうな事ばかり書いて現役の部員

からは笑われるかも知れませんが、まあ日和らなければという注
付です。



離厩報告

リヒト号

江口州志

私がリヒトの責任者と決まったのが昨年の二月頃であったと思う。その時、リヒトは二週間前から、右前肢外傷で馬休の状態であった。それから一〜二週間は騎乗せずに、馬体管理だけ行なっていた。ただ日を追う毎に、以前の均整のとれた体を醜く変貌していくのが非常に気がかりであった。これを少なくとも元通りにする事が、その後ずっと私の課題であった。が、それでも、その課題を最後まで完全に果たす事ができなかった。この時からである。馬体管理の難かしさとその重要性を知ったのは。

このようにして一步一步を歩み出した。では、それまでのリヒトはどうであったかと言うと、昭和四七年の十一月頃に十二万で入厩してから、もう一年を北大馬術部で過ごしていたのである。その間は、私の一期先輩である南部さんによって丁寧な調教が進められていた。あまり対外試合にも出場しなかったようである。まあ、言ってみれば、大事に扱われていたのである。こんな馬を

果して、私が乗りこなせるかという不安はあったが、その反面、こんな馬に乗れる事が嬉しかった。

話は少し進むが、私はシーズン中、対外試合にはほとんど出場した。六月の人馬転のため、道自馬大会だけはその例外だが。そして試合に臨むために、リヒトの調教具合とか馬の状態とかを考慮したつもりであるが、結果的には無理な事をやってしまった。ただ、シーズン最初に次のように考えていた。リヒトはすでに既調教馬であったが、用心のために要求を低くして後輩に後を任すか、それとも、もう年令的な事も考えて、私の時にある程度を目安をつけてしまおうという、その二者である。結局、後者の立場でやったことになる。

今考えるに、こうやった事は決して悪い事ではなかったと思うのだが。しかしながら、私がすべてに対して技量、経験共に未熟であった事は否めない。シーズン中、あれこれ迷いはしたが、良いと思った事をがむしゃらにやって来た。ただ、気が付かない所が多かったり、回りくどい事、間違がった事をやっていたのである。時に、これから先に、どうやって調教していけば良いのかと私自身が不安定な状態にあったこともある。早い話がなかなか効果が上がらなかつた訳である。とにかく、合理的な事をやらねばならないと思う。仮りに、その努力はすべきであろう。その意味では、経験豊富な人の助言、注意は、大きな手助けとなるような気がある。

私が、こんな事を言うのは根拠のないことではない。学生馬術は四年間である。その間に、新しい事を知ったり、馬術を深めていくのはすばらしい事であろう。特に、馬を調教するという時に

は、そのすばらしさは倍増するであろう。しかし、それだけでは物足りなさを感じると思う。効果が表われ、その結果が良い方向へ向かってこそやりがいのある物と言えるのではないだろうか。そのための努力をしなければ、時を逸してはいけない。北大馬術部では四年間だけなのだ。その間、最大の効果を上げなければ。ただ、そうかと言って焦せるな。焦せるという事は、その効果を減ずるものだと思う。私達の後ろには、まだ道がある。その道を続いで歩いて来てくれる者を信じよう。そのための道は、できるだけ大きく開いてやらなければいけないと思う。

大袈裟な事を言ってしまった。でも、私の意図はわかってくれた事だろうと思う。そう信じればこそ、こういう事も書けたのだ。

話は少し逸れてしまった。結局、こんな方にして、八月の道大を最後に私とリヒトのシーズンは終わった。その後、九月から十一月までのリヒトの状態は知らない。なんでも、九月頃から跛行がひどくなって、それからなかなか治らず、離厩の日までずっと休んでいたらしかった。でも、急にリヒトの跛行がひどくなったのではなく、その前から徴候はあったような気がする。思い当たる所があるのである。ただ、九月から十一月までの間、私はリヒトの世話はできなかつた。心残りではあるが、部員諸兄がいるやってくれた事だろうと思っています。感謝しています。

私は今でも時々、リヒトの姿を思い浮べる時がある。ただ、笑いながら、大きな口を開けて、私に喰いつこうとする姿ではあるが……。



ノーズンクロス号

白い馬

景山博文

日本画家の東山魁夷に『白い馬のいる風景』と題する画集があります。その中のいくつかは今年の某生命保険会社のカレンダーにも採られていますので御存知の方も多いただろうと思います。今この原稿を書いている僕の部屋にもそのカレンダーがかかっています。原稿を書くにあたって六枚一枚一枚をめぐって眺めてみました。いずれも自然を背景に白い馬が描かれています。なだらかな丘陵の田園風景の中を白い馬が歩んでいるのどかな印象をうける絵もありますが、僕には人里離れた山深い森林やあるいは紺碧の波が押し寄せる波打ち際を白い馬が走るのを描いた絵が特に印象深いように思われました。

この白い馬はその優美なほっそりとした体型からおそらくはサラブレッドのように思われます。しかしそれも静かな、しかし執拗な迫力でせまってくる自然の中で淡い小さな白い影としてしか描かれていないので、この白い馬が果してそうであるかどうかは定かではありません。いずれにしても血種の進んだ気品ある種であることはまちがいのないところです。

圧倒的な重みをもったゆるぎない自然の中でこの白い馬の存在の必然性は一見希薄なように思われます。少なくとも奥深い自然の内に、このようにも優雅で高貴な印象をいだかせる馬というのは反現実的ですし、白という色そのものも反自然といった感じをいだかせるからです。しかし僕は画面に淡い色彩で何げなくおかれた、しかし、したたかな存在感をもって見るものに迫まってくるこの白い馬に強くひきこまれました。

たとえいなないたとしてもたちまちのうちに深い緑の静寂の中にその声は吸い込まれるであろう奥深い森の中を、あるいは黄金色に豊かに波うつ秋の野をこの白い馬は何を見詰め、どこへ向かっていこうとしているのでしょうか。その足どりは確実に自らの目的地を確信しているようです。他の生きものの存在が感じられない静寂の中をこの馬はひたむきに、しかし軽やかに走っているようです。いったいこの白い馬の頭の中にはどのような風景が広がっているのでしょうか。

僕にはそれは透明などこまでも限りなく澄みきった平常心のようには思われます。そしてこの馬のめざすところは永遠の安心立命といった境地であるようです。一見背後の自然にとけあわず、白い馬がうきあがってみえますが、それも実はこのことによつて白い馬と背景の自然とが見事に統一されているのです。白い馬の背後に広がる哀しいまでに静寂な自然はこの白い馬の頭に広がる心象風景であるのかも知れません。

白い馬といえはカマルグの野生の馬のようになくましいものもいますが、僕は白い馬には飼いならされ、自由を失なった生きものの哀しさといったものを強く感じてしまいます。どこまでも自

由であり孤独であり飼いならされぬ動物のもつたくましさを感じられないのです。

わずか半年しか部に居なかつた我が部の白い馬にもそのことを思いました。名前はノーザンクロス、十一才、若くはありませんでした。春に春田先輩の御尽力で入れていただいた馬です。丈夫に五、六年の間部の練習に使えればという気持ちでいましたが膝がクラブの練習には耐えられなかつたようです。秋にはもう別れのときがきてしまいました。おとなしい世話のかからない馬でいつも自分の世界を頭の中に夢想しているようでした。自らの運命を悟ってそれを甘受していたのでしょうか。雪が降り始めやがて厳しい冬が来ようとする頃彼は石狩の乗馬クラブへと去りました。彼にしても意志あるものであつたかも知れません。しかし哀しいかなそれを表現することはないのです。僕にはそのことがとても哀しく感じられます。彼はどんな世界をその頭の中に描いていたのでしょうか。僕らと共に過した半年余りの思い出が彼の心象風景に明るい色どりをそえればと思つてはいるのですが……。



離 厩 馬 の 過 去

ノーザンクロス号

騾 サラ 芦毛

昭和39年2月15日生

栃木県産

父 サラ ロイヤルチャレンジャー

母 サラ ラベンダー

昭和49年4月

入厩 中山競馬場より

8月5日

北日本学生馬術大会

B障碍飛越競技

棄権

8月24日

第21回北海道馬術大会

一般複合、ステーブルのみオープン参加

失権

10月13日

第2回道内親善馬術大会

関門飛越競技

失権

小障碍飛越競技

5位

11月

離厩

リ ヒ ト 号

牡 サラ 栗毛(全身刺毛)

昭和36年6月13日生

勇払郡早来町産

父 サラ カルガドール

母 サラ トキチドリ

昭和48年	4月	入厩 服部乗馬クラブ伊藤氏より	
	8月3~7日	北日本学生馬術大会	
		B障碍飛越競技	11位
	9月1・2日	北海道馬術大会	
		六段飛越競技	失権
昭和49年	5月 3日	半沢杯馬術大会	
		中障碍飛越競技	失権
	6月 2日	対酪農学園大学定期戦	
		複合競技	失権
	6月22日	第9回道自馬馬術大会	
		複合競技	棄権
	8月1~5日	北日本学生馬術大会	
		中障碍飛越競技	失権
	8月24・25日	北海道馬術大会	
		複合競技	17位
昭和50年	1月	離厩	

入厩報告

北燕号（キョウエイファスト）

牡 サラ 鹿毛

昭和46年3月14日生

勇払郡鷓川町産

父 サラ マタドア

母 サラ リュウウエー

体重 511 Kg

新馬北燕について一言

本 村 洋 文

北燕の紹介をする前にどうしても書かねばならぬ事があります。北虎……聞きなれない名前だと思います。多分後にも先にもこの名前は出て来ないでしょう。

現在馬術部が上級生を頂点として現役部員だけで運営しており、

新馬調教をOBに任せする事は考えられません。しかし、また一方では上級生それぞれに馬があたっており、新馬調教が難しい状況にあると言えます。でも将来の馬術部を考えると、馬の入れかえは毎年少しずつ行わなければならず、前々から四肢の丈夫な若駒一頭だけなら入厩させたいと考えておりました。ちょうど昨年秋の東京遠征の折、中山競馬場の春田先輩よりサラブレッド、四才、牡、コミネケンリュウという馬を紹介されました。三才時腰骨を折る事故を経験しているが、それはもう完治し乗馬としては問題ないとの事であった。そしてスターライト、北隼らの遠征馬と共に札幌の地を踏んだわけです。直ぐ北虎と命名され、十二月初めより私を中心となって騎乗を開始しました。しかしながらわずか三週間あまりで、右後脛がガクッと沈むような異状としか言いようがない跛行を表わし始め、しばらく様子を見たが直る徴候は全く見られなかった。岡田監督、小野さん、それに獣医の小池先生の話しでは、原因が他に考えられない以上、三才時の事故が原因としか思われないう事であった。将来性、クラブの経済状態、それに北虎と相前後して入厩してしまった北燕などを考え合わせ難厩を決定。奇麗な栗毛、あまり大きくないが均整のとれた馬体、それにまだ何にも知らない素直な性格。考えれば考える程惜しい馬であった。岡田監督や小野さんは、「調教が進んでからこんを致命的な故障が出なくてよかった」と慰めてくださるが、私自身春田さんに合わせる顔がないし、もつと他に乗りようがあったのでは……と思う。それにちょうど北虎が可愛くなり始めていた時だけに落胆は大きかった。彼が難厩した日、私は帯広で畜大合宿に参加していた。無責任と言われるかもしれないが、厳し

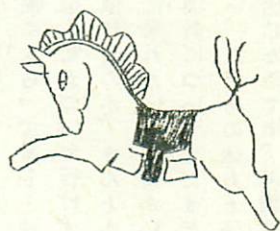
い畜大合宿の中ですべてを忘れてシゴかれていたかった。最後に北虎を可愛がってくれた佐野君の言葉をもって北虎の報告を終りた。

君は四年間の馬生活で何を学んだらうか。少なくとも俺の四年間の人間生活よりは波乱に富んだものだったらう。

ではまた、あの世でお会いするときまで……

さて北燕ですが、私は畜大から帰ってから乗り始めたわけですが半月ぐらいいしか経っておらず雲をつかむような話しかありませんが、まずは入厩のいきさつから。前に話した通り四肢の丈夫な若駒一頭を入厩させたいという意向を我々は持っていたわけですが、全日学速征組が東京で北虎を見つけたのと相前後して、それを知らない在札組が獣医から情報を仕入れ、監督や小野さんを無理矢理引っぱって牧場に行き、非常に安く買って来たのが北燕というわけです。話によると、出走する為の能力試験とかいうものを何度受けても合格せず、馬主があきらめ日高の牧場へ返し、そこで半年程遊んでいた馬だそうです。綺麗な栗毛と均整のとれた体で気品を感じさせた北虎に比べると、何となく薄汚れた毛色、腹のポテリと出た馬体、マンガチックな顔、これが名血マタドアを父に持つ純粹のサラブレッドとはとても信じられない位です。性質は至って温和……と言ってもこれはあくまで良く言った話であって裏を返せば鈍感、鈍重……etc。しかし騎乗し脚を使えばその分だけ必死になって歩く（あくまで「歩く」であり「走る」ではない）その素直な態度、ハミを噛ませようとすればまだ全然知らない事ながら、噛もうと努力するそのいじらしい態度を

見ると、全身これ根性の固りのような北隼とは違った意味で北燕が可愛く思えて来た。まだ明け五才の若駒、四肢は丈夫なようだがまだ体力は全くなく無理は絶対にしてはならない。確かに彼の背に股がると、あれも教えたい、これも教えたいと思う。もちろん調教云々も大事だ。しかし無理をして若い体をおかしくさせたり、彼のあの素直さをなくさせてしまっただけではそれは調教ではない。今一番思う事……とにかく、あせらずゆっくり。こんな事書くと皆にブツ飛ばされるかもしれないが、今年には彼と遊ぶつもりで乗っていきたいと思っっている。



ハイエイム号

牡 ハンター 栗毛
昭和41年生
オーストラリア産
父 不詳
母 不詳
体重 535 Kg 体高 163 cm
管囲 21 cm

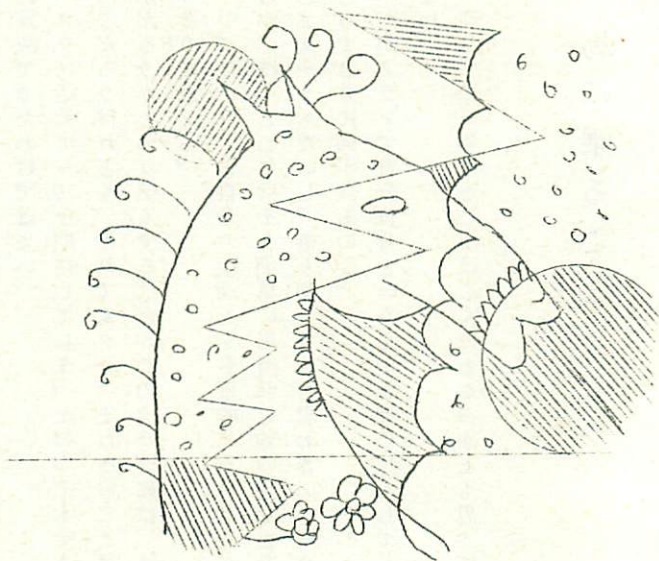
ハイエイム号入厩に際して

水野豊香

昨年の末に、大阪は服部乗馬センターを単身で訪れました。札幌では出発の前日までミーティングを重ねその結果、とにかく実際に乗ってみて結論を出そうということになりました。頭の中に常にリヒトのイメージを浮べていたようで、大阪では百聞は一見に……てな感じてした。札幌に引きとるクラブとしての条件としては馬体が毎日の練習に耐えること。みんなの手で誰でも安心してあつかえること。競技への可能性があること。このようなことを考えながらはじめて彼女に会ったわけです。

さて騎乗した感じですが、強烈な暴走とも思われる前進氣勢の迫力、それから馬体が左も右もコンニャクみたいにくるくる回わってしまふのです。正直な話、これでは札幌にもらっても……ゆっくり考えるとそのスピードとバランスに全く私がついて行けず乗り切れなかつたのです。二日目になると慣れたのか、なんとか格好だけはついたように思います。まともに乗れない者がかいかいとを言っただけに思いますが、その調教についてまだまだその途中にあって脚もハミも理解していかない、ただその体力と氣勢に物を言わせて障碍を飛んでいるという感じなのです。再調教とするとというより、今のところから進めるといふか私達で手の入れられる部分がかたまりあるようでした。つまり毎日規則的な練習をくりかえすこと物件馴致を徹底的に行なうことなど技術のむずかしいことは別にしてもこれだけで全く変わるのではないかと思わせる感じがしました。それに馬体は心配するところは皆無だし、とりあつかいも少々後肢がうるさいというだけで問題ないということでお世話になってお礼の言いようもないのですが、その他センターの方々にも迷惑をかけほんとうにありがとうございます。現在ですが、私が大阪で経験したような暴走の候は全くありません。この調子で行けばよいのですが、とにかくゆっくりあせらず、興奮して走られて腕力でけんかしておさえようなどというこののないよう調教を進めればよいのではないかと思っています。興奮で障碍を飛んでいるような状態では決して競技という言葉は出してはいけなものでしょう。雪が積って走りにくい冬場になんとか手の中に入れてしまえればしめたものです。とにかく

期待のもてる馬だと信じてよいでしょう。



部生活報告 (一年目の雑言)

馬術部に入部してみても

長 屋 清 隆

ぼくは教養二年目になってから馬術部に入部したのだけれども馬術部に興味を持っていたぼくを友人が、卒部された阪上泉兄に紹介してくれ、阪上兄に連れられて当日行われた部員総会をのぞきに行ったのがきっかけであった。部員総会が終わってみたらいつのまにか部員にされていたのであるが、入部が少々遅れたのと二年目の自分が一年目と一緒に練習することにとまどいを覚えたため、とにかく少しでも早く部生活になじもうと思った。

当番でもないのに当番を手伝ってみたり、投草の時間にちょうど間に合うように泊りに来たり、暇な時には一人で乾草を切ってみたりした。時を忘れてというところが大げさだが、うち込めるものを見出した思いでうれしくて仕方がなかったせいもある。

夏になってそれまで住んでいた所から一如に馬場から百メートルとは離れていない所へ引越してからはさらにエスカレートして、毎日部室にいるようになった。北日本や道大会が終わり、それまでの不勉強のおかげでドッペリのオマケがついてからは、進んで団体の貨車積要員となった。

が、全日学もおわり、そろそろドッペリ後のヒマをもてあます

ようになると、それまでの忘我状態の反動か、虚脱感のようなのを感じるようになった。

本を読みさつてもどうしようもなく、自動車学校へ行くなどして極力自分一人きりにならないですむようにしているが、未だに解決できたわけではない。

クラブ活動に一切を期待してしまっただけがそもその誤りだったのだからけれども、それでもクラブとは所詮ここまでのものなんだらうかという気もする。だがこのクラブには、まだ何かがありそうに思える。

中にはクラブと自分の生活とを合理的に割り切っている者もいるが、ぼくとしてはそう簡単に馬術部と他の生活とを割り切ってしまうそうもないし、割り切ろうとも思わない。そうしてみただころで自分が何が残るのか。

だがクラブで自分自身というものを埋め尽くしてしまいたくない。クラブの一年目としてはこんなところかとも思ってみる。

馬に、乗ること

笠 間 淳 子

部班の途中で号令がかかる。「停止。飛びおーり。」私の大きな号令である。なぜなら、次は決まって「飛びのーり」だからである。男子部員諸兄にはわからないかもしれないが、私にと

ってこの号令には単なるあきらめのみならぬ真剣さが含まれているのである。

まず、「飛びおり」から「飛びのり」の号令がかかるまでにて髪と鏡革を持って精神統一。号令がかかったら前橋のあたりをにらんで「エイッ」とばかりに飛びあがる。そこでどこまであがるかが問題なのであって、首まであがってしまったら、あとは鏡革をしっかきもってグッと力を入れ、反動であがったり、しまいに馬の肩に足をかけて少々けとばしてもいいから（本当はよくないが）とにかく乗る。すると「乗れた！」と思う間もなく再び「飛びおり」の号令。せっかく乗ったのだけれど、しかたがないので降りる。また乗る。このくり返しが例の飛び乗り飛び降りであり、私がついていけるのはせいぜい二、三回。なんとかついていけたとしても反対側におりたら、もう絶対に乗れないのである。

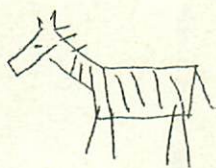
しかし、これももうまぐいっつ場合で、大きい馬などの場合、見づめる前橋ははるか上の方にある。一回目、飛びあがっても悲しいかな、頭の上の方がちょっと馬の上に出るくらいで、そこから持ちあげるだけの腕の力はない。こういう場合は二回目も乗れないのがふつうで、そのあとはますます疲れて乗れなくなる。飛びあがってはすべり落ちる。そんなとき、どうしてこんなことをしなくてはいけないのかとばかりしくなってくる。

飛び乗りを教えてもらったのは最初に馬に乗った時だから、一年近く飛び乗りを練習してきたことになる。台もつかわずに、ただ飛びあがって乗るなんてできるのだろうかと思議だった。そして初めて自分の力で乗れたのが一か月ぐらいしてからで、乗れたと思つた瞬間のうれしさは今でも覚えている。そのあとは低い

馬から少しづつ乗れるようになったけれども、気分によつても乗れるとは限らない。乗れなくて怒られる度に、先輩からこつを教えてもらったり、自主トレーニングをしたり、雪をふみかためて乗るなどの要領も覚えた。そのおかげか、少しづつ乗れるようになるに思ふ。

私の場合、たとえ乗れたとしてもそれはよじ乗りであって時間もかかるし、人馬ともに疲れるし、飛び乗りの利点を生かしてはいたいが、馬に乗るためにはとにかく馬の上に乗らなくては話しにたらない。飛び乗りもできないのか」と言われるとやはりやしい。飛び乗りというのはそれ自身が目的ではたいが、馬に乗ることの第一歩であり、馬に乗るための条件なのである。だから、近い将来、その条件を満足できるように、これからも毎日シゴシゴと「飛びのり、飛びおり」を続けていくことだろう。

聞く話によると、畜大では全員「飛び乗り、飛び降り」を左右五回づつやるとか、私もがんばらなくては……



盛岡の思い出 (北日本学生馬術大会)

AとBの会話から

大東 美奈子

水井 とく子

A「読者の皆さん、期待されても困まるので……まァテレビでも見ながら(テレビがなければラジオがあるさ)読んでください。」

B「ねえ、『ルーシーショー』が見れるように早く書いて帰ろうよ。」

A「うん……あの時は、毎日顔をつきあわせていたから、Bの顔なんか見あきちゃった。(今でもそうだけど。)」

B「そうそう、寝るときも、頭と足をさかさにしてたぐらいいだもの。」

A「なんといっても食事作りがたいへんだった。Bはなかなか手つきが良かったよ。S氏もほめていたもの。本当は行く前心配してたんだけど。」

B「Aもなかなか味つけの手際がよくて、お味噌汁なんか色で決めていたものね。」

A「あんまりほめすぎても醜くなるからやめようよ。」(Bうなづく)

B「失敗談に移ろうか。」

A「なにか失敗したことなんかあったけ？」

B「くさったもやしの件はどう。」

A「あれはやめておこう。」

B「カレーがみずっほくなったのは？」

A「あんなに人数が多いといくら料理の腕が冴えていても、感の方がにぶるもの。」

B「一度たんか、誰かの食事が消えちゃって作り直したことがあったけね。」

A「あの時は、作り直したおかずの方がおいしくできて、大した失敗にはならなかったヨ。」(失敗は成功のもと)

B「うん。こう考えてみると、意外に失敗は思い出せないから次、苦勞話に移ろう。」

A「一番きつかったのは、蛇口から出る水が使えなくて大変だった。」

B「目の前にあれば、毒が入っていたとしても使いたくなっちゃりものね。」

A「それにプロパンガスが二回も途中でたくなつて一時はどうなることかと思つたワ。」

B「ほら、一度みんなが寝静まつてから、じゃがいもをゆでたことがあつたじゃない。」

A「あの時は、静かに音をたてないでやろうと思うと、よけいオカシタて、みんなの睡眠を妨害したみたい。あれで大部評判落したみたい。」

B「じゃがいもは煮えないし、特に下の目線が気になって……(ねえ〇〇君)。」

A「バスでも大部苦勞したわね。」

B「そう、一つ先の停留所で降ろされて、重いダンボール箱をかかえてひとやま越したこともあったけ。」（ちよっとオーバかな）

A「御飯炊くのにみんなより早く起きなければならなくて、あの時ばかりはお母さんの苦勞がよくわかったワ。」

B（まじめに）「本当ネ。」

A「今度は良かったことにしよう。」

B「あそこは景色がとってもよかったわね。」

A「土地の人も親切だったしネ。」

B「それに、あそこではいろいろた大学の様々な人や馬に会うことができて大変有意義だったと思う。」

A「このへんで終りにしようか。」

B「うん。……でもあそこであつたコンパはひどかったね。」

オワリ



短い雑感

半浦 剛

入部して一年が経とうとしている今でさえまだ当番、手入れを義務感からだけしかやっていないような気がする。本来、馬が好きで、馬に乗りたいが由に入部したからには、常に愛馬精神を持つて部生活を送らねばならぬだろう。でも人はそこまで純粹になれるものであろうか。立前と本音は違うものである。己をかわいがるのが人である。しかしそれで済ましては救われぬ。それに気づき、反省し、努力する必要がある。

一年目である僕達はよい馬とコンタクトを持たなければ、馬を知る事から馬術を始めるべきであろう。その為に練習に、手入れに、当番に頑張ろうではないか。

馬と人と

本 城 敬 文

馬という動物に接してまだ一年にも満たない私には、いまだ馬を分析的、総合的に把握することなどできません。私は、現時点で考へ得る馬について自分たちの意見を述べてみようと思います。

私達は、馬を飼育しています。乗馬のために、自分たちが騎乗し試合に勝つために馬を飼っています。だから、馬に対する愛情が必要です。貸与馬なら初めての馬に乗って即試合ですから、馬を手中に入れることしか頭に回らないと思いますが、その時でもやはりその馬に対する愛情は必要ではないでしょうか。ましてや自馬で人馬一体を目指す私達には、人馬相方の信頼の一要素となる愛情は不可欠なものだと思います。騎乗時、曳馬時、手入れ時等、あらゆる時に馬とコミュニケーションを持ち、互いに信頼の度を深めていかなくてはならないと思います。むしろ愛情とは甘やかすことではありません。馬が言うことを聞かなかったら叱りとばし、うまく出来たら誉めてやる必要があります。

馬と人とのコミュニケーションが完全なら、おのずと人馬一体となり、馬は全力を上げて障碍に向かい、騎手の命ずるがままに馬場を踏むでしょう。ただしこの場合、私の言うコミュニケーションとは精神的なもののプラス肉体的なもの、すなわち、信頼、服従から脚、銜、たづな、重心をも含む総合的なものです。もっと

も現実問題としては、後者の肉体的コミュニケーションがあつてこそ精神的コミュニケーションも充実されるのですから、騎手は何よりもまず上手であることが要求されます。現に、日頃私がいくら馴れ親しんでいる馬でも、私が乗るのとは全然動き方が違うのです。すなわち、いくら精神的コミュニケーションを保つていても、ちくはぐで不自然な脚や銜などの扶助では、肉体的コミュニケーションも崩れてくるのだと思います。

さて、肉体的コミュニケーションを深かめ馬を馴致すればいいのです。騎手と一体となつた馬が馴致が十分であつたら、もう馬の実力しだいです。馬に力があるなら大障碍でも楽に帰つて来れるでしょう。

私にはこの考えは、今は机上の空論でしかありません。この理論を実践するためにも、これが正しいか誤つているかを確かめるためにも、もっと上手にならなくては。



部員生活

森 巖

六時半に夕飯。十時四十七分発の景勝バスに乗り、部室へ。十時頃、就寝。雪が降ってから、練習に出る時はこういう生活をくり返している。約三カ月過ぎて、やっと慣れてきた近頃である。事情があつて今はこういう生活をしている。ところで部室で寝る時にいろいろとおもしろいことがある。その一つで、電燈を消して床についてから、ボンボンと話し出す。意外な人が意外な一面をしゃべり出す。何かしんみりとして語る。過去を告白する。女性論を述べる。誰かの悪口を言う。(若干、先輩のことへの不満が多い。ただし一年目だけの時)。また、ふと故郷のことをなつかしがる。あと少しで、一年生が入ってくるなあ。今度はかわい子入って来てほしいなあ。もちろん馬術論については言うまでもない。こりやって全国から集ってきて、今同じ屋根の下で寝ている。不思議である。あと何年かたつて、こういう生活が、どう影響してくるのだろうか、どんな思いで、振り返ることができるのであるうか。いろんなことが脳裏を駆けめぐる。しだいに一人寝、二人寝て、話が途絶える。明日も寒いかた。いやだな。テンコウやユウスケは、もう寝たかな。明日もまた、拳だ拳だ脚じゃ脚かかと下げバカヤローだろうか。ちくしよめ、明日は見てる。

部生活

竹林圭介

この部報作成時という永い冬に閉ざされた時に部生活なる文章を書こうとしてもそれはひどく歪曲したものになってしまふのであろう。あの夏の陽をあび涼しげな微風にきらめくポプラの葉影でさっそうと駿馬にまたがる自分の姿を想像しようとして試みても今は冬。頭の中を吹き抜ける木枯らしがそれを何処かへ運び去ってしまう。そんな時……「人間は自然を変えるところにその人間たる所以がある」などと言つたのはどこ馬鹿であつたらうか。人間は環境の動物なのだ。……人の心も荒んで来る。それが木枯らしと混ざりあい満まき部室はいっそう荒涼としたものに見えるのだ。てなことを言うと、「ばかやらふ、てめえのたひまんさをたなにあげてえらさうなことをいふではない」といわれるのは目に見えてはいる。とにかく、この冬を生き永らされるには「もう忍耐しかないんですよ」



馬から落ちて落馬した

山川 恵

たいていの馬のりなら、一度や二度は「馬から落ちて落馬した」経験をもっていると思う。私めも一度や二度や三度や四度や……。〈初落ちの時、先輩に「落ちるたびにうまくなるんだから。」と言われた。そうすると私めはかなりうまくなっている頃なのだが。〉まだ一度もこういった目にあわなかった頃は、若干の恐怖と淡い興味があった。経験を積んだ今、その怖いもの見たさの現実をちよっと記してみよう。

落ちるとは、万有引力の法則に従うだけの話で何の不思議もないのだが、しかし着地するまでの形態は様々である。スローモーションのようにゆっくりすべり落ちたり、斜め前方へ飛んでいたり、また「アレッ」と言う間もなくコロリところがったり、実に色々ある。私の場合すべて駈歩からの飛行方である。しかし、ダイナミックに落ちても割とショックは少ないようだ。まず腰にガンときて、次に頭にボワッとくる。一番ひどかった時は、骨格の方はどこも痛みを感じないのに、その日一日頭の奥がボワンボワンとしてなんとなくおかしな気分だった。しかしその程度ですんでいる。脂肪が厚いのか、はたまた石頭の故なのか。一番最初に落ちた時、落下しながら（？）回転レシーブという考えが頭をよぎり、以来着地後はコロコロところがる。手綱も放さないよ

うになった。この要領を身につけたのは慣れたせいなのだろうか。しかるに結局のところ、こんなものに慣れるなど最悪であり、まことにけしからんことなのである。私にしたって別にニュートンにさからうわけではないが、地面を間近で見ると、地上数メートルのところでは揺られていた方がいい。でもまあ一度くらいなら「馬から落ちて落馬した」経験もおつなものである。



同好会より

部員諸君よ、同好会に来たれ

市川瑞彦

この一年間も馬術部の皆さんには大変なお世話と御協力をいただきまして、北大乗馬同好会も活動を続けることができました。この欄をお借りしてお礼申し上げます。

さて、同好会の主任幹事をおおせつかっている者の立場から、日頃切実に感じていることを少し書き記してみたいと思います。何といってもそれは人手不足の問題です。別に会員数が少なくてなげているわけではありません。指導スタッフの不足です。それも卒業後まだ間もなく、土曜の午後とか日曜には腰が落ち着かなくてそわそわし、つい馬場に来てしまうような人が二、三人いたらなあとつくづく思います。勿論、我が同好会には講師格の人が（しかも全道的なスケールでもみても講師格の人が）たくさんおられますが、それぞれお仕事の都合もあり、特に土曜の午後はなかなか体があくことは困難です。また会員で初心者の方が練習をつみ重ねて上達して指導者となることも望ましいのですが、それとて、一年や二年でというわけにもなかなかいきません。そんなわけです。全員の方には（とくに熱心な初心者の方には）日頃心ならず

も大変迷惑をかけてしまっており、会員の方の要望に応じきれないのが現状だと思えます。またせっかく土曜の騎乗の実現に努力していただいた部員諸君に対しても応えていないのは心苦しいかぎりです。

そこで、つい目は現役諸君の方をむいてしまっているのですが、此頃は大学に残る人が以前より少なくなってきたような気がするのですが、違うでしょうか？ 想いかえしてみれば私の現役のときには、現河田部長をはじめOBや職員の方の「馬キチ連」の顔を土曜、日曜に顔を見るのはこと欠かかったように思いますが……。現役は同好会には試合では歯がたたくたくなくて、同好会に勝つのが一つの目標だったように思います。それだけに勝ったときにはさういふくらいうれしかったように記憶しています。まあそこまでは望まないにしても何とか若くて、元気な会員を獲得して、初心者会員に要望に答えていきたいものと考えております。現役諸君、大学に残りませんか？ 残ったらまったく馬から足を洗うなどと全部が全部いわないで会員になって協力してくれませんか？ というのは偽わらざる現在の気持です。

最後に会長の河田先生はじめ、連盟関係の仕事では半沢先生ならびに小野さん、片寄さん、日頃の練習には片寄さん、事務局の仕事では遠藤さんが同好会の顔として日頃お骨折りいただいていることを御紹介したいと思います。また現役の皆さんにはこの一年間もさまざまな場面でお世話になることと思えますが、どうぞよろしくお願いたします。（市川記）

高松先生の思い出

半沢道郎

昭和四十九年三月二十五日に高松正信先生が東京でお亡くなりになられた。馬術部出身者の中には畜産学科で先生から直接指導を受けた永松先輩や武田、植村その他の諸君が居られるので、私よりもその方々にお願ひして書くより部員の幹事に伝えて書きましたが、河田先生が私にも頼むようにとのことで拙文を載せて頂くことになりました。先生が北大にご在職になられたのは昭和二十五年までであったと思いますが、部長をされたのは昭和七年一月から昭和九年五月までの二年四ヶ月間で、部長を辞されてからは余り部の会合にはご出でにえられなかったので、先生を存じ上げない方が多いと思います。

私は幼い頃から高松先生のお名前を私の両親から聞いて居りましたが親しくお目にかかったりお話をうかがったのは北大に入学し馬に乗るようになってからでした。先生は学生時代から私の家によく来られたそうで、家の古いアルバムにはお若い頃のお写真が貼ってありました。また何かをお届けするように母から命じられて先生のお宅に参上した記憶があります。そんなことでお目にかかる以前から何となく親しみを感じて居りましたが初めてお目にかかった時の印象は一寸こわい感じで、お話が出来ないような

気持ちになりました。部の四十年の写真集の一八、二一、二四、二五頁に先生のお姿が写って居ますが、瘦身で眼光するどく苦味走ったお顔で、服装もピツタリとした英国紳士風で、何処からも隙の無い近より難い感じを受けました。

先生は札幌農学校に入学され、明治四十年七月に卒業されたのでありますが、丁度その年の六月に札幌農学校が東北帝国大学農科大学と改められ、九月一日から開設され、六月に既に畜産学科が置かれることが決まり三年後の明治四十三年九月から授業が開始されることになったので、先生はご卒業になられると直ぐに新しく開かれる畜産学科の教授の候補者として勉学に励まれ、学科の創設に努力されたことと思われれます。先生のご専門は馬学で、当時馬は農業、林業の動力や交通機関として最も重要なものであった他に、軍馬として軍の機働の主体であった為に、その改良、補充に力が注がれ、競走馬を入れて改良に使った競馬の始まりの頃で、畜産界では馬は牛以上に重要な地位にあった時で、先生の学界、業界に儘されたご功績は非常に大きかったことと思われれます。

昭和五年三月北大乗馬会を発展解消し父武会馬術部が創設され

た時に、初代の部長にご専門の関係から高松先生になって頂くという案がありました。昭和二年頃から私共の運動とは別に當時医学部の教授でいらした永井一夫先生が北大に馬術部の設立を要望して居られたこともあって、永井先生に初代の部長になって頂き、高松先生を顧問に推戴したのであったが、永井先生のご意向で昭和七年一月に高松先生に引き継がれたのであります。先生が顧問でいらした昭和六年の五月の文武会デーに馬術部主催で馬事講演映画の会を学生集会所で開催した時に、先生は「統計上より見た世界産馬界の傾向およびその将来について」と題して講演をして下さり、馬学教室所蔵の馬の調教や馬術の映画を映写し、非常に盛会でありました。部長になられてからは揺籠期の馬術部を熱心に育てられ、部員を指導され、軍隊との交渉などにも非常なお骨折りを頂きました。

先生は非常に厳格、几帳面な性格で、特に時間を守ることを厳しく教えられました。例会その他の会合の開始時間が遅れることを嫌われ、ある時部で自馬を持つ事を相談し先生にお願をするために例会を開いたのですが、全員の揃うのに時間がかかり、先生をお待たせした為に非常に立腹になり、遂に相談もお願いも出来ずに終わってしまったこともありました。あの時キチンと始めていたならば馬術部がもっと早く自馬を持つことができたかも知れなかったと皆でくやしがつたものでした。五代の部長をされた松本久喜先輩が昭和六年に畜産学科を卒業して、高松先生の教室の助手はなられたので、松本先輩を通していろいろお願をし、私も松本さんのところに始終出入りをしていましたので、先生とおいする機会も多くなり、撞球場にお伴をしたことなども懐かしい

思い出です。

先生は若い頃（英国留学の頃でしたか）競馬の騎手になろうかと考えたと話して居られ、本当に馬がお好きであったと思いが乗馬のお姿は一度位拝見したようにも思いますが、余りハッキリ思い出せません。騎手に向く様なお体格で、運動もお好きであった様で、東京に行かれて玉川大学の教授となられてからも、徒歩で遠い道を歩くことを最近まで続けられ、健脚と健康を誇って居られ、随分遠い距離を短かい時間で歩いて居られた様です。

東京に移られてからは一度もお訪ねもしないで失礼を重ねて居りましたが、部の近況でもお知らせし度いと思いつら実現しないで終りました。松本先輩を早く失い、黒沢先生に引続いて高松先生がお亡くなりになり、四十年の記念の写真集も見て頂けなくて誠に残念です。写真集の二一頁の昭和五年の送別会の写真は先生が炭火に酔われ苦しんで休んで居られたのを、無理やりお起しし、故人となった岩橋君が抱きかかえて敢えて撮したもので、こんな格好を撮すのは失礼だとお叱りを受けた曰く付きの写真で、先生がご覧になったらまたお叱りを蒙ると思いつら、先生の他の多数の方々の学んでいる貴重なものなので載せることにした次第で、先生には誠に相済みないことでご温前にお詫びを申し上げる次第です。拙文で意を尽せませんが御冥福をお祈り申し上げ筆を閉じます。

（昭和五十年二月五日記）

高松正信先生を悼る

永松四郎

昭和七年畜産一部卒

高松先生がお亡くなりになって早や一周忌もまもなく（四九・三・二五）迎える頃となりました。

私が先生と始めてお会いしたのは昭和四年畜産一部に入学し、三年間先生の御教導を受け卒業論文は先生の教室につき先生及び故松本学兄には大変に御やかいかいになった次第でした。

先生のスマートな清潔な姿が今尚ほうふつします先生は若い頃は野球及ランニング、とに角萬能選手で居られたらしい、健康そのものの先生でした。私が馬術部に入った頃の中ば頃、馬術部長として馬術部の振興充実に大変に努力され、私達部員はお蔭で恵まれた時代を過しました。先生は豁達で親しみ易い面極めて几帳面で厳しい点がありました。先生は麻布中より札幌農学校へ入学、明治四〇年七月東北帝国大学農科大学に於て卒業され、四年助教授時代畜産学研究のため独英米に留学専ら独乙で馬学を研究され、大正二年帰朝後教授となり畜産原論、馬体を講義され

同八年農学博士、北大教授は二二年定年となる迄専任され、二五年七月名誉教授、二九年一切を辞して上京悠々自適、三〇年玉川学園農学部創設に招かれ、先生の学識が重んじられて農学部長に生まれ、献心的の努力で農学部の充実に努力し四〇年辞任、玉川

学園の第一号名誉教授となられた爾来お亡くなられる迄至極お元気で大抵の所に行かれる時は徒歩で、実に健脚の方でした私が時々先生のお宅を訪れると非常によろこばれ昔話しや四方山の話で時間を忘れてしまう事が何度ありまして私私の様な不肖の弟子に對してよく御指導下さった事を感謝して居る次第です。先生は古武士を彷彿されました。

先生は金銭に恬淡にして誠に質素な生活を続けられ自適の境地を築かれた。四九・二月突然脳血栓で全く言語障害を起し、御令室の四〇日間の手厚い看護も無なく、四九・三・二五、九〇才の天寿をまっとうし遂いに永遠の眠につかれ惜別の情愈々切である。未仁人にお会いしましたが長期間お看護で約一〇キロやせられたと云われましたが、中々御元氣の姿、ホット胸を降した次第です。



高松正信先生のこと

武田朝男

東京〇B会昭・八・平

北大馬術部第二代部長高松正信先生は昭和四九年三月二五日、東京のご自宅で逝去された。先生は一八八四年のお生れだから九〇才のご高齢だった。輝く星がまた一つ消えた。

今にして想うと、その前年の東京エルム会の総会に出席された先生は、ご挨拶の中で、恐らく次のこの会には出席できないかも知れないと思うにつけ、今日は一層感深いものがあるなどと、それも極めて淡々と述べられたがそれが結果的にそうなってしまった。

先生が亡くなられて、私が先生のお宅を訪ねた際奥様から先生が八八才のときたしか学士院から米寿祝いの記念品として贈られた由の杖を見せて頂いた。本藤製の立派なもので紫色の絹の袋に軍刀のように納められ黄色の絹の紐で結んであった。奥様はこんなお話をされた。

「これを頂いたとき、主人が申しますには杖を選ぶとは気のきかない連中だ！こんなもの老人臭くてついて歩けるものか。同じくれるんなら当世流の巾の広い色の鮮明なネクタイにでもすればいいのに。したらボクはよるこんでそれをぶめて態々にでも外出して歩き廻るところなんだがナ。これはとにかく袋に入れたままどこかに片付けておけ！と申すんでございますよ……」

私は端なくも先生の面目躍如たるものをここに見た。そして先生のいろいろなイメージが一緒になって私の頭を斜めに過ぎるのを感じた。

先生はそう頑丈な体には見えなかったが、勿論注意もして居られたには違いないけれども実に健康で、いつお目にかかっても発刺さをたたえたお姿だった。若い頃大学から欧州への留学先で、馬好きで身体軽量の先生は、条件揃いとばかりにアチラで騎手になろうと、登録手続きまでしたことがあると語られ、これが自慢のような印象をわれわれに与えたものだ。自慢と云えば徒歩の強さもその一つだったらしく、よく宮脇（富）先生との三里塚御料牧場での競歩のお話が出たものである。同じ話を両先生それぞれにされるのだが、それが常に語り手の方が相手を負かしたことで話が終るのだった。私が日本万歩クラブに入りたての頃、今から一〇年許り前の話だが、当時日本で製作されたばかりのペドメーター（歩度計）を新しがつてお見せしたら「キミー（先生のこの「キミー」は実に征服的であった）そんなもの今時ナンダイ。ボクが独乙から持って来たのは六〇年も前のこと、今も持っている」と云われ、次回の歩け歩け会るとき態々参加されてそれを見せて

下さった。それは一〇万歩まで同じ文字板で読めるような高級品だった。

先生は何んでも召し上ったが、塩と醤油だけは食べた記憶がないとご自分の弁、このことは奥様も証明して居られるが驚いたことに、まぐろのにぎり寿司も醤油なしで召し上るのである。

先生は科学者であるほかに馬術はもとよりその他各種スポーツに関心深く、そして競技は、やるからには負けるべからず主義のスピリットを蔵して居られた。

また情操の面も広きに亘り、わけても音楽はただに愛好されるに止らず、青年の頃には作曲も手がけられた。明治四〇年は先生が札幌農学校の最後の卒業生として卒業された年であるが、この年の寮歌に「一带ゆるき石狩の、源遠く霞こめ……」というのがある。これの作詞は人ぞ知る後輩の田中義博博士、作曲は誰であろう高松先生なのである。この曲の最初の二節はさる事情ありて軍艦マーチの出だしに酷似している。この事情についてはエピソードがあるのだが長くなるから割愛する。

去る四六年の秋、東京クローバー会で先生をお招きして米寿のお祝をするに当り、幹事はこの寮歌を参会者で斉唱する企てをし、歌詞のプリントを配り、楽譜の読めるヤツに音頭をとらせてこれを実行した。出だしから軍艦マーチでやればよいのだから、みんなどうにか難なくついて行けた。歌詞の一番を唱い終え、続いて二番に入る。そこでまた「軍艦マーチ」となるや、みんなふき出すように大声で笑って了うという失礼な場面を演じて了ったりもした。こと程さように「軍艦マーチ」なのである。

先生は昭和二二年退官、五年程成人保護委員会で委員長をされ

たあと四〇年迄玉川大学の名農学部長として活躍された。私個人は、畜産学科の二年目、何を専攻するかを考えていた頃あとで第五代馬術部長になられた松本久喜氏を通じ高松教室（馬学）へのおすすすめを受けた経緯もあるが、結局馬から牛に乗り移るか如きキマリ悪さを味いつつ、井口教室（牛学）に属したから直弟子とは申されまじく、また高松先生が馬術部長になられる前に卒業した様に思うので、馬術部長として直接仰いだことはない筈だけれども講義が一番まじめに聴いた方だし、廊下では三年間も行き交いし相った間柄なので、先生の薫陶に浴すること極めて大であった。先生が東京に移られてからは頻々とお目にかかれて、続けてご人格に接する機会に恵まれたことは限りなく仕合に存じております。

威大にして温かかりし先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。次第であります。

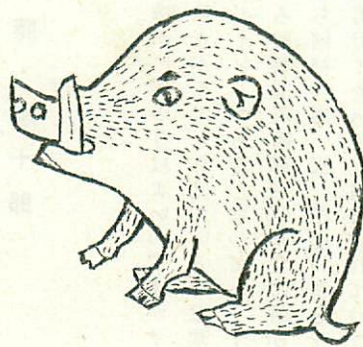
（一九七〇・一・一八）



年寄りの冷水

半 沢 道 郎

一昨年五月、前の札幌競馬場長の西村喬氏の肝入りで札幌乗馬衆会が結成され、年長の故を以て会長にさせられましたがお陰で競馬場の使役乗馬に乗せて頂くようになりました。庄内先生が調教していたアラブ系の牝馬に助手役で乗せて貰ったり、誘導馬の高千穂で駆歩の踏歩変換の練習をしたり、アビエを正しくやることや、舌を越すのを止めさせようといろいろやって見たり、嫌やがる障害に無理に向けたり、全く六十の手習いです。馬術入門書や乗馬教本、洋書の馬術書等で勉強し乍らやって見るのですが益々難かしく停止、前進、後退すら満足にできなくなってしまいました。馬術は科学であり芸術であると云うことが解った様で、技術は一向上達しません。雪の中広い競馬場の真中でタッタ独りで、鳥に馬鹿にされながら、鼻水をすすり、汗をかいてやって居る姿をご想像下さい。十二月中十七回乗ったのは私のレコードです。老人の冷水どころか正に狂人沙汰です。六十五才になっても乗れることは有難いことで、馬をやってよかったと毎日思っています。道乗馬連盟の理事長や札幌乗馬倶楽部の会長の仕事は荷が重すぎて有難くないことです。



部員諸兄への手紙

近藤喜十郎

越冬の中で毎日練習に励んでおられる事と思います。昨年は大変好成绩で大いに馬術部の名を挙げてくれてありがとうございます。私のようなOBでも肩身の広い思いをしました。許年より馬に乗る機会を得、一年で八〇鞍ほど乗りました。いわゆる乗馬ブームで雨後のたけのこのようにあちこちにクラブが出来て、少し乗れる人間は大変な歓迎です。中部地方には大学も多くありますので彼達の練習を見て、又自分が過した学生時代の生活も今では冷静にふり返る事が出来るようになりましたので、諸兄にもう当然このように事は感じておられると思いますが、気付いた点を二、三書いてみました。

(1) 練習について

まず事故ばかり増やすことが技術の向上に結びつくことではないという事です。四年間の鞍数は決まっていますので、その内容がむしろかんじんであると思います。只乗っていれば上達するならば競馬場で馬の世話をしている人はすべて名馬術家になっていくはずで、東京OB会で毎年一回騎乗会を行いますが、その時歴代の名選手の技術の片鱗がよくわかりますし、当時の技術の

程度もわかります。現役諸兄は確かに鞍つきはよいのですがそれ以外の事ですと見劣りします。私ながらにとらえている事は馬術はリズムとバランスを知る事がポイントであると思っています。又私がいづも頭の中に置いている言葉は馬術部三〇年史に書かれた管間先整の「あらゆる扶助即ち精神、拳、脚、騎座、腰とその総てを総合し又独立に使う事は馬術に於いて絶対に忘れてはならぬ事と思います。」という言葉です。

次に馬は生き物である事を当然ながらよく知る事です。その為には馬の言馬をよく聞いてやる事が必要です。馬の心理、生感をいろいろの本から学ぶ事は技術の向上に大いに役立つと思います。

(2) OBから積極的に学ぶ

学生馬術は四年間という限られた期間での技術、精神の競い合いですから一回しか経験出来ません。現役時代は何でも出来るように感じますが光陰矢の如しで、卒業の時は自分の期待した何分の一しか出来なかった事を知る人が殆どです。少しでも有意義な部生活を、又少しでも技術的に優秀になるためには、学生馬術を経験したOB諸兄から学ぶことは大切です。札幌には歴代の多く

の主将がおられますし、よく会う機会があると思います。現在はあまり馬上におられる人が少ないので実際に技術を披露することは難かしいかもしれませんが、現役諸兄への助言や注意は出来まじし、諸兄よりはるかに馬術を見る目は広く、判断力はすぐれていると思います。特に上級生になるにしたがい難かしい事が多々出てくると思います。学生馬術をつき進める者は誰れも多くの壁を越してきたのですからその経験は貴重です。又現役時代の写真等を見せてもらい、自分の今の技術と比較検討することも一つの方法です。障害飛越については小栗君という優秀な教師が部の近くにおりますから是非彼の技術を学び、多くの批判をおおぐ事は有意義だと思えます。

(3) 他大学との交流を

昔から「井の中の蛙大海を知らず」と申しますが、積極的に乗れば乗る程、馬術では反面、自分達の殻に閉じこもりがちになります。自分の騎乗している方法が他大学と違っているからと鎖国主義をとらず、是非、武者修業を行なうべきです。方式の違いはどこでもありますが、本質的には馬に乗るのですから馬の動きを見れば技術の優劣はすぐわかります。自分の調教した馬しか乗れないようでは馬術とは言えないのではないのでしょうか。地理的に数多くの大学と交流する事は難かしいと思いますが、畜大というすばらしい馬術部が同じ道内にあるのですから、単なる顔見せや、のれんの中の交歓ばかりでなく、互に馬上で冷静にしかも敬しく技術を較べあうことは必要だと思います。私事ですが昨年十一月に加藤正昭君の結婚式に招待され、久し振りに帯広の土を

踏みました。なつかしい顔ばかりでその夜は遂に馬術部部室で合宿となり、翌日畜大の練習を見せてもらいました。遠征に主力選手が行ってしまった一年生、二年生が中心でしたが、その騎座の強さ、バランスのよさは北大の三年生と優劣つけがたく、畜大の強さの秘密をOBになりやっと知りました。帯広での畜大OBとの交流も思いがけないものでしたが、馬術部生活をやってきて本当によかったと思えました。

現在乗っている三重県の倶楽部でも七帝戦を経験した東大、名大の諸兄と馬にはげんでいます。馬術全体のレベルから見れば七帝戦は貸与馬競技でもあるし、低いものですが、学生馬術、特に北大にとっては一番大切なカッブではないかと思えます。それは昭和十二年以来、馬術部生活を経験したものが皆持っている共通の話題ですし、四〇年史のアルバムに見る四〇年間の七帝戦カッブの歴史は同時に北大馬術部の歴史でもあるからです。よく言われた自馬競技に他貸与馬競技は言をもたらずという事は池内先輩を始め、東京OB会の方々、競馬会の方々の御尽力でなくなったのですから、是非とも永く続けてほしいと思えます。昨年の成績を見るように自馬に強ければ貸与馬も強いのは当然です。

(4) 部報を活用しよう。

馬術部は四〇年の間に数々の多くの名選手を生み出しました。諸兄は先人の歩いた道を深く研究する事により、自分の技術の向上に役立てて下さい。その意味で部報を活用してほしいと思えます。私は入部以来の部報はすべて保管してありますが、最近馬に乗るようになって、大変参考になっていきます。特に自馬責任者と

なつた人々は自分の乗る馬ばかりでなく現在もう馬術部にいない馬でもその馬の調教記録を始めから終りまで目を通すことは大変勉強になります。又、先輩各氏がよく原稿にあるいは葉書に書かれていふちょっとした言葉がヒントとなる事が多々あります。私がおざつと調べた主に技術的な文の資料を終わりに書いておきます。最近、創作のページがありますが、そのような文をのせようと思ふ方々は是非一度三浦清一郎先輩の「不帰の季節」を始め、四〇年史の文章で目を通してもらいたいと思います。馬術部生活の中に立派に詩がある事を知って欲しいと思います。いたずらに目的のあやふやなものに部報をしないようにしてほしいと思います。

技術的な参考文献

調教日誌は部報の中心となるべきものですからここでは省略しました。

- S 三九年 鎌田先輩 「T君への手紙」
- 〃 滝沢先輩 「馬場馬術入門」
- 四一年 山村君 「総合馬術」
- 〃 岩坪氏 「伊太利式と総合馬術との関連」
- 〃 近藤 「馬場馬術の教育法」
- 四四年 千葉先輩 「馬術」
- 四六年 八木先輩 「学生馬術の限界」
- 四八年 東園先輩 「こぶし」
- 鎌田先輩 「小文」

(5) 馬中心の馬術部活動を

馬術部での活動は四年間であるため、いきおい学年による断層（技術的な波と解釈して下さい）が出来がちです。そのために毎年一定の成績、活躍が馬が出来ないこともあります。部に入った以上、誰もが上級生になって団体を始め、大きな大会に出場したいのは当然の事と思います。しかし調教不十分な馬を調教者が最上級生とて、多くの費用と日数をかけて出場させることは成績如何よりも、本質からはずれているのではないかと思います。調教がくずれる事は次の代により無駄なエネルギーをかけさせる事になりますし、部全体のレベルにも影響してきます。苦しい事かもしれないませんが、縁の下での力持ちとなる世代も又、部発展には必要です。試合に出ることだけが学生馬術の本質ではありません。互が互丸となって目的につき進む姿こそ結果はどうあれ、本当の学生馬術ではないでしょうか。そのような意味でも、長い目で部全体の馬と部員を教育、訓練していつてくれるコーチが必要だと思います。

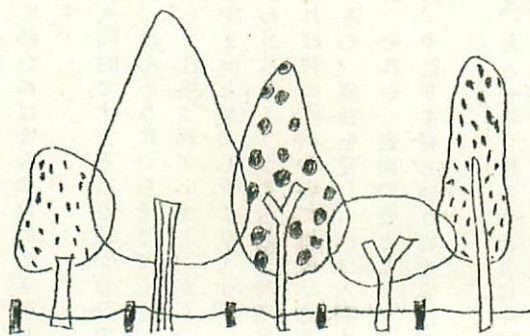
学業の都合や経済的、肉体的理由で人より長い間大学に在学する部員の方もいると思います。そのような方々は四年間で学生馬術にピリオドを打ち、是非、長い馬術の道に第一歩を踏み出してもらいたいと思います。学生時代の榮光にキズをつけたくないためか、いかに多くの優秀な選手が口頭馬術でお茶をにごしている事でしょうか。学生馬術のようなはなやかさはありませんが、地道に騎乗する事により真の馬術の喜びを味わえると思えます。

馬場馬場に興味を持っておられる方もいると思いますので、最後に一言つけ加えたいと思います。馬場馬を作るにはまず騎手が

感覚をとらえねばなりません。それには本物の調教がしてある馬に乗る事です。学生時代だけが積極的のいろいろな所へ行つて教えてもらえる特権がありますので、是非優秀な馬に乗り、優秀な人に教えてもらうことが必要です。馬場馬の調教は長い時間と忍耐がより多く必要ですが、行えば行いほどその面白さにひきずりこまれる事でしょう。

以上とりとめもない事を多々書きましたが、取り越し苦労ならば安心です。互に馬という不可解な有機体と共に馬術の道をつき進みましょう。北海道はますます寒くなると思いますが部員諸兄の健闘を祈ります。

(S五〇・一・一〇)



自己紹介。他己紹介

卒業生の部 Ⅱ 神様の巻

晴れて卒部される諸兄、四年間御苦労様でした。でも「卒業Ⅱ卒部なるもその逆必ずしも真ならず」が馬術部に於ける宿命的な公理でありまして、まだまだ頑張ってもらわなきゃなんのです。

景山博文兄

文学部中国文学科

この一年間主将として、選手として、または部員の良き相談役として（特に異性関係について）よく努力されました。ほんとに御苦労さまでした。

「あなたの体全体から湧き出るようなやさしさ、それにあなたが笑うとちらっと見えるあの素晴らしいやや出がちの前歯の輝き。あなたの面影は永遠に私の胸の中から消え去ることはないでしょう。あなたも私を一生忘れちゃいやよ。」チョン子より

馬術部の最後の年を主将として立派に務めてくれました。特に個人として動くより部の柱となって動かねばならぬための苦労は並々ならぬものがあつたと思います。

元々、彼は情が深くてあまりに人間的です。そんな彼が自分の感情を押し殺してやっている時は、ほんとうにつらそうでした。それに、彼の行動は下からも外からも注視されていましたから。しかし、彼はそれを少しも外に出すまいと努力したようです。

コンバの席では、まったく訳のわからぬような事もし、滑稽に見える姿を晒したのですが、それは彼の本当の姿ではないと思われます。本当は、一人になって考え、孤独を愛し、かつ人間も馬も愛したのではないでしょうか。それが、表面の姿としてチグハグに見えたり、誤解されたのは、やはり主将という責を負っていたからのような気がします。

そんな彼も、部は卒部出来ても、あと一年、馬の代わりに中国語をいやが上にも愛していかねばならぬ状態を作ってしまったました。

吉野勝之兄

農学部林学科

北海道へ渡って来てから、はや四年経ちました。試合の遠征で各地へ行ったり、林学科の実習であちこちへ出かけたりしましたが、北海道は雄大ですねえ。卒業までに一度、自転車一周したいと思っています。習慣というのは恐ろしいもので、部生活を離

れた今も、どういふ訳か朝五時か六時頃目が覚めてしまします。又、朝メシ前に運動をしないと一日中メシがまずいものですから、早朝マラソンをしています。朝焼けの中で、朝の冷気を腹一杯吸えるという事は、実に幸せな事だと思ふ昨今です。

大阪の茨木市という余り聞かない所から来た人で、第一印象は笑うと目が無くなってしまふということです。この人の良い所は、人の善さと図太さを兼ね備えていて、親しみ易いという所です。北武号に騎乗すると、あの太目の重い馬がよく前に出ます。きつと脚が強いのでしょう。しかしその併走かどうか解りませんが、両足の膝と膝とが離れていて余り見た目に恰好の良いものではありません。またこの人の悪い所というか特技といつてよいのか解りませんが、ごく微量のお酒がいつも催眠剤となつてしまふ、コンバで寝ることの早いことといつたら右に出る者はありません。また聞くところによると、この人は大変なフェミニストでその程度は馬術部一なのではないかということです。それから麻雀が好きでよくやっているようです。学校の方は農学部林学科砂防工学教室とのことです。とにかくこの人も馬術部生活四年間をやり抜いた人のひとりで、その功績？は高く評価されてよいのではないでしようか。

昨年北日本学生のヒーローである、中障碍一走行目、さんざん苦勞(ただこれだけの言葉で表現しては失礼だと思ふが、適当なものか)でこないしてゴールしたあの微笑、二走行目だめだった後の肩の落ちた後姿、続く総合鞭片手によれよれの北武を元氣

付けたヘルメット姿、全日本をかけた余力、もうここまできると僕たちには何も言えない。人間の生きた、裸の何かを一コマ、一コマに見せてくれた兄である。四年間御苦勞様でした。大阪生まれ、ジャンパーと学生ズボンとヘルメットの似つかわしい兄でした。

相川 宗 巖 兄

農学部林学科

馬術部の秘めたる名物男ももうすぐに卒部である。彼は今まで酒を飲んでも平然としたものであったが、卒部以来、酒に飲まれることもあるとか、ないとか。何もいわずしぶさで押し通してきた彼ではあったが、最近の心境はいかに。今でも心に残る名場面は恵迪寮でのコンバで「モズが枯木で」の歌を歌つた時である。その時思つたものである。なかなかやるじゃないか——。

囁めば囁むほど味がでるとは、この方のような人を言うのではないでしようか。一番いい飲みっぷりで、本当に酒が好きなのでしよう。コンバでひとり、コップ酒をあおるとき、男の悲哀を感じさせる。簡単に思いを口に出したりはしない。綿の入ったはんてんをはおって、札幌の冬がよく似合う、暖かさを感じさせる人です。

私は、不器用な人間です。手先もだけれど、もっと根本的に、生活態度が不器用なのです。つまり、今ある生活がすべての物だと思ひ、それをがむしゃらに追いかける。それで、少しでも苦しくなると、すぐ憂うつになる。特に、私の理想は大きく持つ方にしていきますから余計です。頭が固いのもかもしれません。

結局、私の馬術部に居た時の生活がこんな方でした。以外と、視野を大きく持ち、一歩後退して考えれば、もっと余裕あるすばらしい生活を営めたかもしれません。それに、何か新しい事も得られたでしょう。

でも、こんな事を言うからといって、私は決して悲観はしていません。かえっておもしろいのです。世の中には、不器用な人が大勢いると思います。その中に、私も入れたような気がしたのですから。そう、今この文を読んでいるあなただって、不器用な人間の一人かもしれませんねえ。

学校の方もクラブの方も人並み以上に頑張り続け、長崎の産からか、北海道の冬の寒さを堪能せんとしてか、部屋のご真中を占める最新型ポット式石油ストーブも所在なげの顔をさせたままにしている。とにかくストーブをつける時は、人を呼んで点火式をするという、とこれは真偽保留。

そんな訳で、夏の頃から体中がむくみ始め、これはてっきり冬の準備の皮下脂肪かと思ひきや、ドクター曰く、「重傷です。急性腎臓炎です。帰って寝てなさい」。この一言で、夏の試合中病

を押して苦しそうに頑張った兄もついにダウン。逢々長崎より恐い恐いおかあさまが迎えに来られ、こぼした言葉以下の如し。

「まあ信じられません。こんなに洗濯物をためて、一応整理したのですが、ぼんとうに。もう大分捨てました。」これを長崎弁でかんで含めるように私に語りかけ、思い当るものもあり、唯小さな声で相槌を打つことに終始するのが精一杯。母親は怖い。以上江口一家の紹介でした。

馬術部近代まれに見る俊才、根性男もついに病いに倒れ、去年九月以来長崎の自宅にて療養しています。幌北荘の別館に住んでいましたが、雨は洩る、すきま風は入る、ワラジ虫はわくという幌北別館独特の酷な環境は、この野人にも耐え難いものだったのかも知れません。しかし、彼はきつと、あの根性で病いを克服し、不死鳥の如く甦るものと信じます。

佐伯 久美子姉

農学部畜産学科

部員のお母さん兼お姉さんみたいな人です。姉を見ると、なぜかたきたてのごはんとあたたかみそ汁を思い出します。馬にも乗らず、影での努力の四年間。縁の下の力持ちとでもいいましょうか。女一人で切りぬけてきた感じですが、やさしさの中に秘められた根性。まさに、良妻賢母の要素たっぷり彼女です。

彼は男の中の男です。彼は逆境に強い男です。彼は今函館の水産学部馬術部にいます。彼は今水産馬術部の主将です。彼は今、日黒記念を取った馬ダイバレード号に乗っています。彼は今燃えています。彼は今闘っています。水産馬術部発展のために。彼は煙草もよく吸います。彼はお酒も飲めます。彼は男の中の男です。でも彼は未だに二年生です。

おそらく、また行かない（行けない）のではないだろうか、というすべての人の期待を裏切って、とうとう昨年の九月、疾風を残して函館へ去っていきましました。あんなにかわいがってもらったトキ、今は阪上兄への未練をふり切って、今年の試合に賭けるべくがんばっています。函館でもやっと自馬をもつことができたらうな。ダイバレードという大仰な名の、しかし名前負けしない名馬だそう。阪上兄は、主将として、また自馬の調教に日夜がんばっている。やっと貫禄のできた兄ですが、いつもいっしょの新野嬢にはやられっぱなしとか。男の真価を發揮するのはいつたいいつになるのでしょうか。

札幌で生まれて、札幌で育ち、今年で二十二回目の春をまた札幌で迎えるというだけなのに、この胸のせつない疼きはどうかしたことでしょう。まるで高校生の頃の片思いのように、拳大の涙のかたまりが、喉元までこみ上げてくるのです。それは、空腹時の胸苦しさにちよつと似ています。思えば、馬術部に入部した春からずっと、寒さがゆるんで暖かい日射しの頃になるたびに、感じさせつなさのようです。そしてこの思いはいつも、新入生が雪だけの水を含んだ馬場で馬に乗っているイメージがつきまといます。最近、こんな感傷をどうしようもなく困っています。

安定感とたくましさを感じさせるバックシャン。男かな？と、誰でも思うでしょう。しかし、ここで判断するのはまだ早い。ちよつと声をかけてみて下さい。あなたの判断が誤っていたことにすぐ気付くでしょう。ふりむいた、そのにっこり笑顔は、あなたをしばし見とれさせ、彼女に何かを語りかけさせるはずです。そして、彼女の甘いささやきを聞くやいなや、あなたはもう、彼女のとりこ。チョコレートみたいな甘いムードに、あなたは酔いしれることでしょう。でも、彼女はこれだけではおわりません。時として、馬に勝る安定感とたくましさを感じさせるのです。男にしても女にしても、きまる人です。（これ、ほめてるのかな？）

正月のある日、十七条で彼女に会いました。南からわざわざ部屋の近くまで来て、寄らないとはどういうことなのでしょう。ひどいわ。彼女とも別れです。就職(?!?)おめでとうございます。未だに未だに理解できないひとです。もはや、彼女みたいな人には会えないでしょう。記憶の中に、一コマ一コマの映像が乱れとび色濃くこそなれ、薄らぐことはないこの胸の内、いたすらな、いたすらな、



現役部員の部 Ⅱ スーパーマンの巻

添 田 昌 一

三年目

ついに出来ました色男、かつては三流芸能人といわれ、バクロウのおやじとまで言われ、それでもなおかつマイペースで……乱れながらも今に至る。十で神童。十五で才子、ハタチ過ぎればただの人を逆さに歩む私である。まだハタチにはなっていないのですが、成人式を楽しみにしています。若き身の上ではありますが、この世の憂いを一身に背負ってきた私です。去年は人生を憂い、最近は何物かを憂い、明日の世界はどうなるものかと常々心を痛めております。まあ早く言えば現実を直視し、虚構の世界は信じない私である。

ともすれば感情的になりやすい我々であるが、彼は湿気をもたない冷血さでも言おうか、そんなものを備えている。顔色すらかえずに奥深く正確に見ている。よく昔、恵迪のベットで伴に夜を過ごした。なんでこんな生活を……ということに集中したが、とどのつまりはいつも好き以外何物でもないということになって眠りにつくことになる。いまだに彼はこの原点をはずれずクラブをとらえているようだ冷静に、冷静に。

このような彼を我らの支柱にもつことを誇りに思うとともに、安心してついてゆけるのだ。是非二年連続優勝ねらってもらいた

い。彼がそれをやるところに面白さがある。馬が好き、ただそれだけのことで集まってきた人間の代表として。

馬術部の現主将。昨年までは部の作業隊長をしていました。彼は先頭に立ち、その計画性、行動性をいかになく発揮していたようです。特に、スマイルをもって、いろいろの障害を乗り切っていたのは見事です。それが、全日本学生馬術大会でのあの活躍を生んだのではないかと噂はないかなあ。

表面的に評価するのはもうやめにして、その内面はどうだろうか。とにかく、今の現役部員の誰よりも長く生きているだけあって苦労したせいでしょうか。包容力は大いにあります。しかし、人間の重量感を感じられません。尻が軽いということもその一因ですが、時々アホみたいいな事もするからでしょう。まあ、それがおもしろい所ですが。

今年も愛馬スターライト号といっしょに頑張ってくれと思います。最後に、彼は農学部畜産学科に属しています。

本 村 洋 文

三年目

北海道の冬は毎年寒くなっているのであろうか。一年目の冬、「まだまだ」と思っているうちにいつの間にか春が来てしまった。二年目の冬、同じ苦の寒さが身にしみ、朝の練習は辛かった。

しかし、毎日北軍に乗れるという新鮮さが、寒さをしばし吹き飛ばしてくれた。そして三年目の冬、北軍との毎朝の練習が、私にとって空気のような存在となった今、寒さは容赦なく襲いかかる。そう言えば、北軍も明けて十五才。お互い老体に鞭打って頑張ろうな。

馬術に賭けている人。マゴマゴしているとストンキョウな声を張り上げて喝を入れられる。ガンバリ屋である。そこを見込まれて先年度主務を遂行せられた。本当に忙しい仕事だったのでしょボヤクことしきりであった。学部の方も適当に休むなら良いでしょうに、ついつい度を越し悩んでいる模様。

水 野 豊 香

三年目

現在獣医学部三年、いまだ浮上できず低空飛行を続け、さてこれからどないしたらええもんか、悩み多き時節になってきた。

学校では田崎先輩の後をつぎ外科学講座に居るので馬匹、飼育を担当している。簡単に言えば馬体異常に際して、その馬と獣医との橋渡しをする役目である。これがいとも容易なことのように思われるが、小池先生の学校での宿題と、クラブでの責任あるいは、獣医学的に言いと騎乗不可能なところ部馬である以上ある程度は無理をする場合が多々ある。これらの板ばさみになりながら

であるゆえ、どえらい困難なことになってしまふのである。御理解願いたい。昨年も大きな試合の前、へたすると出場さえ危ぶないほどの大きな負傷をやったが、この場を借りて小池先生以上外科の先生たちにお礼を言いたいと思う。つまるところ小生と学校とのつながりは今のところクラブを除けばなくなつてしまひそうなのがしてならない毎日を送っているわけである。ほんとうはこれではだめなのだろうが……

近江 彦根藩出身

昭和二十七年十二月十八日生まれ

身長 1 m 78 cm

体重 63 Kg

近視、 ややO脚

夏まではやはり低空飛行続行である。

性格は豪快、剛毅、豪放、とにかくごつごつくていいのです。

ほくも少しはあやかりたいナ。フェイスはとみると、このごろは、ハンサムな天ちゃんにいくらかあやかかって多少よくなつたようです。とにかく男らしくてやさしくてこの人の右や左にでる人はいないのである(???)今年こそは自己に對する弱味や甘さはぐつと殺してヤクザから任侠の人へと変身されんことを祈る

えつ、ユーさんについて何かしゃべつてくれたいの?こまわつたわね、アタシなんかよりもっといい人がいるじゃない、ホラ函館にいる、何ていつたつた?そうそうアキコさんて方、あの方に聞いたほうがいいんじゃないの。あらつ、あなたアキコさん

御存知ないの?あなた馬術部員でしょ、知らないはずないわよ、あなたテンブラねきつと、近頃の北大生って馬術部員だつていえばモチると思つてんだから、そりゃ馬術部って北大運動部の華だけどサ、でも大切なのはネ中身なのよ、馬術部員がモチるのはネ、中身がカッコいいからなの。外面はどうだつていいの、ユーさんを見ればよくわかるでしょ。決して女の子が一目ボレするようなお面でもないわ。でも彼やさしいのよ。強いから、男らしいからこそ、やさしいのね。ああ私もだえそう。そこにアキコさんはホレたのね。あつまつて、そうじゃないわ。彼が先にホレたんだわ、だつて一時期そうとうオタオタしてたし、今でもテレフォンコールがないないとわめいてものすごくあれるもの。

柴 沼 俊

三年目

少女趣味なるものを心底から憎みつつも、時として異状なる興味を示す。世間では些細とされる事に一生の一大事の形相を呈するものの、一方嬉しいことには、何の屈託もない赤児の如き表情の一変するのを抑えることはできない。おお何という非凡かつ繊細なことであろうか。

さらに続く、流行を追うことを嫌うという持論により、こたつテレビ、じゅうたんの貧相三点お茶の間セットを持たず。しかし、ベット、洋服ダンス、ステレオ、食器棚、テーブル、机、トース

ターと文化的生活には事欠かない。唯、ベクトルはビール箱の集合体ステレオを簡素に最たる代物、洋服ダンスに至っては言うまでもなく、さらに悪いことに全て、只もしくは並寿司一人前程での貰いものなのである。しかし、本棚だけは、自分で買ったというプライドもある。

或人曰く、兄は「コンピューター附三輪車」

また曰く、兄は「喜劇を役廻るハムレット」

それぞれにユニークな性格が実にユニークな組合せで兄の人の柄の中に調和しています。

部随一のおかしな人じゃないですか。もし馬などしななければ学部の優等生となるべき人でした。部の中で分析的理論家としての、また、方程式を立て電算機をフルに活用して滞納金支払額を割出してゆく会計としての兄に、それは推して知ることが出来ます。そこには全く、コンピューターとしての几帳面さと論理性をみることが出来ます。しかし兄に於ては、その論理を論理として徹底してゆくことは出来ません。ここに兄の優しさと心の寛さといつたものがある。つまりコンピューターになり切れぬ三輪車がある訳です。殊に、こと自分の問題となるとこのコンピューターも思い通りには働いてくれないみたいで。論理が働いてちゃ部などやってゆかれん、とでもいうように。いくら悩んでも兄は悩み切れるものではありません。このハムレット、悲劇はお気に召しませぬ。

田中角栄氏は「コンピューター付ブルドーザー」でした。兄は

「コンピューター付三輪車」または「乳母車」です。三輪車はブルドーザーほど大きくはありません。しかし、小粒ながらもブルドーザーよりすぐれていらっしやる？

頭の回転と足がはやく、短い足で地球をしっかりと踏みしめ、ニコニコしていらっしやいます。

練習中は「コブシ」「コブシ」の兄。部室で小柄な男の人が走っていたら、それが兄です。

阿部一哉

三年目

三年間この機会にのみ、自分をふり返える。なんと単純な。

若干、分裂ぎみの気質を持ち、イメージと日々の生活の間に身もだえを繰返すのみ。去年と同じように今こそ立とう。死ぬまでカビのように生きよう。若いねほくも。

ボサボサの髪とめがね、それに黒いバック、何となく薄汚れた風体がトレードマーク。主務として学生部等を相手に悪戦苦闘されております。その素晴らしい行動力でもって善戦されることもしばしば。一見地味で、練習中も鬼となることはめったにないがしかしうちとけて話せば屈託なくって、実に厭味のない好感のもてる人。原始の生命が体のあちこちに宿ってそうな人です。

マネージャーになり、最近一段と忙しくなってきた兄イである。やはり岩手県の山中から出てきただけのことである。兄イにしかできない仕事も多いのです。また兄イだからできないことも多いのですが。とにかく最近兄イは変身してきております。マネージャーとしてまた三年生の、クラブの中和的存在で兄イの価値は大きいです。とにかく彼は一種独特の馬術生活を送っています。

ミッコさん、愛している。

横 沢 敏 夫

二年目

若 松 光 子

三年目

女らしさを求めつづけてはや三年、北大にさえはいらなかつたら、馬術部にさえはいらなかつたら、嗚呼、あの時に、やめさえしていたら いやいや、人生これ全てうらおもて、そのうちきつといいことがあるからね、じつとがまんの子でいるんだよ。と日々己をなぐさめ、甘やかして、残る一年、生きながらえる所存であります。

若松さんは、現在女子部員多く中唯一人「女性」と呼べる人。姿、言葉、そして騎乗ぶり、ほんとうに体中から女の臭いを発散。料理、洗濯、そうじなんでもOK、今すぐにも花嫁に。だれか立候補したら。なんとなくわざとらしいのもうやめます。三年目としてあと一年、下級生に女子も多数いるのでぜひがんばってください。

サボリ屋である。①講議の無い時もしくは無からしめた時は、部室又は下宿でフトンの中。②クラブの活動面に於いても、鞍数は少いし、仰せ付かった馬具備品の大役も持てあましている。

③人付き合ひの悪さ、筆無精はもちろん家にさえ電話をかけない。人間の集った所が苦手、これは不潔な事も一因かもしれない。結局めっちゃくちゃで、何のために生きているのか悩む始末です。

現在、馬具、備品の係としてはりきつておられますが、兄のまじめさはみんなが認めるところであり、その口から発せられるユ一モアあふれる抑揚と音律には、いつも一時の心の安らぎを感じています。これからも、後輩のよき相談相手となつて下さい。

眼鏡の奥でギョロリと光る大きな目。しかし一端笑うと、たちどころに目尻にしわをよせて消えてしまう。温和な人である。激しているのを見たことがない。しかしその割にはデコに栄養をとられるのか太らない人である。いつか〇〇兄といっしょに髪を五分刈りにしたとき、あれで学帽をかぶったら一世代前の高校生、貧弱な秀才を思わせる風貌だった。しかし、あの生活力、壊れた

ものを兄に頼めば、どういふわけか使えるようになってしまふ。部室に行つて真先に目にはいるのが自転車修理している兄だつた、ということがよくある。おとなしいけれど馬術部にあつてかせない人である。

荒井 隆

二年目

あきもせずまだいるのが私です。教育部帯「上尾」で生まれ、小学校から高校、大学と他に類を見ない程、教養をつみ現在にいたっています。それでも自己満足は敵とばかりもう一年教養をつむ事にしました。

去年は田中角栄に女をとられ、今年は金権にものをいわせても思いきや、やはり勉強が好きなのでダメでしょう。

正しいものに○

これを書いた人 ①アラン・ドロン、②草刈正雄、③タカシ君

個性豊かな二年目の中にあつてひとときわ目立つ人。相手が年上であろうと誰であろうと思つた事を言えるくらいしつかりした考えを持ち、正しいと信じる事には絶対妥協しない人。特に最近「ぼくちゃん」から「わし」へと変貌を遂げつつあるようで、四月からは新入生を迎えて鬼の三年目として活躍されることでしょう。

かの有名な「暴動の町」上尾からやってきました。かつて上尾駅舎が「善良なる」市民によつて襲撃されたとき、我々は心の片隅で何かひっかかりを感じながらもその「快挙」に快哉を叫んだものでした。ベッドタウンである上尾に固有の市民性ともいつたものがあるとは思えません、不思議なことに彼にもそのフアナティックな資質がみえるようです。忍耐を重ね遂にその怒りが爆発、東映ヤクザ映画みたいで、金子信雄親分のようにおたおたしません。彼はいざとなれば思い切りよくタンカを切つてみせます。しかしコンパで寮歌を唄うときの腰の動きはエロです。そして酔っぱらうと自ら称して「タカシ君」と言いますがこれもただだけません。隆くんのような人がそんなことをやってはいけません。体つきも細いし顔も白くデリケートなようですが根のところは太くしてしっかりしています。インテリやくざとして部にかかせない存在でしょう。これからもその資質を失なうことなく大胆に行動して下さい。

神戸からはるばる北の地札幌に来てからはや二年去ろうとしている今、時の推移の空虚しさの中で感慨にふける暇もなく、これからの北大馬術部を背負って立たなければならぬその責任の重大さを身近に痛感し、かつ「さあ、これからだ」という現在の部の意気をくじかないためにと毎日技量の向上に励んでおります。しかし現在の自分を冷静に見つめると一沫の不安が残るのを禁じ得ないのですが、ここまで来た以上もう「前進あるのみ」という気概をもって将来ぶつかるべき障害に向かう決心であります。果たしてその結果は如何？

一見どこに視線を投じてよいのか難かしい男ではあるが、乗り出すと実に快活な人物である。口からは流暢な関西弁が飛び出しかき鳴らすギターからは井上陽水のメロディーが流れ出るのである。まあ一口で言えば肩の凝らない野郎とっていいだろう。神戸のおぼっちゃん、汚ない学生服を着て北海道で一生涯懸命馬に乗ってますよ。

私は、以前から馬に乗るような人はみんなスマートな人ばかりだと思っていました。その夢を無さんにも破ってしまったのは桑田兄の存在でした。「ああ無情」「レ・ミゼラブル」しかし今年四月に新入生が入部する時、私を見て失望することは明らかだろーと思えます。私も今年から一日二食にしてがんばりますから、どうか桑田兄もがんばって下さい。お願いします。

平野 雅裕

二年目

自己、その様なものももし存るのなら、先づはそいつを心ゆくまで喰ってみたい。
常々その様に考えつつ、空腹感を抱いて毎日を送っている私です。

微笑みはひとのころをなごませ、ゆとりをあたえ、おちつきをとりにどさせます。こちらが笑いかければ、とろけさせる笑いをいつも返してくれます。ものごしのやわらかさは、決してとりつくろったものではありません。きつと、自分で一つ一つ体得してゆかれたのだろうと、わたし一人確信しております。

均衡も大事です。大事なところでシビアです。今は二年目だから、馬術部生活はあと二年、来年一年は羊蹄のことだけ考えてやるだけやって、最上級生になったときは、きつと、下級生の事、部の運営の事など、よりよいものを求めて、考えつつつけてくれるでしょう。大いに期待しております。

高校へは通わず、検定試験をもって高校教育を卒業し、北大へ来たという変わった経歴の持ち主。彼はおそらく、生協の食堂では定食は食わずアラカルトばかり食うタイプの男なのでしよう。定まったコースを歩まないという意味において。体育会では柴田兄なき後の実力者として活躍してくれていることでしょう。

佐野 淳 之

二年目

「後悔先に立たず」常にやるが遅いのである。行く末の己にとっては一つの事を究めることが重きを成すのは解っているのだが、現在の信条としては今出来得る全ての可能性を確かめ雑多な事に手を出すことが自己の確立に役立つし、またそうせざるを得ない心境ともなっている。而して為す事がいいかげんになり、葛藤を生じ再び過去の自分に逆戻りする傾向を逸がれ得ないのである。「十年遅いんだよ」と言われそうだが今シャーロックホームズに凝っている。

彼は、私たちの先輩、只今二年目であり、同じく恵迪寮の先輩二年目であり、同じく教養の先輩、三年目二年になられる方であり、外見は、いつもにこやかであり、その毛深いことからヒゲ、などという俗称をもつ一見、ダンディな方ではありますが、その私生活に於ける机の上などのだらしなさは、他に例を見られ

得ぬ存在でもありません。

彼は、部生活動以外にも、広く活動分野を持つためか、出席は、あまり良くない。ン？

酒に強そう、そうでもない。女にもてそうでもない。何かやりそう、ウーン、シコシコ、その程度、という方であり、ひどいことを書かれても、おこるような小心者ではないとだけは言っておきます。

石川 淳 子

二年目

自己紹介文を書こうとして、レポート用紙を何枚、まるめたとか。ラブレターでも書きたい。要するに、自意識過剰になるわけです。この分では、一生かかっても書ける見込みはありません。それほど、奥深い人間でもありませんが……。

二〇才の彼女は物思う年頃なのだろうか。最近やせたようだ。でも陽気な姉は姉とも思えず、友達みたいである。だからよけいそうなのかもしれないが、ニコニコ笑いながら割とキツイことをスラリと言う。お酒も強いし、最近なかなか頼もしい。姉も鬼の三年目になるべく準備中なのだろうか。

二年目唯一の女の子。

猫のためにわざわざ魚を買ってきて料理するという、やさしい心の持主。その時まで魚なんか焼いたことがないということからもわかるように、静岡は良家のお嬢さんなのです。そんな彼女も近頃は彼のコーチを受けたらしく、メキメキ料理の腕を上げ、越冬隊員に御馳走を残していつてくれたのです。なかなか並の女の子じゃできないよ。

山 川 恵

一年目

単純、明解、丈夫で長もち。鈍いせいだか声のせいだか「おちついている」とみられたこともかつてはあった。されど一端ボロがでたと、安定感のある足を持っているにもかかわらずよくっくりかえり、よくぶっつけ、様々なところでドジをやらかす。今年は何んとか「おにいちゃん」と呼ばれることから脱却しようかと考えている。

彼女の男性的な面は誰かが書くでしょうから、私は女性的な面を書こうと思ったのですが、なんとというか、やはり異性的なところがやたら目につくのです。彼女は、負けずぎらいのがんばりやで決して弱根ははかす、馬術部における女子のタイプの一つだと思えます。そしてすべて0.0.0.1なのです。はっちゃんにならな

くても男子諸兄についていける貴重な存在です。また、食べる割には太らないので、基礎代謝量も男性並なのではないかと推察する次第です。

可愛げのある顔に似ず、「女」を感じさせないスーパーウーマンである。鞍敷は一年目のトップをゆき、その上昇は、あたかも北隼号がヒッカケたごとく留まるところを知らない。教養の成績が一年目で一、二位を争う才媛である。頭が切れそうである。特に自らを表に出すつもりはなさそうだが、一見凶々しくも見える不敵さは随所に表れる。一年目男子の軟弱で、至らぬ部分を一手に引き受けてなお余りある（？）頼もしい存在である。しかしねえ……。

大 東 美奈子

一年目

十九年間も札幌に住みながら、この冬を迎えてやっと、札幌でこんなに寒い所だったのかと気がついた私。

淡々とした生活の中で、入部当時のはつらつとした自分を見失いかけて焦ってはいても何もせず、時として自分が女の子であることすら忘れてしまいそうになる今日此の頃です。

札幌北高校出身くん 藤女子短大国文科くア一年目一年くん
姓は大東 名は美奈子くオ

彼女は、例外的にも、藤女子短大生でありながら、主将にたのみ込んで、入部して来たのであるが、大した者でもない。なんて言っているのだからか?! いいだろう。身長 一六五、しりが大きい人。ただそれだけ。でも、おにぎりを作ってくれた。いい人である、としておこう。

憧れの藤の園より咲き出でし一輪の花も、もろもろの野草の中にまじわれれば、青草の背高き陰にその色を隠し馬糞の匂いの中にその香を秘めて居れどもその奥床しきは、人知れず繕う糸に通いまた自ら焼きしクッキーに然り、実にクッキーに籠められ、はたまた、一滴の酒にほのか赤らみたる頬にて顕著なり。

笠間 淳子

一年目

私、自己紹介はたいへんが手なのです。己を知るなどという大それたことは私の裁量の内ではありません。強いてクラブへの期待はどうかといえ、楽しい部生活の中で馬と接していければ幸いとのたいへん謙虚な気持ちであります。しかし、馬術部にいる限り馬術の上達を望むのは人の常であり、私も結果はともあれ、努力を惜しまずがんばりたいと思います。

背は高からず、足は長からず短かからず、顔は丸からず四角からず、鼻は低からず高からず、髪毛は長からず短かからず、この位で姉の容姿は御想像がつくかと思えます。濃厚な性質で、その柔和な微笑は部内で評判です。姉は一年目の中では最も早い初落馬をノーザンクロスにて挙行、又羊蹄で三分間に三回落馬という早技もやっけてのけたのです。今年の姉の挙動に注目しましょう。

とても明るい女の子です。ともするとちょっとしゃべり過ぎる嫌いがありますが、しゃべんとして部室の隅っこに座っている時よりはずっといいです。以前は速足をやってよく鏡を外してしまいましたが最近は何もないようです。下から注意されると「はい」と返事をして一生懸命馬を動かそうとする姿はなかなか美しいものです。誰かにひやかされてもブツとふくれるのはやめましょうね。こんな優しい人にそんな事を言う方が悪いんですから。ちょっとほめすぎたかな?

水 井 とく子

一年目

自分のことを、明確、卒直、短的に他人に紹介することができたら、如何なる困難が人生に存するや。今、何をこの紙面に書き連ねてもウソになりそう。どうか他己紹介を読んで下さい。

部外では鮮かな原色のファッションでカッポする。とても汚なさを誇る部員の一人とは思えない。しかし三十数条の彼方から練習に来るあきれた女である。概に学部移行をすませ、地物に籍を置く才女。惜しむらくはもう少し色気があればと思う。いや見る人が見れば？。

ほっそりしたボディに、南国調のルックス。いわば、個性派美人。彼女すでに○オ。何もかかわらず、顔の乱れも忘れて、ゲラゲラとよく笑う。そして、悩みを持つ様子とは、ほど違い口調で、「もう、いやなるナア」という。彼女の辞書には、深刻という文字はない。それでも言いたくなるくらい。でも彼女は先日、このように言っておられました。「この世にはとかく誤解が多いでしょ？ 水井さん？」

半浦 剛

一年目

近頃、己の精神力の無さに泣いています。北海道の冬は偉大です。しかしその偉大な北海道の冬に打ち勝った先人は幾多といるのです。僕もがんばらなくちゃ。一年目の半浦です。

ひと口に言ってアクのない男である。酒の弱さはかの吉野兄と争うが最近なんとかいりウキスキーを買い込んで紅茶にたらし

はシニコ楽しんでいるというから通ではある。生まれついで競馬キチで競馬新聞だかダービーニュースだか忘れたが欠かさず買っていると聞く。彼の勧めでおやじさんが競馬を始めたというからそうとうなものである。そのうち大穴でも当てておこつてくれることを期待してやまない。

この馬の名前は誰々さんですよと言った具合に競馬馬のことに關しては、よく知っていて自動車レースとは、ちょっと違うものの同じ類の關係からかチェックのズボンが大好き。パッチまでチェックとは、とまあこれは大嘘ついでになかなかの好男子で着こなしに至っては、今までの馬術部からは逸脱の傾向ありということ、自動車の免許は取ろうとするし、まあとにかく若いのによくやるとほとほと感心する。

それもそのはず、東京は北の外れ、練馬の畑の中で大根とともに白く正しくすくすくと育ち、世間の汚濁を知らずしてこの歳になった、そんな遠い遠い未知の世界の万年筆でしか縁のないエリートだから。

なに、冗談の後はコーヒーが旨い。

左海 登志雄

一年目

ありとあらゆる美辞麗句を並びたてても、私を表現しつくすこ

とは困難であろう。

クラブという小さな社会の中でいつもうごめきつづけている自分、及びまわりの人々とのかわりを見つめていきたい。

我部のベストドレッサーの一、二を争う程の着こなしを示す。特にあの帽子がいいと思いませんか。

おっとりして、のんびりと優雅で、彼の育った淡路島とは、さぞかしと、はためには想像させる人。でも時々何を見つめているのかわからない奇妙なまなざしをして、はためには恐ろしくなる人。その上、誰も持っていない彼だけの笑い方の様式を保持し続けている人。

忘れもしない、四月十一日体育会主催新入生歓迎大集会で、焼酎のコーラ割りを持ち、新入生に飲ませるはずを自分達でカバカバあけて、「誰でもいいから連れて来い。特にカワイコちゃん」そして、どこのだなたがスカウトしたのか風采の上がらぬ若造二人、その一人が淡路島の呉服屋の御曹子左海登志雄であった。入る早々、焼酎に荒れる馬術部の内幕を知り、夕方はモツラでオ祝いのビールをオパチャンから載きウレしそりにワマそうに、かと思いきや不安顔で進められるままに杯をかさねていた。カワイイボンボンだった。それが今は……………。

本城敬文

一年目

なんとなく北大に入り、なんとなく馬術部に入り、なんとなく日々を過している。こんなことでええんやろかと自問しても、結局は部屋に足が向く。クラブという鎖を断ち切ろうと思ったことないこともないけど、なんとなくやめるのはいややもんね。今に大阪人のど根性を見せたる。

なにを申そう。彼こそ部員一同をトレンセンの一室にとじこめ、原稿遅しと、苦しめた本人なのです。しかしながら、その責任感の強さと忍耐強さには、みんな感心しないまでも、驚嘆の色を見せるのです。また彼は、スキ、スケート、バトミントン、その他あらゆるスポーツをみごとにこなし、そのスポーツ万能ぶりは、馬術においても発揮されることと思えます。最近は無許もとり、これからの活躍が期待されるばかりです。コンパでは、あんまりはりきりすぎないように!!

一見軟弱そうに見える彼であります。実際にはなかなかやります。彼のマラソンの強さには定評があるし、北武のサブチームも軽くこなしました。それに何と言っても、彼は何と実には、あの部報委員長なのです。それに、かの獣医学部を目指しています。馬術に関しても積極的です。何となく、大阪人のバイタリティを感じさせる男です。

一面彼は繊細なところもうかがえるようです。何でも、子供のころはバイオリンを嗜んだとか、いっしょに酒を飲んで、なか

できるものがあるようです。(ほめすぎ?)

でも………燃えよ 珍々竹林!!

竹林 圭介

一年目

森 巖

一年目

どこといってとりえのない馬鹿な男ではありませんが、一人になれば人間の心の深遠さ、不可思議さに悩み、鏡を見ては「嗚呼、今日も又しわが一本増えてしまった」と嘆く毎日です。私のクラブ及び授業の出席率の悪さは正にそこにあるわけです。他人に対するおもしろいやりというかやさしさは大切にしようと思っておりません。てなことを憶面もなく書けば赤面せずにはおられぬ純朴な人間です。

真面目なのか不真面目なのか、本気なのか冗談なのか、正体不明の人です。澀い顔をして「医進です。」「将来、医学部のホープで……」なんてことを言う人です。

お酒が目茶苦茶に強く、恵迪のバックカスの次点とか。しかし、クラブのコンパではあまり飲みません。きつと何かあるのでしょうか。

十月の試合で見事優勝し、北大に竹林あり、日本に竹林ありと全世界の注目を浴び、華々しくデビューした彼も最近では恵迪サボリ組副組長の任務がお忙しいようです。

人はボクのことをナマコ屋、ナマコ屋とあざ笑うが、決して悪徳業者でもなんでもない。苦勞の多い中小企業なのだ。しかし大業を出て親父の後を継ぐかどうか、まだ決めてない。将来の瀬戸内海のことを考えると、北大水産生のボクとしては、地元民衆の声を感ぜない訳にはいかない。ところでボクの希望はアメリカでもインドでもどこでもいいから発展途上国へ行つて働きたいということだ。一度は日本を出てみたいと思ひのだけれども、親のこともあるし、ボクとしてはここがつかいところなのだ。ところで螢雪時代でも畜大の写真を見て(雪の上を馬に乗って走り回るのた、いいなあ)北海道へ行つたら馬術部へ入ろうと思つていた。しかしもうそろそろ二年目だしなあ。バカになつて馬に乗らにゃ。

岡山から来たという彼。その独特の岡山弁をしゃべり散らし、部室内での彼の影響力は大。一見高校生(もしくは中学生?)に見られる彼の胸中に秘めたる闘志は如何に? 人間は体じゃないよ。心だよ。フレイ / フレイ / もすり /

軟弱なくせに馬と数学に呪われていっちょまえにドッペッてしまった。希望と絶望とに明け暮れた大学生生活も二年が過ぎた。単なるイジけた生活から、今、半ばシラけた生活を送る。サトリを開くのもさして難しくないかもしれない。

同じ一年目からもコケにされがちなそんなほくでも、時にはシラケた頭の片隅で、ほんの一時でも死にもの狂いで生きてみたい、なんて考えることだってあるのです。

兄との出会いは、一年目お返しコンパの時であった。

飲めもしない酒を飲み部員の見守る即席ステージの壇上で「僕、長屋です。」と叫ぶやいなヤステージから落ち失神してしまった。この時以来兄の脳の機能は日一日と悪化の一步をたどったのである。その結果もう一年確実に二年生として授業にも出ず一日中部屋と生協の間を行ったり来たりすることである。

彼を最初に見た人は、口をそろえて、かわいい女だなあと言うのが、今までの経験的事実です。事実その辺の女よりはよっぽど女らしい顔です。でもその容ぼうにもかかわらずやっぱり彼は男であります。きれいな格好したところを見たことがあります。でも彼は人のいい男です。人のいやがることは進んでやりません。学校をさぼって、国体の貨車積、馬匹を務め、全日学にも行きませんでした。クラブのために自分を捨てられる男です。

彼はいつか学校へ行っているのでしょ。食堂以外の校舎

内で会ったことがないような気がします。しかし部屋に行けば必ずいるのです。

矢田 明

一年目

静岡県立非山高校出身 北大一年目一年

馬にまたがり早、一年が過ぎ去らむとしている。今日、私は、運動不足に苦しんでいる。一七〇cm身長に六七kgの体重を持つ、こまったことだ。書くことは、あまりないのですが、一つ私は、一人でやるスポーツが好きです、二つ女の子が好きですが、クラブには、そういう女の方がおられないので、目が散らなくて良いと考えている。こんなもんだべや!!

とにかく彼はさみしがり屋なのだ。いつも陽水の歌ばかりです。彼にはしかし女がいるのです。静岡と札幌に一人づつ、マフラーをもらったとか。しかしなあ坊主よ、真の男というものは、練習をさぼることではないのだよ。スキーばかりかじりゃダメだぞ。キミにはキミのいいところがあるよ。キミは気づいてないらしいがとにかく彼はさみしがり屋なのだ。

恵迪サボリ組々長としての責務を充分に果していらっしゃるようですよ。練習の誘いは大低お断りになるようですが、遊びの誘いは未だかつてお断りになつた事がなく、罰当、作業も物ともせず、スキーに行つてしまふという力と度胸に満ち溢れたお方です。

山本裕介

一年目

生まれは広島県の呉、その後小樽、山口、和歌山、富山と渡り歩き、出身校は結局、富山の高岡高校です。中学時代は野球、高校時代は柔道をやっておりました。

どういふわけで北大に来たか、ポブラ並木が見たいのと、獣医学部を志したので。なぜ馬術部に入ったか。獣医を目指す限り、馬に慣れ馬の心理を知っておきたいといいたいが、本当は、安く馬に乗れるから、貴公子の気分を味わえるのではなからうかと思つたから（卑しい人間はとかくこう思いたがる）。後者は実に甘かつた。

さて僕という男、本当は軟弱なのであります、合宿マラソンではいつも後の方。ポロ出しは遅いし、作業はどじばかりやらからず。果して、二年目になれるのでしょうか。部内での一般の見解はかなりきついです。何と、人相が悪いといつも言われます。まるでやくざか何かのように。そして、僕がクラシック音楽を好むと言えば「お前には合わないよ」と笑われたり……驚嘆の色を

表わしたりします。

いずれにせよ、自分にも得体の知れない人間でして、これからも何をやらすかわかりません。ただ自明なことは、酒に目がないことぐらいでしょう。

彼は一年目の中では一番入部が遅く、したがって鞍数も少ないのだが、そこは生来のがんばりで帯畜の冬合宿に参加、益々たくましくなつて帰札しました。高校時代は柔道部で、腕前は初段又酒の腕前は四五段程ある酒豪級、これも高校時代からだろう。今年はきつとたのもしい二年生になってくれるでしょう。

生れは、あの有名な暴力団の町、広島。彼の風貌を見るにつけ、「仁義なき戦い」の殺され役にピッタリ、と思うのは果して私一人であろうか……。もつとも、ひと皮むけばまだ子供。酒を飲ませりゃ、黒い顔をまっ赤に染めて、それはそれはかわゆいのです。しかし、その又奥は今だ明らかならず……大器晩成を感じさせる男である。

北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名		住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
永井 一夫	初代部長	札幌市南2条西12丁目	060	011 211-2435	北大名誉教授	
高松 正信	第二代部長	物故				
黒沢 亮助	第三代部長	物故				
太奈 康光	第四代部長	函館市湯川町2の8	042	0138	函館高専校長	
松本 久善	第五代部長	物故				
半沢 道郎	第六代部長	札幌市北6条西12丁目	060	221-2286	北大農学部名誉教授	
河田啓一郎	現部長	" 北区北24西13	065	711-7470	北大獣医学部教授	内 5232

特別後援会員

氏名		住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
野間口英喜		東京都杉並区永福2-36-19	166	03 321-7617	大田区羽田空港2の8の1東京航 屑食品(株)日航ホテル社長 川崎日航ホテル社長	571-4911
滝沢 政雄		東京都目黒区目黒1-1目黒台マンションA-501	153		国策観光開発(株)取締役社長	24-5431
原島つる子		札幌市北2条西27丁目	063	011 621-1451	原島洋装院院長	
庄内 貞夫		" 白石中央53の3	062	011 861-2504	歯科医	

氏名	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
武田 忠幸	札幌市南6条西20丁目	063	011 561-3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711-7214
小野 忠	札幌市北18条西5丁目	065	011 721-1526	北大モーターズ社長	
片奇 藤	// 北18条西6丁目 静山荘	065		北大農学部大学院	
佐合 義弘	札幌市西区手稲西野410番地	063		札幌市民生活協同組合理事	
加藤 和男	東京都太田区南馬込6丁目29番-1号	143	03 751-4601	フンマン株式会社	
田中 昭志	札幌市琴似4条5丁目国鉄宿舍7号	063	011 731-8489	札幌鉄道管理局	
岡沢 尹大	(在カナダ)				

後援会員(卒業生)

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
中野友二郎	昭4 農農	東京都多摩市桜ヶ丘3丁目33の4	192-02		科学教育研修センター	
平山 常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ヶ谷町1222の19	230	045	日本海事業興業	
中谷 勝紀	5 工機	杉並区桃井1-15-23	167	370-3450	ヤンマー船舶機器(株)	542-0211
間 克市	6 農畜	新冠郡新冠町節婦71-4 日高軽種馬共同 育成センター	059-24		地方競馬全国協会参与	
岩垣 駿夫	6 農農	神奈川県川崎市多摩区生田6983-173	214	0557 48-9530	東京農工大農学部教授	
河崎 秋三	6 農畜	八王子市高倉町1552	192		千葉県小林牧場	
藤居金太郎	7 農化	(在ブラジル・サンパットロ)			漁業	
永松 四郎	7 農畜	太田区北千束1-58-9	144	03 717-3484	永松商事	
半沢 道郎	8 理化	札幌市北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	

武田 朝男	8	農畜	品川区旗ノ台 6-1-2	142	03 781-1097	日本製酪協同組合	264-8421 ~4
東園 基文 (7 主)	9	農機	目黒区五本木 3-30-1	153	711-8877	宮内庁侍従職参事	400-0451
田畑 武夫	10	医	札幌市南 5 条西 2 丁目	060	511-3738	田畑産婦人科医院院長	
植村 勘一	10	農畜	東京都世田谷区等々力 2 丁目 13-11	158		久保田建設 K K 顧問 世田谷区大原 1 丁目 13-6	467-2361
本田 恒康	10	工機	東京都港区六本木 7-2-2-402	106	405-6867	プレス工業 K K 常務取締役	044 26-2580
久葉 昇	10	農畜	岐阜県各務原市那加織田町 148	504	0588 82-5632	岐阜大農学部教授	
加藤 英夫	11	医	清水市有東坂 554-19	424	0543-45 -6329		
脇田代子郎	11	農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸 6366	251	0466	三菱化成工業常務取締役 千代田区丸ノ内三菱ビルディング	212-1570
大道 明德	11	理化	東京都狛江市覚東 320-6	182	428-4817	大迫技術士事務所	480-9717
高杉 直幹 (9 主)	11	理化	札幌市北 7 条西 13 丁目	060	251-3720	北星大教授	
吉見 一郎	11	農教	東京都狛江市小足立 620	182	489-0491	雪印乳業 K K 常務取締役	357-3111
渋谷 周平	11	農畜	東京都渋谷区代々木 1-22	151		日本アイスクリーム協会(社)	
森山 武雄	12	医	青森県南津軽郡浪岡町国立岩木療養所	038-13		国立岩木療養所々長	
滋賀 秀明 (11 主)	12	医	港区白金台 5-3-20	108	441-7844	大同製鋼 K K 東京診療所々長	901-4169
小村 達夫	13	農生	岡山市足守 861			岡山大理学部教授	
山下 正亮 (12 主)	13	農畜	札幌市白石区本通 818-135	062	861-5667	酪農学園大教授	
石井 昌長	13	農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地 14-10	273	0433 62-9785	アルコール海運倉庫 K K	
小笠原義顕	13	工電	川崎市多摩区宿河原 2223	214	044 82-3609	旭電気工業 K K	
樋本 勝登	13	農経	東京都杉並区西荻北 2 の 27 の 8 ライオンズマンション西荻第 2 D-608	167	395-3548	中央技能検定協会理事	
松平 梯	13	農農	神奈川県秦野市鶴巻 963-18	257	0463 77-2116	成城グリーン・プラザ	484-6781

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
黒沢 良雄	13 農経	茅ヶ崎市浜竹4-6-30	253	9467 70-8676	日本長期信用銀行	211-5111
小田 昇	14 農畜	東京都目黒区柿の木坂3-4-18	152	424-8666	秀興不動産社長	
池内 武夫 (13 主)	14 農畜	東京都世田谷区若林4-22-5	154	414-0361	日本中央競馬会理事	591-5251
中尾 敦司	15 工敏	船橋市西習志野2丁目23-10	274		大日本鉱業KK	211-2671
西村 雅吉 (14 主)	15 理化	函館市松陰町1-3	040	0138 51-1624	北大水産学部教授 (水産化学科)函館市港町	41-0131
木谷清喜貞	16 農実	金沢市片町2-2 20号木谷ビル	920	0762 21-5041	瓦土建	
石井 和彦 (15 主)	16 農畜	鳥取市湖山町1960-258 合同宿舎RCKI-201	680		鳥取大農学部教授	
河原 清作	16 工土	小樽市忍路町塩谷村	048-25		自営	
熊沢 洸	16 農実	札幌北区北13条西3丁目 公園北13条アパート701	065	742-0392		
関 義人	16 医	秋田県湯沢市御用地町4-18	012		関内科小児科医院	
高木 史朗	16 工敏	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡1244	311-31		波崎高等学校校長	
林 健爾	16 農実	札幌市手稲福井49-13	063	661-9707	ホクレン米穀事業部	
半沢 宏	16 工機	札幌市北6条西12丁目	060	261-7455	北大工学部教授	内 2191
伊関 悦郎	16 工敏	函館市宮前町213	040		函館水産高校	
間池 世夫	16 農実	名古屋市千種区丸山町3-24	464		旭化学工業KK	
福光 幸彦	17 医	札幌市豊平区平岸3の14	062	511-1843	福光延寿堂院小児科	

岡田 光夫 (16主)	17	工木	札幌市南7条西22丁目	060	562-2223	札幌市役所建設局長	211-2500
石川 恒	17	農畜	札幌市北24条西16丁目	065	721-0052	北大獣医学部教授	内 5231
白取 善三	17	農実	弘前市大字薬師堂熊本19の2			大成軽ブロックKK社長	
小林 五郎	17	工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64	255		沖電気工業KK特殊機器開発部次長	
山根 乙彦	17	農畜	鳥取市湯所町2の422	680		鳥取大農学部教授	
前田 正義	18	農実	名古屋市昭和区菊園町2-5	466		雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸 進	18	農林	名古屋市昭和区菊園町2の5		052 851-3762	三井木材KK名古屋工場工場長	
小池 栄一	18	工土	札幌市藻岩下475	060	581-2290	北海道電力札幌支店土木課長	
平井 宏和	18	工電	東京都町田市玉川学園8-18-9	194	0427 26-6231	日本電気衛星通信開発室	044 41-1111
安部 孝	19	工電	" 小金井貫井北町3-19-5	184	0423 81-4100	高見沢電気製作所	
坂井 弘	19	農化	Hyderabad-30A.P. India(在インド)			AICRIP-Rajendranager	
田口 暢茂	19	医	札幌市北22条東18丁目	065	781-3621	道立千歳病院	
稲葉 恵一	19	農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	569	0726 5-2759	日本油脂KK	
福岡 邦泰	19	農農	夕張郡長沼町錦町公宅		01262 2-0124	空知支庁長	
大手 英夫	19	理化	東京都新宿区西大久保2-219	160	865-4523	東邦シートフレームKK	272-2811
岸田幸三郎	20	農化	大阪市東淀川区山崎町145-1	533		自営	
富坪 治郎	20	農畜	東京都福生市能川福生住宅537	198	0425-57 7107	東京都畜産試験場長	0428 31-2171

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
羽島 栄治	29 土木	横浜市港南区上水谷町4058~20		052 771-3513	日本鉄道建設公団名古屋支社	052 211-1451
小林 正英	20 農畜	東京都杉並区阿佐谷北3-26-10	166	337-3196	東京都経済局農材部畜産課長	212-5111 内 2883
木全 幹雄	21 農化	東京都杉並区清水1の6-8	167		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎 治雄	21 工治	東大阪市西堤623狩勝工業	577		狩勝工業KK 大阪市城東区放出町2179	
宇津見千之助	21 農畜	栃木県小山市中央町2-6-1	323			
上野 新次	22 農農	新潟県東蒲原郡津川町2区県立津川高校	959-44		県立津川高校	
和田 晴	22 農畜	東京都渋谷区富ヶ谷2丁目2-13	151	467-2815	北海道東京事務所参事	581-3411 内 300
宮崎 利昭	22 工機	東京都港区高輪1-5-33-312	108		三井物産事業部港区西新橋1-2-9	
武田 祐幸	22 理地	横浜市磯子区洋光台1-28-6	235	045 773-1581	国際航業KK地質部長	262-6221
田之上家久	26 農水	不明	181		日本放射線同位元素協会	
後藤 義英	28 農獣	札幌市円山西町2097	063	621-0962	札幌市環境衛生事業所長	
斉藤 善一	28 農畜	弘前市若党町79	036		弘前大農学部教授	
鈴木 敏夫	28 農畜	虻田郡洞爺村字洞爺町四町内公住	049-58		洞爺高校	
度植貞一郎	28 農畜	名古屋市千種区不老町名古屋大学農学部 畜産科	464		名古屋大農学部	
齋野 保	28 農畜	札幌市農平区羊ヶ丘北農試宿舍G-5	061-01		北海道農業試験場草地開発部第5 研究室長	851-9141
永井 重翁	28 農獣	水沢市新小路2番地雪印乳業KK水沢工場	023		雪印乳業KK水沢工場	

梶谷 晴男	28 農水産	大阪府生野区新今里町5の17	544	06 753-0887	大蔵エンジニアリング(株) 西宮市津門西口町9-15	0798 33-5008
吉本 正	28 農畜	千葉県松戸市定元648	271	0473 63-1221	千葉大園芸学部松戸市松戸648	
古谷 昌司 (26,27主)	28 農畜	浦和市別所3-38-10	336	0488 61-5073	古谷製菓KK技術部	0488 31-5873
下飯坂 隆	28 農畜	東京都中野区白鷺2-17-3 和田方	165	385-3269	日本軽種馬登録協会	429-5101
佐藤 敏	28 農畜	川崎市岡上510-28	215		雪印乳業KK技術部	268-3111 内588
福島 務	29 医	福島市三河南町7-17	960	0245 34-7223	福島医大産婦人科教授	0245-23- 1111内360
阿部晃一郎	30 工敏		792-01		住友金属敏山	
鎌田 正人 (28,29主)	30 農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	057	01462 3-284	KK鎌田牧場	
田中 浩	30 工治		541			
正富 宏之	30 理働	美唄市東5条南7丁目	072		専修大学美唄農工短大	
斉藤 成俊	31 農経	札幌市北1条西30目 円山公宅3号	063	621-4770	北海道信用農工連	
佐伯 和夫 (旧石塚)	31 獣	白老郡白老町萩野第三石山	059-08		昭和工業KK	
大久保利彦 (30主)	31 獣	札幌市東区本町1条2丁目	065		雪印乳業KK北海道支社酪農課 札幌市苗穂町6丁目36-108	741-1111
加藤昌太郎	31 理物	国分寺西町けやき台32-103	185	0423 741-1111	(財団法人)日本総合研究所科学部 次長 千代田区平河町2-16-15	03-265- 2371内356
加藤 元	31 獣	東京都杉並区久我山3-7-27	168	334-1286	(北野ビル) ダクタリ動物愛護病院	344-3536
千田 哲生	31 獣	東京都世田谷区弦巻5-26-3-302	154	425-3462	中央競馬会競走馬保健研究所研究 二課長	429-2311

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
岡本 洸	31 農生	草加市松原4丁目D58-204	340	0489	十条製紙KK東京事業所	
荒川 清	32 経	札幌市中央区界川町495		23-9907	札幌トヨタ北区支店	711-7191
榎本 幸人	32 理植	兵庫県津久郡淡路町岩屋神戸大学理学部 岩屋臨海実験所	656-23		神戸大理学部岩屋臨海実験所	
岡部 満雄	32 農畜	札幌市西区琴似八軒5条東5丁目 道公宅206	062		道農務部畜産課肉牛振興係長	231-4111
斉藤 実	32 経		930		不二越鋼材工業KK	
宮沢 寛	32 農林産	逗子市山ノ根3の12の10	249	0468 71-2487	日本揮発油建設部	045 731-1261
伊藤 亮	33 獣	岩手県岩手郡滝沢村菓子岩手種畜牧場 菓子牧場	020-01		農林省岩手種畜牧場菓子牧場	
池田 環	33 医薬	札幌市中央区大通西23丁目円山ビル601	063	621-4251 円山ハウス		
栗原 康	33 工敏		180-03	0424 72-9064	中小企業庁鉾山石炭局	511-1511
渡辺 俊弘	33 工応化	上尾市大字上字堤下359上尾シラコバト公園 アパート17-401	362		北炭化成工業KK	
柴田 久男	34 工電	札幌市手稲町西野937	063	661-8709	北海道電力火力部火力工事課	
今田 哲	34 農化	兵庫県西宮市苦楽園4番地27-18	062		武田薬品KK	
生田 勝一 (33主)	34 経	習志野市袖ヶ浦3-4-5-202	275	0474 74-5206	読売新聞社千葉支局	
菅原 照雄	34 文哲				毎日新聞社北海道支社	
土井 敦	34 農畜	札幌市北2条西27丁目	063		ホクレン牛乳課 北4西1北農会 館牛乳共販課	251-1905 261-8525

山本 智	3 4 水	斜里郡小清水町 7	099-36	0152 62-2573	小清水高校	0152 62-2813
栗津健太郎	3 4 水	札幌市西区発寒 8 3 4	0 6 3	661-1092	銀座屋(製パン業)	
村山 哲	3 4 経	神奈川県鎌倉市梶原 1 4 7 1 グリーンハイツ F 3 - 2 0 1			本田技研工業	
樋口 正明 (32 主)	3 4 法法	東京都世田谷上馬 5 - 2 3 - 8	1 5 4	424-9496	東京都衛生局医務部	212-5111 内 2582~4
千葉 幹夫	3 4 獣	東京都世田谷区弦巻 5 - 2 6 - 4 - 2 0 6	1 5 8	426-1858	中央競馬会馬事公苑普及課長	429-5101
中村 美幸	3 4 経経	東京都中野区鷺宮 6 - 3 1 - 9	1 6 5	999-2443		
佐伯 雄二	3 5 農畜	群馬県館林市大字成島 2 5 4 4 森永住宅 3 1	3 7 4		森永乳業	
本橋 幹久	3 5 農畜	(在サンパワロ)				
奥野 静子 (旧片山)	3 5 文英	札幌市北 2 条西 2 3 丁目	0 6 3	611-8414		
小長谷善高	3 5 水	川崎市中原区山丸子天神町 7 3 N H K 寮	2 1 1	0424- 93-0791	NHK	
田中 紀介	3 5 農林産	静岡県清水市宮代町 6	4 2 4		富士合板 K K 研究所	清水 34-1271
長谷川邦夫	3 5 法法	立川市栄町 5 - 2 8 - 1 公社 2 5 0	1 9 0	0425 35-7461	岩崎通信機 K K 経理部	
門奈 駿	3 5 医	茅ヶ崎市旭ヶ丘 1 3 - 4	2 5 3	0467 82-5744	国際興業航空サービス部	281-2341
森本 悌次 (3 4 主)	3 5 農林産	埼玉県八潮市 8 条 1 5 6 7 八潮団地 1 8 - 5 0 4	3 4 0	0489 95-0951	自営	600-5330
稲垣 修一	3 6 理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかげ 10 の 10	4 7 0 - 2 2		大同製鋼 K K	
佐藤 典子 (旧佐藤)	3 6 医	(在アメリカ)			北大病院第 2 内科	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
高林 嬉古 (旧高階)	36 医	横浜市磯子区岡村町238	235	045 751-4431	虎ノ門病院	583-6811
河原 紀夫	36 理地	西宮市天道町20-16-302	663		アジア航測KK	
湯浅 正之	31 農畜	船橋市坪井町600-59	274	0474 65-3742	伊藤忠商事KK畜産課	662-5111
吉田 亨	36 工術	八王子市打越町715-203	192		高砂熱学工業KK技術部	251-7121
千葉 祐記 (36主)	37 農畜	小平市喜手町860-1 小平団地 2-4-405	180		雪印乳業KK販売促進部調査課	357-3111
広岡 暢夫	37 農畜		188		全販連	279-0411
森 弘津	37 工精	名古屋市北区辻町2の36 大隅鉄工所第一寮	462		大隅鉄工所	
四柳 智久	37 医薬	(米国留学中)			東京大大学院(薬学部)	
木塚 信次	37 農畜	横浜市戸塚区名瀬町784-10	244	045 531-5468	湘南食品KK研究室主任	045 891-1921
伊藤 公一	37 医	虻田郡俱知安町北4条東1丁目 俱知安厚生病院	044		俱知安厚生病院	
大場 善明 (35主)	37 文史	東京都足立区栗原2-6-14-104	123	883-8245	読売新聞広告部	242-1111 内 4134
鶴見 好博	37 理化	東京都葛飾区金町5-19-3	125	600-2186	三菱瓦斯化学KK	600-2131
小島 杏介	37 水	横浜市神奈川区菅田町2872	221		淀橋保健所	368-6186
小山 毅	37 教	世田谷区南鳥山2-6-8-106	157	300-4775	専修大文学部	044-95
市川 瑞彦 (瑞彦)	38 理物	札幌市北区新琴似10条4丁目 からまつ荘	065	762-0609	北大教養部物理学教室助手	内2691, 5427
小出 秀達	38 医	大阪市阿倍野区美章園1-8-24	545			

宮崎 健	38	文露	横浜市北区日吉町128産経日吉住宅	222	044 63-2501	夕刊フジ	
玉沢 一晴	38	医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田 1013の2	349-02	0488 82-3436	山之内製薬KK中央研究所	460-2171
岡田 征至	38	法	札幌市豊平区西岡138-35			北海道拓殖銀行事務部 札幌市南8条西8丁目	521-4111
志水 一允	38	農林産	世田谷区太子堂1丁目5番地15-308			農林省林業試験場	711-5171
清水 洋	38	農畜	横浜市港南区日野町藤ヶ沢5791 藤ヶ沢住宅7-105			農林省畜産局食肉鶏卵課	在オキナワ
原 重一	38	農農	北区赤羽台4-17-18-1103	228	908-0503	交通公社調査部	内 3575 211-3211
堀川 芳男	38	農畜	東京都中野区上高田2-16-9	164	385-8685	KKギョーりあん代表取締役	385-8585
実吉 峯郎	38	医薬	(在カナダ)	150	461-5550	国立ガンセンター研究所	
新原 輝久	39	理地	東京都北多摩郡狗江町泉1284	182		国際航業KK	
中村セツ子 (旧田中)	38	農工	東京都世田谷区奥沢6-24-14	158	702-1365		
恩田 正臣	39	農畜	群馬県勢多郡富士見村小暮2425 群馬県畜産試験場	371-01		農林省群馬畜産試験場	027288 7, 12
横沢喜美子 (旧入江)	39	薬					
小林 則子 (旧寺江)	39	農畜	札幌市北36条東6丁目	065		天使女子大	
高木 佑太	39	農畜	横浜市港区南綱島町500-4	222		台糖ファイザーKK	
小島 武	39	医薬	神戸市兵庫区山田町上谷上字上の開地 42の30	651-12		鐘ヶ淵化学KK	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
荒木 伸也	39 水	鎌倉市十二所98十二所アパート	248		自家営業	
三浦清一郎	39 教	東京都北区王子6~6RE203			東京都台東区上野公園12-43 国立社会教育研修所	03 823-0241
田村 雅英	39 工合	立川市柏町4-51-1柏町団地9-306	190	0425 35-1670	小西六写真工業KK 日野工場管材課	0425 83-1521
八木 正己 (38主)	40 理生	札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061-01	897-2109	札幌市役所公園課	2111-2532
野田 行文	40 獣	多摩市諏訪2-1-5-803	192		中外製薬総合研究所	987-7111
大木 誠示	40 理数	埼玉県入間郡富士見町大字鶴馬2824	354		ユニックKK	
吉田 賢一 (旧御坊田)	40 工治		241		日本揮発油KK	
守屋 正	40 工精	東京都大田区田園調布2-40第一桜ヶ丘寮	145		三菱重工KK東京製作所	
萩原 雅典	40 経	八王子小安町2-32,B-202	192	0426 42-9974	日立製作所中央研究所	0423 23-1111
滝沢南海雄 (39主)	40 理植	旭川市川端町11丁目美園マンション305	070			
松永 武彦	40 工電子	東京都小平市学園西町1211日立一ツ橋 社宅303	187		日立製作所武蔵野工場	
水野 佑亮	40 理化	北区北23条西13丁目南新川公務員宿舎 10-301		711-7568	北大結核研究所助手	内 5536
横田 肇	40 農化	東京都東村山市久米川町4-1496	189		明治乳業KK研究所	
菅原 弘	40 農畜	江別市南樹町1番地北海道職員アパート 1-408			胆振支庁農務課畜産係	
大沢 竜子 (旧 牧)	40 薬薬	新潟市関屋町2-242	951			

植木 迪子 (旧滝沢)	40 文独文	豊平区北野374の14				北大文学部助手	
松尾 英彦	41 水産	高松市太田下町2677の3	583			日魯漁業	
八木多賀子 (旧八木)	41 文哲	札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061-01	897-2109			
桜田 慧子 (旧大堀)	41 法法		062			北大法学部助手 退会	
黒沢 道雄	41 工機	千葉県八千代市八千代台東1の20の2 藤倉電線八千代台アパート402号	351			藤倉電線	
高野 文彰	42 農農	千葉県松戸市松戸1155 コマツマンション201 (在アメリカ)		0473 65-8281			
小栗 紀彦 (40 主)	42 農畜	札幌市北21条西13丁目合同宿舍新川 住宅518-53	063	741-7335		北大農学部助手	内 2576
近藤喜十郎	42 文史	名古屋市中区大須3丁目31-23	460			経営コンサルタント産業社会学 研究室	052 732-0335
高橋 昭夫	42 獣	野付郡別海町西春別駅前西町	086-03			別海農共中西別家畜診療所	
八木沢守正	42 理生	東京都目黒区大橋1-8-5 目黒第5コー ポラス2FL205号	153	462-1854		協和醸酵(財)微生物化学研究 所	441-4173
山村 勝	42 農林	米沢市東3-4-60				山形県農林部林務課	
加藤 正昭 (41 主)	42 工衛	帯広市大通り8丁目10	080			加藤家具店	
田中 倬	44 医	浦和市北浦和3-20-14 県公社		682-0567			
阿部 勝彦	43 農林	足立区千住東町2-21 千住東田住宅1-1205					
五十嵐 章 (42 主)	43 法	新潟市寺尾956-1				モービル石油	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
池田 統洋	43 工機	埼玉県上尾市原市965	362	0487 74-2051	東京芝浦電気KK原子力技術部 プラント技術第一課 東京都千 代田区霞カ関3-2-5 霞カ関ビル4階	581-7311
入江 圭	43 工衛	東京都調布市布田4-31-13 美和荘		416-7531	東京都庁	212-5111 内4722
高倉 宏輔	43 獣	鹿児島県新栄町19番5号動物検疫所鹿児島出張所	253	0992 54-1380	農林省動物検疫所	747-0267
降旗 正忠	43 工電			0474 31-5320	三菱電機KK	
狩野 和子 (旧仙波)	43 教	小樽市桂岡町274	047-02			
山本 紘明	43 経	大阪府交野市大字私部2206-63	576	0720 91-6711	三洋電機審査部鑑査課	06-901-1111 (内)471
浜岡 秀洋	43 工機	大阪市寝屋川市東大和6-5 浜明男方	572	0472 21-2509	三洋電機KK	
斉藤 勝雄	44 農機	札幌市澄川12	062	881-6281	ホクレン農業機械課	
田中 力	44 獣	水戸市石川4丁目4028-9	310		電印乳業KK花巻工場	
春田 恭彦 (43 主)	44 農畜	市川市若宮3-41-7 中山競馬場第一寮	272	0493 35-0504	中央競馬会中山競馬場	0473 34-2222
村井 弘一	44 農畜	室蘭市絵柄町217 協同飼料(株)社宅			協同飼料	
山本 進	44 水化	横浜市保土谷弘向町1723 栗田工業相模寮			栗田工業	
寺崎 弘恭	44	大阪府豊中市刀根山町4-98 近藤方	560		大阪大学在学中	
建部 雅子 (旧今井)	45 農化	豊平区羊ヶ丘1番地北海道農業試験場宿舎 C-7-1		851-5344		

小野 政則	4 5	農林	不明 名古屋中(川中津区) 3-12 区内	454	0542 61-0811	永代産業(株)社屋根所	
加藤 公敏	4 5	理化	福岡県大牟田市歴木4-10 米仙寮	065	711-6844	三井東圧KK	
橋口 庸	4 5	医	札幌市北18条西5丁目 五月荘	065	711-6844	北大医学部学生	
本田 徹 (44主)	4 5	医	小樽市黒沢1の10の10				
太田 清澄	4 6	農農	茨城県土浦市中貫25 日本住宅公団職員 住宅3の1号	300		日本住宅公団研究学園都市開発局	
堤 秀世	4 6	獣医	札幌市北27条西11丁目	065		北大獣医学部学生	
中寺 清久	4 6	工機	東京都豊島区千早町4-40 川崎重工千早町社宅405号			川崎重工	
松井 亮 (45主)	4 6	医	札幌市東区栄町501 宝栄荘			北大医学部学生	
今井 敏郎	4 7	理化	札幌市北3条西15丁目	060	631-1621	北大理学部学生	
大見 太一	4 7	文美	福岡県北九州市八幡区久喜町1丁目 障山2丁目10-29	806			
梶村 哲世 (40主)	4 7	獣	都内江東区亀戸7-40-15 第一製薬江東寮	136	681-8326 682-8667	第一製薬	
中村 慎一	4 7	水産					
榊井 明	4 7	工鉱	札幌市北20条東4丁目 北沢方	065			
田崎 拓明 (47主)	4 8	獣医	鹿児島県曾於郡未吉町岩崎3613				
近森 憲助	4 8	獣医	札幌市東区北12条東2丁目 森田登美男方	065	741-1753		
西村正二郎	4 8	農林	札幌市東区北12条東4丁目 北沢方	065	741-3753		

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
横山 豊昭	48 獣医	滋賀県栗太郡栗東町大字御園1028 東5-403号			中央競馬会 栗東トレセン	
南部 孝一	49 農農化	札幌市東区北20条東4丁目 北沢方	065	741-3753		
則近 彰 (48主)	49 文独文	札幌市北区北20条西7丁目 登別荘6号室				
相川 宗敏	50 農農	札幌市北区北20条西7丁目 幌北荘	065	741-5814		
江口 州志	50 理高分	札幌市北区北20条西7丁目 幌北荘	065	741-5814		
景山 博文 (49主)	50 文中文	札幌市北区北8条西9丁目 桑園学寮		742-7991		
佐伯久美子	50 農畜	札幌市北区北6条西13丁目 北大女子寮				
阪上 泉	50 水産	函館市中道町9 北大北農寮		0138-52 -1160		
常田 和子	50 工応化	札幌市中央区南25条西12丁目		561-5779		
吉野 勝之	50 農林学	札幌市北区北20条西7丁目 幌北荘	065	741-5814		

現 役 部 員 名 簿

氏 名	学年	学部学科	現 住 所	帰 省 先
阿部 一哉	4	経済	北23条西4丁目 静和荘	岩手県一関市弥栄字茄子沢123
柴沼 俊	4	理化第二	北15条西2丁目12番地 奥村方 (711-3973)	東京都渋谷区恵比寿3-38-22
添田 昌一	4	農畜産	北14条東1丁目 原田アパート	東京都稲城市矢野口37
水野 豊香	4	獣医	北19条西4丁目 弥永方 (711-2575)	渋賀県彦根市正法寺町231
本村 洋文	4	農産経	北15条西2丁目12番地 奥村方 (711-3973)	東京都中野区野方1-7-3
若松 光子	3	農畜産	北16条東1丁目 クラブ荘内	大阪府羽曳野市南恵我荘1-6-3
荒井 隆	2	文類	北区北20条西7丁目 田村方 (711-4852)	埼玉県上尾市仲町2-1-16
石川 淳子	2	理類	北区北19条西3丁目 藤原アパート (742-7894)	静岡県静岡市神明町10
桑田 壮平	3	衛生工学	北区北20条西7丁目 金木方 (711-7811)	兵庫県神戸市東灘区御影町城の前1438
佐野 淳之	2	理類	北区北17条西8丁目 恵迪寮 (742-7333)	神奈川県藤沢市鶴沼松ヶ岡1-10-12
平野 雅裕	3	法学	中央区南11条西23丁目	東京都目黒区南1-4-8
横沢 敏夫	3	農化	北区北20条西7丁目 幌北荘 (742-0658)	上川郡和寒町字中和480
大東美奈子	2	藤短大	西区八軒東5丁目 (711-5262)	司左
笠間 淳子	2	理類	北区北18条西5丁目 向田方	宇都宮市桜4丁目17-14
左海登志雄	2	理類	北区北18条西3丁目 遠藤方	兵庫県洲本市本町6丁目
竹林 圭介	2	理類	北区北17条西8丁目 恵迪寮 (742-7333)	静岡県富士市原田3-1153-9

氏名	学年	学部学科	現住所	帰省先
長屋 清隆	2	理類	北区北18条西6丁目 山田荘	岐阜市上土居743-53
半浦 剛	2	理類	東区北16条東10丁目 田中方 (741-2093)	東京都練馬区北町7-16-3
本城 敬文	2	理類	北区北17条西5丁目 ゆり荘 (731-7806)	大阪市天王寺区堂ヶ芝町14
水井とく子	3	理地物	北区北32条西9丁目 石神方 (721-8444)	長野県埴科郡戸倉町岩宮368-1
森 啟	2	水産類	北区北22条西2丁目 協和荘	岡山県備前市穂浪2853
山川 恵	2	理類	北区北21条西8丁目 さっぼろハウス(741-8515)	神奈川県藤沢市亀井野1850
山本 裕介	1	理類	北区北19条西4丁目 弥永方 (711-2575)	富山県高岡市青葉町411-1
矢田 明	2	理類	北区北17条西8丁目 恵迪寮 (742-7333)	静岡県田方郡大仁町宗光寺

編集後記

予定を大幅に遅れた発行となりましたが、今年も無事、部報が出来上がりました。このページをおかりして、御協力下さった先輩諸氏、並びに部員諸兄に感謝の意を表するとともに発行の遅延を深くお詫び致します。

やっと完成となり、今はこの大任を果し終え、少々の悔いは残るも、身体は、重責から解放された喜びにうち振えている。

本をつくるってむづかしいですね。

この部報に関しましては、何か御質問はございませんか？
なければこれで終らせていただきます。

部報編集委員

本城 敬文
半浦 剛
長屋 清隆
竹林 圭介
森 鼓
その他一年目

部報 第二十号

昭和五十年五月 発行

発行者 北海道大学馬術部

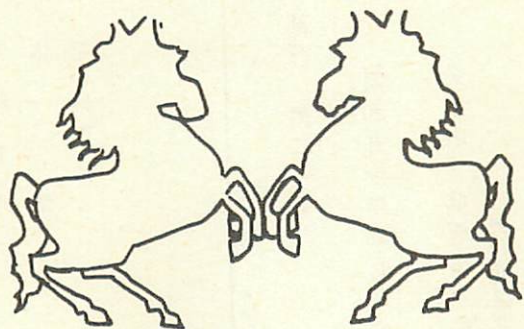
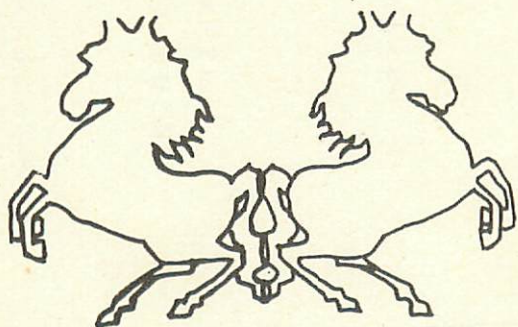
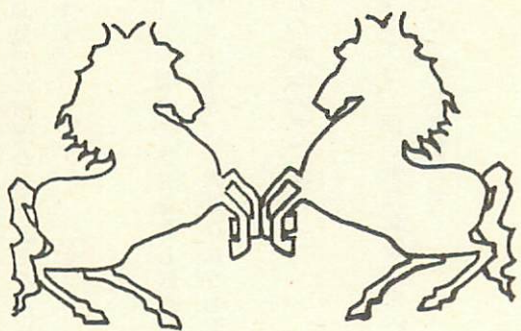
札幌市北区北七条西六丁目

北大体育会内

編集者 部報編集委員会

印刷所 北大生協プリント部

非売品



広告の
ページ

乗馬用長靴

スキー・スケート・登山靴
各種靴製造と販売

札幌加盟店

三浦靴店

札幌市南一条西八丁目八番地
TEL (代) (231) 0901

北海道名物

ジンギスカン専門の店

義 経 本 店

毎度御引立有難う御座居ます。60名
迄のコンパ、宴会が出来ますので御
利用願います。

札幌市北18条西5丁目

TEL 721-1723

義経本店

一人でしんみり
二人で仲良く
みんなでゆかいに

昭和の春 直営
三 鈴

南 5 西 4

亭北軒

モツラ

札幌市北16条西4丁目
TEL (711) 6450

庄内齒科

院長 庄内真夫

札幌市白石中央 五三の三

TEL (861) 2504

Coffee

味とかおりを
創る店



サッポロ北区北11西4
TEL 741-2345
741-3174

雑穀飼料商

渡部商店

札幌競馬場前(北13西18)
TEL 711-7034

太田装蹄所

札幌市東区東苗穂三八番の一六二

学生街の
軽食喫茶は
明るい店
明るい雰囲気
の
北大教養部前
軽食喫茶

エンゼル

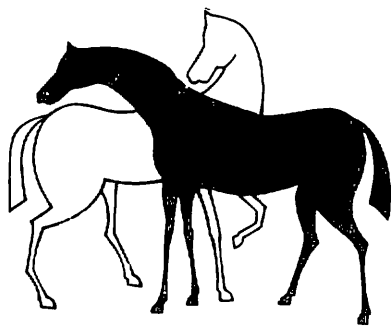
TEL 742-6180

馬具靴
製造販売修理

安くて丈夫

中野馬具店

札幌市北13条東1丁目石狩通
TEL (71) 八八七六



**takes good care of
person and horse feeling with heart
"sunbridge"**

札幌市豊平区平岸7条12丁目
札幌営業所

酒・たばこ・食料品・塩

土野商店

北18条西5丁目

TEL711-2575

回回
回回

ラーメンの

北龍

札幌市北18条西5丁目

TEL 742-1376

クリーンサッポロ!!自動車公害追放整備

札幌陸運局指定民間車検工場

北大モータース

札幌市北区北十八条西五丁目

721-1526

特製クリームぜんざい }
ソフトクリーム } あります
モーニングセット }

喫茶

イレブン

N17W 4 (18条地下鉄入口)

夏期 AM 9時~PM 11時
冬期 AM 9時~PM 10時

和洋酒・煙草・食品

川端商店

札幌市北17条西4

Tel (742) 〇三三八

江戸参

政壽司

割烹一品料理

本店 小樽市物見河原
電話 〇〇二二 〇〇二一
支店 札幌市南七条西四丁目
電話 (51) 〇四〇〇 (51) 二〇三七

くらしと健康を守る

市民生協

札幌26店・小樽3店・旭川4店

安全・親切・快適

全日空限定乗合・一般観光貸切・一般乗用の

北都交通株式会社

取締役社長 武田忠幸

本 社 札幌市東区北30条東1丁目 ☎代表751-1631
ハイヤー部 札幌市西区北23条西16丁目 ☎代表711-4181
バス部 札幌市北区北7条西4丁目東センビル内
(手配センター) ☎代表741-2222

日本中央競馬会

札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目
TEL (721)0461~5

場長 池 本 元 一